
盗賊ブレイブ@魔法剣士と妖精の都

ブレイブ&秋留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗賊ブレイブ@魔法剣士と妖精の都

【Nコード】

N0335D

【作者名】

ブレイブ&秋留

【あらすじ】

【ブレイブシリーズ5】デズリーアイランドから新たな仲間も加わり、大所帯になったパーティーは、既に完全な獣と化したカリューを連れてアステカ大陸へやってきた。ここは妖精やエルフ、獣人等、多くの種族が共存する大陸である。インスペクター以外の妖精を初めて見たブレイブ達は、高鳴る鼓動と好奇心を抑え、大陸中央にあるという、サン・プレイヤ教会を目指した。旅の途中で出会った妖精、ルンを連れて妖精の都ミルクタウンに向かうことになった。ブレイブ達のアステカ大陸での新しい冒険が始まる。

プロローグ

人が四人も並んで歩いたら一杯になる位の小さな通り。すれ違う人々の半分は恋人同士に見える。道の両脇には花壇が隙間なく並べられている。なんてメルヘンな通りだろうか。

街灯の案内板には『メルヘン通り』と書かれている。そのままじゃないか……。

「その仲の良いお二人さん、ペアの指輪なんてどうだい！」

この通りにはアクセサリーを売る店や店頭でクレープを売る店、洋服屋や喫茶店も目立つ。恋人達をターゲットとした店がほとんどを占めているようだ。

「ねえ、あれ買つて〜」

通り過ぎた若いカップルが楽しげに会話をしている。

「どれどれ……」

男がショウウィンドウを覗く。唾を飲み込んだ所を見ると、目玉が飛び出す程の金額だったのかもしれない。

「ねえ、あのお店、お人形が一杯売っているみたい！」

俺の隣を歩く女性が嬉しそうに話しかけてきた。

女性にしては少し高めの身長、俺とほとんど目線が同じなため、会話をしようと顔を向けただけで見つめ合う形になる。ピンク色の長い髪からは甘い香水のような香りが漂ってきた。

「良いね、行ってみよう」

仲良く手を握り合い、人形で埋め尽くされた店へと向かう。

店のドアの鐘が鳴る。

まるで教会の鐘のように澄んだ音色だ。来店するカップルを祝福しているのだろうか。

「きゃ〜！ これ、すっごく可愛い！」

巨大な一つ目モンスターのぬいぐるみを抱え、女性が満面の笑みを俺に向ける。そのぬいぐるみは可愛いかな？

「うん！ 凄く良いんじゃないかな！ カーニャアにピッタリだよ！」

……。

目の前の女性は俺達冒険者パーティーの『女神』兼『幻想士』兼『参謀』である『秋留』だ。決して『カーニャア』などという名前ではない。

「そう？ ツートンにそう言われると欲しくなっちゃうなあ〜！」

俺の名前は『ブレイブ』。秋留と同じパーティーで職業は盗賊だ。決して『ツートン』などという名前ではない。

何がどうなっているのかというと、俺は今、浮かばれない幽霊に乗り移られているのだ。俺は確かにブレイブなのだが、俺の身体を操っているのはツートンという男の幽霊である。

そして目の前でまるで洋服の試着をするように一つ目モンスターぬいぐるみを抱いて鏡越しに自分の姿を見ているのは確かに秋留だ。しかし同じように秋留の身体はカーニャアという女性の幽霊に操られている。

なぜこんな事になったのかというと……。

そう、あれはこのアステカ大陸に到着した時の事だった。

前回冒険した島で怨霊と化していた幽霊カップルを引き取った元ネクロマンサーでもある秋留。その秋留が二人の心の声？ を聞いたのだ。

「新しい町！ 素敵！ ツートンとデートがしたいわ！」

「俺もカーニャアとラブラブしたい！」

秋留以外には「ピシッ」とか「パシッ」というラップ音にしか聞こえなかったんだけどな。秋留が通訳してくれて、そんなような事を言っているらしかった。

そして生身の身体じゃないと楽しくデート出来ない！ という事で俺と秋留がこういう状態となった訳だが……。

これがブレイブである俺と秋留本人のデートであれば、どんなに……どんなに！ 幸せだったことだろうか。

確かに俺の手は秋留の手を握っている。

確かに俺の眼と秋留の眼は幸せそうに見詰め合っている。

他人から見れば、さぞかし仲の良い、幸せそうなカップルに見える事だろう。

しかしこの空しさは何なんだろうか。

秋留の姿で俺ではないブレイブを見つめないでくれ！ 凄く複雑だ……。不思議と嫉妬してしまう。

と俺が一人で錯乱している間にツートンがズボンをゴソゴソし始めた。どうやら財布を捜しているようだ。

と、ちよつと待て！

俺の金でその可愛くもないモンスターのぬいぐるみを買うつもりか！ 勘弁してくれよ……。。

「一万三千カリムになります。いやあ、お兄さん、可愛い彼女を連れてて羨ましいですよ」

俺の目の前で事情の知らない陽気な店員が話しかけている。

ツートンは照れながら俺の財布から二万カリムを取り出す。勝手に俺の金を使うなー！

「でしょ？ カーニャアは世界で一番綺麗なんだあ……。。」

見た目は秋留なだけだな。分かっているのか、ツートンは……。。

「んもう！ ツートンったら！」

カーニャアが照れてツートンに可愛くパンチを繰り出す。カーニャアも自分が秋留に乗り移っているのを忘れているようだ。

「あはは」

「うふふ」

あはは……。最早俺も笑うしかないな。早く解放してくれ。

「今日は機嫌が良いからお釣りは取っておいてよ、お兄さん」

ぬいぐるみショップには似合わないレザー服の上下で固めたオジ

サンに言う。

と、またまた待て！

勝手に釣りまでくれてやるなよ……。と俺の意思では身体がいうことを利かないためただ見ているしか出来ない。ツートン、お前、わざとやっているんじゃないだろうな……。

そして店を出た俺達四人？　は昼過ぎの人通りの多いメルヘン通りに戻ってきた。

「次はどこに行きたい？」

「うーん、クレープ食べたいな」

大きなぬいぐるみを両手で抱えてカーニヤアが答える。

「よし！　また俺が奢ってあげるよ！」

ツートン！　いい加減にしろ！　お前の金じゃないだろう！

い、いや……。でも俺が払わないと秋留に乗り移っているカーニヤアが払う事になるのか？　それは秋留の金だからな。しょ、しょうがない、我慢する事にしよう。

「今日は楽しかったね」

「うん……」

ここは恋人峠。

恋人達が愛を語らうちよつとした丘だ。周りにも綺麗な夕焼けを見るために集まった恋人達が沢山いる。

「カーニヤア、愛しているよ」

「私もよ、ツートン……」

俺も秋留にこれ位ストレートに告白出来れば良いのだが、俺は秋留への気持ちを未だに告白出来ないでいる。

「カーニヤア……」

「ツートン……」

そして見つめあいながら近づく二人の顔。

え！

それはさすがにヤバくないか！ でもこんな間近で秋留の顔を見て幸せだ。ああ！ 綺麗なまつ毛の一本一本まで仔細に観察出来る。こ、これは俺の意思ではないけど結構、嬉しいかも。

そして俺と秋留の顔が更に近づいたその時！

「しゅうりょう」

意識がグルグルと突然回り始める。

どうやら秋留がツートンとカーニャアへの身体のレンタルを終了させたようだ。

「ちっ、後少しだったのに……」

思わず本音が漏れる。

「ピシッ」

「パパシッ」

俺だけではなくツートンとカーニャアの霊もその辺で抗議をしているらしい。

「さすがにキスまでは駄目だよ」

秋留が宙を眺めながら諭す。

「ブレイブも何か『ちっ』とか言ってたなかった？」

秋留が俺の顔を睨む。

「え？ 気のせいじゃないか？ ツートンが言ったんじゃないのか？」

適当に誤魔化す。

「ふーん、まあ、良いけどさ」

秋留が夕日を眺める。

「綺麗な眺めだな」

「そうだね」

俺は秋留の手を握り締めた。

「……」

「……」

「！ 何ドサクサに紛れて手なんか握ってんの！」

秋留が凄い勢いで手を振り払った。

「あ……つい成り行きで……」

ツートンとカーニャアに身体を預けていたせいだろうか。自然と秋留の手を握ってしまった。秋留もすぐに拒否をしなかった所を見ると俺と同じ感覚だったのだろう。

「全く、油断も隙もあつたもんじゃないね!」

秋留が顔を真っ赤にして怒っている。そんなに怒らなくても良いじゃないか……。

「さ、とつとと帰るよ!」

秋留がスタスタと歩き始めた。

周りのカップル達が俺達の事を痴話ゲンカを始めたかのような目つきで見ているのが凄く悲しい。

ここはアステカ大陸の港町コックス。

俺達パーティーは三日前にこのアステカ大陸に到着したばかりだ。ちなみに俺達の今のパーティーはなかなかの個性派揃いとなっている。

それは夕食を囲んでいるこのテーブルを見渡しても分かる。

まずはこの俺、ブレイブ。

レベル三十六の盗賊だ。武器は世にも珍しい硬貨を打ち出す事が出来る金色と銀色の二丁の銃だ。俺は金色の銃をネカー、銀色の銃をネマーと名前を付けている。……別に可愛がっているとかそういう変な趣味ではないぞ。なんとなく、そう、なんとなくだ。

黒い色が大好きでいつも鋼の糸が編みこまれた特殊なダークスーツを着こなしている。

そして、今日デートした相手の秋留。幸せな事に俺の隣に座っている。

過去に数々の魔法系の職業に就いた事があるという話だが、今は相手を惑わす術の多い幻想士という職業に就いている。その美しさに俺はいつも惑わされっぱなしだ。三日月の形をした杖を愛用しており、柄にはどこかの町で購入した堕天使の人形がぶら下がっている。

ちなみに余談だが、あの一つ目モンスターのぬいぐるみ、秋留も気に入ったらしい。喜んで宿の部屋に飾っているという事だ……。秋留が可愛いというなら可愛いんだろうな、あの不気味なぬいぐるみは……。

その隣が生意気な小娘、クリオネア。通称クリア。秋留の事をお姉ちゃんと呼んで慕っている。

冒険者ではなく、少し前に立ち寄った島から同行する事になったお金持ちの御令嬢だ。

ただの小生意気な小娘ではなく、なんと獣と意思疎通が可能な『獣使い』の素質を持っている。クリアの傍に行儀良く座り込んでいる獣三匹がその証拠だ……このレストランはペット持込可だ。許可は得ている。

「さっきから何見てるの、ブレイブ」

年下のくせにクリアは俺の事を呼び捨てにする。確か十三歳だったはずだ。俺は二十三だから……十歳も差があるじゃないか！

「いや、可愛い顔してると思ってな」

「そう？ やっぱりそう思う？ しょうがないなあ、ブレイブは」

でもアタシはブレイブ、好みじゃないの、ゴメンね」

適当にあしらったつもりが、手厳しいカウンターパンチを食らってしまった感じだ。

俺は気を取り直して床に座っているペット達に眼を移す。

ペットその一。霊獣であるタートル。見た目は長生きしてそうな普通の亀だ。しかしその正体は霊獣の中でも有名な『四聖の玄武』

らしい。水系の力を操り、海のモンスターまで従えてしまう。以前は敵だったのだが、クリアに説得されて仲間になった。

ペットその二。凶暴なドーベルマンである紅蓮。元々はクリアの家で飼われていたのだが、クリアと意気投合して着いて来るようになった。今ではクリアの強引な性格のせいで逃げられなくなってしまったように見えなくも無い……。それは他の二匹の獣も同じだと思うが。

紅蓮はクリアと出会ってスッカリ凶暴さは抜けたのだが、クリアの趣味で凶暴さをアピールするようなお洒落をさせられている。

まずは左耳にピアス。これは耳に穴を開けている訳ではなくイヤリングのようにネジで止めているだけだ。

次に右目に上下の毛を傷のように赤く染めている。確かに凶暴そうだ。

そして四本の足全てに皮の小手を装備させられている。これは少し嫌がっているようだがクリアには歯向かえないに違いない。

ペットその三。我らがパーティーのリーダーであるカリュー……。話せば長くなるのだが人間だった我らがリーダーは今ではクリアという女王に仕える一ペットとなってしまった。

人間の時の面影と言ったら髪の毛と同じ真っ青な毛並み位だ。後は頭の上に巨大な耳、尻からは長い尻尾が生えていて人間というよりは断然、獣人に近い。

ただ、骨格はかろうじて人型を保っているため、完璧な四足歩行という訳ではない。なんとなく前かがみ、仕事に疲れきった一家のお父さんが歩いているかのようなだ。

「ほらっ！ カリューは御飯散らかしすぎ！ もっと綺麗に食べなさい！」

そう言ってクリアがカリューの頭をポカリと殴る。

いや、そんな可愛い音ではないな……。ドカッかな。

「く、くうーん……」

カリューはクリアに叱られて耳を垂らしている。

クリアに怯えるその姿はあまりにも情けない。早く戻って来い、人間のカリュー。

「がるるるる……」

不思議と俺の方を見てカリューが唸っている。

クリアに通訳してもらった話なのだが、カリューは人間だった、いや、途中、獣人だった時期もあるのだが、その辺もひっくり返る過去は全く覚えていないという。姿は獣人のままなのだが、記憶だけ退化してしまったのだろうか？

人間になったら記憶も戻ると期待しているのだが、そもそも人間に戻るのかも怪しくなってきた。

俺達の旅の目的は、このカリューを人間に戻してもらう事だ。

そのため、この大陸の中央にあるサン・プレイヤ教会のある聖都アームステルを目指しているのだ。

「ブレイブが俺を馬鹿にしているってカリューが怒ってるよ？」

「ああ、ゴメンゴメン、あまりにもそいつがかわいそうだな」

「……なんで？」

クリアが思いつきり睨む。

「床に座ってるからよ」

「ブレイブも付き合って床に座れば？」

適当にあしらったつもりが、今度はボディীবローをもらってしまった。

そしてクリアの隣に座っているのが、ペットその四、執事のシープットだ。いや、シープットはペットではないが、クリアにはペットのようにこき使われている。よくクリアの性格についていけるなあ、と感心してしまう。今は黙ってコーンスープを飲んでいるが、ひたすら隣を気にしている。

シープットの気にする隣の席が二つ空いている。テーブルには何も出ていないのだが、時々「ピシッ」「パシッ」と不気味な音が聞こえる。本日、俺と秋留の身体を使って久しぶりにデートを楽しんだツートンとカーニャアだ。俺の眼には何も見えないため特徴などを説明する事は出来ない。

その隣の席にはまたしても生物外が登場する。さすがにペット持込可と書いてはあるが馬はでか過ぎるんじゃないだろうか……。馬の銀星だ。床に置かれた大きな皿からエサを勢い良く食べている。いつ見ても不思議だ。

ゾンビなのになぜ食欲があんなにもあるのだろう。

そう、銀星は秋留のネクロマンサーの魔法によって蘇ったゾンビ馬なのだ。そしてチェンバー大陸の英雄と呼ばれた聖騎士の愛馬でもある。

「どうしましたかな？ ブレイブ殿。先程からキョロキョロと……」
秋留とは反対側の席に座っていた老人が話しかけてきた。

俺達パーティーの保護者役……のはずなのだが、最近はお茶を飲んだり宴会部長的な事をしたりと長閑っぷりが目立つ聖騎士のジェツトだ。

ジェツトも銀星と同時に蘇ったゾンビだ。同じように食事をするし病気にもなる。一般的な老人と同じように夜は寝るのが早くて朝が早い。

ゾンビって不思議だ。

一気にパーティーが増えたよな。

俺達が座っているテーブルも最初の時には考えられなかった位に大きい。……無駄に。

俺、秋留、カリューの三人から始まったパーティー。別の大陸でモンスターの大量を追っ払った功績からレッド・ツイスターという

異名も付いた。

それからジェットと銀星が加わり……今に至る。もう考えるのも嫌な位に最近は色々な冒険をしたなあ。

「どうしたの？ ブレイブ。遠い眼しているけど？」

「え？ あはは……」

秋留に見つめられて思わず照れ笑い。

「変態な事でも考えてたんでしょ」

クリアを睨み付ける。

「あれ？ そういえば今日もクリアは違う服着ているよな」

昨日は黄色のワンピースを着ていた気がするが、今日は紫色のジャケットとズボンという出で立ちだ。

「え？ 珍しい！ ブレイブがそういう事気付くなんて」

クリアとは出会ってから全然経ってなんだが、そんな事言われるのはおかしいんじゃないか？ と心の中で呟く。

「今日買いい物してたら見つけたの！ 良いでしょ？ 秋留お姉ちゃんとお揃いの紫のジャケット」

北側の大陸であるアステカ大陸は一年中が涼しい。俺もこの大陸

に到着した時に肌寒さを感じて荷物の奥から取り出した袖の無いコートを着ているが……。

「無駄遣いし過ぎじゃないのか？」

俺が呆れて言うとかリアが怒った顔をした。

「お金は十分あるから大丈夫よ！ 貧乏人は黙ってて！」

貧乏人とかではなく、移動の多い冒険者にとって多すぎる荷物は邪魔になるのだが……。

「クリア、荷物とか増えてきたんじゃないの？」

秋留が優しく問いかける。

お、そうそう。ガツンと言ってやれ、秋留！

「大丈夫よ、シールプットが全部持ってくれるから」

そう言ってクリアが悪魔のような笑顔を執事のシールプットに向ける。

ドキッとしたシープットがスープを喉につかえさせた。

「え、ええ！ クリアお嬢様の荷物は全てわたくしめが管理しておりますよ」

そう言っ、自分の身体以上ありそうな隣に置いてある巨大な鞆をバンバンと叩く。

可愛そうなシープット。

俺は執事にはなるまい。

「ふふ。でもお金使い過ぎると、いざという時に欲しいもの買えなくなっちゃうよ」

「大丈夫！ お金は沢山あるわ」

秋留の優しい忠告も無視して、クリアは自身満々にガッツポーズを付けながら喋る。

「でも世の中には想像も出来ないような高価なものもあるんだよ？ 旅の記念に色々欲しいでしょ？」

「え、うーん……確かにナンチャラの銅像とか特大モンスターの剥製とか欲しいもんね……」

そんなのが欲しいのか！

とは突っ込まないでおく。後少しで説得も成功しそうだし。それより、銅像とか剥製とか聞いたタイミングで、荷物もちのシープットの顔が若干青ざめたのは気のせいではないだろう。

「とにかくですな」

今まで黙って食後のお茶を飲んでいたジェットが突然声を発した。

「世の中の厳しさも教え込まないと、この先苦労しそうですな」

甘やかせ過ぎた子供を叱るようにジェットが睨む。さすが年長者が言う台詞には不思議な説得力がある。

「……はーい。ごめんなさい……」

お、素直に謝ったぞ。

視界の隅では、シープットが眼にハンカチを当ててお嬢様の心の成長を喜んでいる様子も確認出来た。

「ふむ。素直なのは良いことじゃ」

ジェットがニツコリと微笑む。

「へへ……」

クリアも照れ笑いする。なんか、平和な家族のやり取りのようで会話に参加出来ない。とりあえず俺と秋留は夫婦役でその子供がクリアか？ 俺と秋留の子供ならこんな生意気には育たないに違いないけどな。

「さて、そろそろ宿に戻ろっか」

秋留がタオルで口周りをフキフキしている。そ、そのタオル俺にくれ。

「変態」

俺のもの欲しそうな眼を見てクリアが言った。

うう。確かに今のは変態的な発想だったが、俺の顔はどうしてこんなにも邪な気持ちを表現してしまうのだろうか。

俺達が泊まっているのは一泊四千カリムの宿だ。朝食に軽くパンなどが出るが、夕食は各自で取る必要がある。この安めの宿にはスイートルームがあり、クリアはそこに泊まっている。一泊二万六千カリムで朝食と夕食がつく。スイートルームには部屋がいくつかあるのだが、シープットは居間のソファで寝ているらしかった。

「おやすみ、ブレイブ、ジェット」

秋留が可愛く手を振りながらスイートルームへの階段に消えていく。

そう。

クリアが金を出して秋留も同じ部屋に呼んでいるのだ。秋留も断っていたのだが、クリアの強引な勧誘により連れ去られてしまった。という訳で安い部屋に泊まっているのは俺とジェットだけ。その他の動物はクリアの支払いでスイートに泊まっている。

ちなみに銀星は外の馬屋、ツートンとカーニャはどこにいいのかサッパリ分からない。

「ブレイブ殿、お休みなさい」

「ああ、お休み、ジェット」

俺とジェットは隣同士の部屋だ。二人部屋もあったのだが、さすがにジェットと二人つきりだと息苦しくなる。最近は慣れたのだがジェットと銀星からは死臭が漂うのだ……。

俺は着ていた服をベッドに放るとシャワーを浴びた。

安宿だが各部屋にシャワー室が付いているのはありがたい。

さて。

そろそろこの港町コックスを出発する時も近づいて来たようだ。今までは色々見て回りたいと駄々をこねていたクリアも今日は少し大人しくなっていた。明後日あたりには出発出来るだろうか。

俺は熱いシャワーを浴びると暫く武器や装備の手入れをしてから眠りについた。

「えー！ もう出発しちゃうのお！」

案の定、俺が提案した途端にクリアが全力で否定し始めた。

「のんびりしてもいられないだろ、カリューを早く元に戻してやらないといけないし……」

クリアと出会った時はカリューが元人間だとは言っていなかったのだが、今はクリアにも事実を話している。まあ、元人間と分かったカリューの扱いが変わった訳ではないのだが。さすがクリア……覇王の器か？

「クリア殿、ここは一年中寒いアステカ大陸なんですじゃ」

「え？ そうなの？」

「はい。クリア殿のいたデズリーアイランドは一年中暑い大陸でしたからな」

俺達の暮らすこのルーガル星には大きく分けて三つの種類の大陸

がある。

まずはルーガル星の中央にある大陸、以前冒険したチェンバー大陸や秋留の故郷である亜細李亜大陸などには四季がある。

次にルーガル星の南側にある大陸、俺達がレッド・ツイスターと呼ばれるようになったゴールドウィッシュ大陸や俺の故郷であるイクシム大陸などは一年を通して基本的に暖かい。

そして今いるアステカ大陸や魔族の本拠地があるワグレスク大陸は一年を通して常に肌寒いのだ。

「分かりましたかな？」

ジェットの分かり易い説明を聞いてクリアもきちんと理解出来たようだ。

「凄いいね、ルーガル星にはそんなに色々な大陸があるんだね」

「そうですじゃ、余談じゃがワシは全ての大陸に行った事があるんじゃない」

「へー、ジェットおじいちゃんは凄いいんだねえ」

そこでクリアが俺を見る。

ブレイブとは大違い、と絶対思っているに違いない。

「ふむ。それでお、クリア殿」

「ん？」

「一年中肌寒い大陸でも冬の季節は特に寒くなるんじゃない
そう。」

四季が無いと言っても暦がない訳ではない。この大陸にも十二月が来るし一月も来る。その時期は特に寒いのだ。

「そっか、じゃあ早く移動しないとドンドン寒くなっちゃうんだね」

「そういう事ですじゃ、分かって頂けましたかな？」

「うん！」

俺の視界の端では、クリアお嬢様の知能レベルが上がった事を喜ぶシープットの姿が映っている。

「じゃあ、とっとと出発しよー！」

クリアが叫ぶ。

やれやれ。町を移動するのも一苦勞だな。この先が思いやられる……。

そして翌日。

昨日のうちに出発の準備を進めていた俺達の目の前には、真新しい馬車を用意されている。

「へー、これが馬車かあー」

クリアが眼をキラキラさせながら馬車のあちこちを眺めている。

「パリッ」

「パシンッ」

どうやらツートンとカーニャアも馬車は初めてのようだ。

「あれ？ お馬さんが増えてるよ？」

馬車の前に回ったクリアが不思議そうに聞いてきた。荷台の前には銀星の他に二頭の馬がたたずんでいる。

「私達全員を乗せた馬車を銀星だけ引っ張るのはちよつと無理なよ」

秋留がクリアの目線に合わせて答える。

「ふうーん、言ってくればカリューと紅蓮とタートルに馬車を引っ張らせたのに……」

いや、さすがにそれは無理だろ。

馬車、っていつているんだから馬に引っ張ってもらおうよ。

「あれ？ タートルがいない……」

クリアが辺りをキョロキョロとしている。

確かにタートルの姿が見えないが……。

「キー……」

遠くから鳴き声が聞こえる。タートルの鳴き声だ。

俺はクリアを呼んで鳴き声のする方に歩いていった。そこには寂しそうにしているタートルの姿が見える。

「どうしたの？ タートル……」

クリアが話しかけている。

一緒に付いて来た秋留も心配そうにタートルの方を覗き込んでいる。

「うんうん……」

クリアがタートルと会話中だ。もちろん俺達には何を話しているのかサッパリ分らない。

「えー！ そうなのお！」

「どうしたの？」

秋留が心配そうに尋ねた。

「タートルは海の生物だから、これ以上、大陸の中には入れないんだって……」

そうか。

タートルは霊獣だった。霊獣は特定の場所でしか生きる事が出来ないとか秋留に聞いた事がある。だから一般的に霊獣は召喚によって少しの間だけ別の場所に出現するのだ。

常にクリアの傍を歩いていたタートルは強力な四聖という理由もあるかもしれないが、港町や島でしか一緒にいた事がないからなあ。

「しょうがないね……タートルとは暫しのお別れね」

そう言った瞬間にタートルの顔が一瞬、安心したように見えた。

クリアと離れられる事が嬉しいのかもしれない。そうだな、クリアみたいなご主人様は誰だって嫌だよな。

「待っててね、タートル……この港町でちゃんと……」

そう言っただけでクリアはタートルの身体をガシッと掴んだ。

「ちゃんと待っててね……絶対に迎えに来るから」

そ、それは脅しか？ 今やタートルの目の前にクリアの顔が近づいている。

「いなくなったりしたら、許さないからね」

その台詞、可愛く言えば聞こえは良いのだが……はつきり言っただけで怖いぞ。

そしてタートルを離れたクリアは手を振りながら馬車の方へ戻っ

ていった。

残されたタートルはガクガクと震えながら海の方へと帰っていく。

「かわいそうだな」

「う、うん……」

クリアの獣使いとしての力を発掘した秋留も責任を感じているようだ。

タートルがクリアから離れた事を聞いたカリューと紅蓮は、あからさまに「あいつ、上手いこと逃げやがって」という顔をしたが、クリアの「すぐに迎えに行くって言つといたけどね」という台詞を聞いた途端に「かわいそうに」という顔に変わった。

「それでは、出発しますぞ」

総勢九名を乗せた馬車が走り始めた。まあ、うち二名には重さというものはないかもしれないが。

馬車は街道を軽快に走り始めた。

今回はお嬢様のクリアのために馬車も少し高価なものにしている。車輪にはスプリングが使用されていて馬車の揺れを押さえてくれる。しかも今回の馬車にはベンチも付いている。いつもは床に座り込むような形なのでだいぶ疲れるのだが、このタイプの馬車ならまだマシというものだ。

ちなみにこの高価な馬車、支払いはジェットだ。

なんだかんだ言ってもジェットにとってクリアは孫のように可愛い存在なんだろうな。

「この大陸は何だか独特な雰囲気だよ……幻想的な感じがする」

俺は辺りを見渡しながら呟いた。

馬車から見える景色を眺めると、見慣れない木々や草花が多く目立つ。どれもこれもキラキラと輝いているようにも見えた。

「あれ？ ブレイブ知らないの？」

「ん？ 何が？」

「あゝ、何か飛んでるよゝ！」

クリアが叫んだ。

確かに馬車と並走するようにキラキラと輝く何かが飛んでいるのが見える。

俺は眼に力を集中させて、その飛んでいる何かを観察した。盗賊は五感に意識を集中させるのが得意な奴が多い。俺もそのうちの一人だ。

「……虫？」

と俺が呟くとそのキラキラ光る物体が俺の額に突っ込んできた。

「痛っ！」

俺は思わずオデコを押さえた。

「失礼ね！」

目の前のキラキラ光る物体が小さな声で怒鳴っているのが聞こえる。

「ごめんなさいね、ブレイブは妖精の事を知らないみたいなの」

秋留が隣からフォローする。

え？ 妖精？

「ふう〜ん、とんだ田舎者だね！」

そう言うと、目の前の妖精は俺達の馬車から離れていってしまった。

「……あれが、妖精？」

俺は野生の妖精は初めて見た。

冒険者の間では依頼の達成を監視するインスペクターと呼ばれる妖精がいるのだが、あれは人工的に造られたものらしいからな。

「妖精は虫とかモンスターとかと間違われるのが大嫌いなものよ」

『へ〜』

一緒に秋留の説明を聞いていたクリアとシープットが同時に感心する。

「このアステカ大陸は妖精やエルフ、獣人等の多くの種族が共存する夢の大陸なんだよ」

第一章 花の都

「もう疲れた」

「まだなのぉ？」

「つまらない」

クリアの不満はもう聞き飽きた。

港町を出発してまだ半日だぞ？ しかも俺達がいつも乗っている

馬車よりは相当乗り心地が良い。それをわずか半日で疲れたなどと……。高い金出してこの馬車を借りたジェットの事も考えてあげてくれ。

「気分転換に休憩しますかな？」

ジェットが見かねて街道を少し離れた場所に馬車を止めた。相変わらず木々が多いのだが、この場所は少し開けているようだ。

「うーん！ やっぱりずっと同じ体勢は疲れるね」

クリアは思いつきり伸びをしている。

「ふふ、そうだね。私も冒険者になりたての頃は移動が辛かったな

あ……

「お茶にしませんかな？」

ジェットが芝生の上にシートを敷いてお茶の準備をし始めた。

「いいねえ」

秋留ものんびりする事に決めたようだ。お茶の準備を手伝い始めた。クリアも思い出したように秋留の手伝いを始める。

「良いものでございますね、旅というものは」

俺の隣でシープットがクリアを見て感動している。シープットは基本的に無表情の時間が圧倒的に多いのだが、クリアを見る時は凄く幸せそうな表情をしている。まるで父親のようだ。

「シープットさんは旅をした事はあるのか？」

「呼び捨てで構いませんよ。わたくしも若い頃は色々が無茶をしたものです」

若い頃と言ってもシープットは見た目三十歳くらいに見える。真っ白の髪をしているが地毛のようだ。それともクリアの相手をしていて過労で真っ白になってしまったのだろうか？

「ブレイブ殿」

俺は軽くジェットの方へ顔を向けた。

「アステカ大陸は精霊の力が充実しているせいで、栄養価の高い果物が沢山あります」

「了解、散歩ついでに探してくるよ」

俺は荷台から『全世界サバイバル旅行記・第四巻』という分厚い本を取り出した。とある冒険家が全大陸を無銭で制覇した時の日記だが、食べられる野草や果物の情報についてもまとめられている。全十巻の長編だ。ちなみにとある冒険家とはジェットの事ではない。……ナク・ポンターホンという人物が書いた本のようにだ。

「シープットも手伝ってくれ」

俺は幸せそうにクリアを眺めるシープットの背中を引っ張って行った。

「これなんかは美味そうだな」

俺は真っ赤なヒョロ長い果物を手に取ってシープットに渡す。俺が採取係り、シープットには本を参考に食べられる果物なのかを調べてもらっている。

俺は辺りを見回した。少し森の中に入ると生息している植物が全く違うものになっているのが分かる。

「……味は旨いのだが猛毒である……」

後ろでブツブツ言っているシープットは放っておいて俺は目の前の細い木を見上げた。上の方にバナナのような果物が生っているのが見える。

俺は手頃な石を掴んでバナナ風の果物に投げつけた。

「おお！ さすがブレイブ様、見事な命中力でございます！」

シープットが小さく拍手をしている。俺は落ちてきた果物をシー

プットに渡した。

ん？ シープット以外にも拍手しているのがあるぞ？ 秋留かな？
俺は嬉しさ一杯で辺りをクルクルを見渡した。

「……」

少し離れた木の上に緑色をした小さな男が見える。モンスターか！
俺は両手に銃を構えた。

「わっわっ」

木の上に腰を下ろしていたモンスターが地面に墜落した。今、普通に喋ったように聞こえたが……。

「ちよっと！ ちよっと！ ちよっと！」

凄い勢いで小さな少年が走りよってきた。俺の膝ぐらいまでの身長だ。低すぎないか？

「お兄さん！ 何、善良な妖精に銃なんて向けてんの！」

「よ、妖精？」

俺がオロオロしていると目の前の妖精と名乗った小さすぎる緑色の少年が俺の事をジロジロと見始めた。

「お兄さん、田舎者？」

また言われた。妖精を見た事がない奴はみんな田舎者扱いなのか。
「お兄さん、気をつけた方が良いよ」

「何がだ？」

俺はようやく落ち着いて目の前の妖精と会話し始めた。上半身は裸で下半身には草で編んだようなスカートのようなものを穿いている。

「妖精の中にも意地悪いのがいるからね。銃なんかで狙ったら何されるか分かったものじゃないよ」

「そうなのか」

妖精にも色々いるんだな。こいつは俺が額に攻撃を受けた妖精に比べたらサイズがデカイしな。

「それにこの大陸に来て間もないでしょ？」

そう言って妖精はシープットの持っていた先程のバナナのような

果物を奪い取った。

「これはバンバーン。食べたらドカンッ……だよ」

妖精が小さな手で爆発の仕草をして見せた。

「そ、そうでしたか。それはご親切にどうも」

シープットが妖精に深々と頭を下げている。どこまでも腰の低い奴だ。

「しょうがないぁ……」

そう言うとき妖精は辺りを見渡し、一つの果物を取ってきた。

「ジューシルだよ、その名の通り、果汁たっぷりだ極旨！」

見た目は真っ黒で硬そうなのだが……。

「ありがとうございます」

そう言うときシープットは大事そうに果物を受け取った。

「……じゃあ、僕はそろそろ出発するよ」

「何か用事でもあるのか？」

妖精が俺の事を睨む。

「そんなに暇そうに見える？ 失礼な田舎者だよ、全く！」

そう言うとき妖精はプンプンと怒りながら俺達の目の前から姿を消した。

「……」

「ブレイブ様、安心していないでそろそろ戻りませんか？ 果物もそれなりに集まりましたし……」

「あ、ああ、そうだな」

俺は若干、妖精が苦手になりつつある気持ちを押し込むようにして馬車へと戻っていった。

「やれやれ……やっと元に戻りましたですじゃ」

ジェットが頭を掻いている。

「悪い……」

「すみません」

俺とシープットは仲良くジェットに謝っている。

あの後、馬車に戻って楽しいおやつタイムが始まったのだが、妖精から貰った真っ黒い果物……、あれがバンバンだったのだ。

最初に口にしたジェット頭の頭が見事に吹っ飛んだ。それを見たクリアやシープットは一瞬で気を失い、つい先程復活したばかりだった。

「その緑の妖精の言うとおり、悪戯とかが大好きな邪妖精と呼ばれる種族も多いみたいだからねえ」

秋留が困ったように俺とシープットの顔を見ている。

見事に騙された。

洞察力が肝なはずの盗賊がこれじゃあ面目まる潰れだ。

しかも奴が持っていたバナナ型の果物がジュールで、とても高値で売買されている貴重品だった。この事実が俺の心を百倍にも傷つけている。

「はあゝ」

クリアが俺達に聞こえるようにわざとらしく溜息を付いた。『使えない奴ら』と思っているに違いない。

「ま、まあ、美味しい果物もいくつかあったから上出来でしょう！」
秋留が俺達の事をフォローしてくれた。ありがとう、秋留。秋留はクリアとは大違いの慈愛に満ちた大天使だよ。ちなみにクリアは生意気な邪妖精だな！

「何よ、ブレイブ！」

俺の視線に気付いたクリアが食って掛かる。

「な、なんでもございません」

思わずシープットみたいな喋り方をしてしまった。こりゃあ執事の気持ち痛い程分かる。

「何はともあれ、最初に食べたのがワシで良かったですな。ぬあっはっは」

豪快にジェットは笑っているが、さすがに誰も笑っていない。想像しただけでも怖すぎる。

邪妖精か……。悪戯好きとかいうレベルではないぞ、これは……。

再び馬車に揺られる俺達。

港町コックスを出発して一日目が終わろうとしている。太陽が今にも林の奥へと消えていきそうだ。

「暗くなってきたね」

秋留が心配そうに辺りを見渡している。

「そうですね、そろそろ野宿出来そうな場所があると良いんじゃないか……」

「野宿か、あたし初めてだなあ」

嬉しそうにクリアが眼を輝かせている。お嬢様は野宿をした事が無いから楽しそうにしているが、決して楽しいものではない。地面で寝るのは寒いし、いつモンスターに襲われるかも分からないため交代で見張りに付く必要もある。出来る事ならどんなに小さな町の汚い宿でも良いから建物の中で寝たいと思う。

「お、少し開けた場所がありましたぞ」

ジェットの声に俺達は馬車から身を乗り出して前方を確認した。確かに野宿が出来そうな少し開けた場所があるが……。

「先客がいるみたいだな」

少し位暗くなってきた俺の眼なら観察する事が出来る。

俺達の目指す場所には一台の馬車とその近くに群がる二人の人影が見えた。

その二人が警戒するように武器を構えて俺達の方を観察しているのが分かる。

「ご一緒させてもらえますかな？」

ジェットが丁寧に馬車から降りて二人に近づいていった。

それに続いて俺達も馬車を降りる。

「来るな！ 邪悪な気を発する奴らめ！」

長髪の剣士風の男がもう一人をかばう様に俺達の前に立ちふさがった。

邪悪な気……。

恐らく死人であるジェットと死馬である銀星、凶暴な獣と化したカリューの事を言っているのだろう。

あ。

後、どこかにツートンとカーニャアもいるに違いない。あいつらは悪霊だからな。もしかしたらクリアからも邪悪な気が発せられているかも。

……驚くべき事にまともなのは数名だ。

「ごめんなさい、ちょっと特殊なメンバーだから……」

優しく秋留が二人に話しかける。

「……貴方は良い気を発している」

そう言うのと剣士は武器を納めた。後ろで杖を構えていた女性の冒険者も警戒を解いたようだ。

パツと見は剣士と魔法使いの二人パーティーだろうか。

「ありがとうございます。お二人はエルフの方ですね？」

秋留が礼を言った相手を観察した。

確かに耳が尖がっていて線が細そうだ。これがエルフ族か。間近で見た事はあまり無かったが、さすが夢の大陸アステカといった所だな。

「近くで野宿させて貰っても構わないですか？」

「お前は近づくな！」

近づいていったジェットに男エルフが武器に手をかけて叫ぶ。

寂しそうにジェットは引き下がった。

「なるべく離れて野宿してくれ」

そう言うのと二人のエルフは焚き火の傍に再び座った。

「ありがとうございます」

「ありがとう！」

秋留の後にクリアも元気良くお礼を言っている。野宿が楽しみでしょうがないんだろうな。

ちなみにエルフ族の二人はクリアを若干警戒しているようにも見える。やっぱり邪悪な気を発しているに違いない。

獣人になった後もカリューがいたために野宿の準備も楽だったのだが、今はただの獣となってしまうているため、野宿の準備を手伝う事も出来ない。

俺達は慣れないシープツトとクリアと手分けをしながら野宿の準備を始めた。シープツトの手際がそれなりに良いのは普段クリアに色々ときき使われているためだろう。

「これ位の大きさが良い？」

クリアが秋留の料理を手伝っている。今は野菜を包丁で切っているようだ。秋留は料理の腕も一流なのだが、クリアが手伝う事によって味が悪くならないか心配でしようがない。

「バッチリ」

と秋留は言っているが大分デカイぞ、その人参は。
今夜のメニューはカレーだ。

どこで仕入れてきた情報なのか不明だが、クリアはしきりにカレーを食べたがっていた。キャンプの王道はカレーらしい。

俺とジェットとシープツトは先程仕留めたモンスターの肉をさばっている所だ。小さな猪のような動きの速いモンスターだったが、俺の銃で一発で仕留めた。

『いっただっきまゝす』

待ちに待った遅めの夕食だ。辺りはすっかり暗くなっている。エルフパーティーは一人ずつ交代で睡眠を取っているようだ。

さすが秋留の作る料理はカレーでさえ旨い。ちよっと人参は大きめだが……。

「美味しい！ 具も大きくて食べ応えがあるね！」
どこまでもプラス志向な奴だ。

ちなみに銀星を含めた三匹の馬は草花、カリューと紅蓮はペット専用の御飯を食べている。

カリュー、いよいよ人間では無くなったな。どこまで行ってしまうんだろう。

そして食後。

興奮したクリアが寝付けないために焚き火を囲んでのトランプゲームが開催された。お年寄りのジェットはだいぶ眠そうだが、頑張っ
て我がままな孫に付き合っている。

「秋留お姉ちゃん」

「ん？ どうしたの、クリア」

クリアが秋留に近づいて何やら話しかけている。

……。

どうやらクリアはトイレに行きたくなったようだ。俺の盗賊の耳では聞いてはいけないような内容の会話も聞こえてしまう。

冒険者になると長距離の移動が増えてくる。

そうなる困るのがトイレだ。

男ならその辺で用を済ませて良いのだが、女性はそうはいかない事も多い。そりゃ、全く気にしない女性もいる事はあるのだが。

そこで冒険者が愛用するのが、今秋留が馬車から持ってきた袋の中に入っているもの。簡易トイレだ。

簡易トイレと言っても普通の壺のようなものなのだが、浄化の魔力が込められた石が中に敷き詰められている。魔法ってつくづく便利だよなあ。

ちなみに簡易トイレは浄化屋にお願いして綺麗に浄化してもらう事が出来る。浄化屋は大きな町には大抵いるようだ。下水施設の整った街などもあり、魔力のお陰で俺達の生活はどんどん便利になっていっていると思う。

「さて、そろそろ寝ますかな」

秋留とクリアが戻ってきた所でジェットが待ちに待った台詞を言った。眠そうな目をしている。

「じゃあ俺が最初に見張りに付くよ」

俺は軽く伸びをして装備を確認した。

秋留とクリアは同じテントに入って行く。そのテントの前にはカリューと紅蓮が陣取る。

ジェットも別のテントへとフラフラしながら消えていった。歩きながら寝ているようだ。その傍には馬たちが休んでいる。

静かだ。

時々暗闇に光る虫のようなものはきつと妖精なのだろう。なんて幻想的な景色なんだ……。

「ピシシッ」

「パシシッ」

ツートンとカーニャアが近くで会話をし始めたようだ。幻想的な景色が台無しだな。一気に不気味な雰囲気包まれた。そういえば時々光る物体はモンスターの眼の光に見えなくも無い。

俺は気を引き締めて辺りの気配を窺った。遠くではエルフの剣士も不気味な音に驚いて辺りをキョロキョロと見回している。うちの者が迷惑かけて悪いな。

「……何匹かのモンスターが近づいてきているな」

俺は他の場所からはモンスターが接近していない事を確認して街道の反対側に移動した。この茂みの向こう側から十匹程のモンスターが近づいて来ているのが分かる。

まだ射程外だ。

「ブレイブう、何やってんのお？」

その時、秋留のテントから半分寝ぼけたクリアが頭を出して声を出した。

「！」

その声に一瞬驚いた俺は緊張が解けてしまった。それはモンスターも同じだったらしく一気に茂みから飛び出してきた。

「バカッ！ テントに入ってる！」

俺は叫びながらネカーとネマーを乱射した。硬貨の一枚一枚が襲い来るモンスターの脳天や身体に命中していく。しかしそのうちの一匹が俺の脇をすり抜けて啞然としているクリアに向かって飛び掛かった。

「ガウッ」

クリアの目の前でカリューがモンスターの喉仏に噛み付いた。飛び起きた紅蓮もクリアを守るようにモンスター達を威嚇している。

「カリュー、行けー！」

クリアの命令でカリューがモンスターの群れへと飛び込んだ。

「爪で引っかいちゃえー！」

俺はカリューの援護をするようにネカーとネマーを構えた。しかし狙いをつけづらい。クリアが変な命令をしているせいでカリューは戦い難いようだ。

「ちっ」

目の前のモンスター達は群れで戦闘する事に慣れているらしい。カリューが翻弄されている。

「一旦カリューを敵の群れから離れさせろ！」

俺は叫んだが興奮したクリアには聞こえていないらしい。

仕方なくカリューに当たらないように硬貨を発射させて一匹ずつモンスターを打ち抜く。

「全く、何をやっているんだ！」

遠くで様子をうかがっていたエルフの剣士が背中から弓矢を取り出して、銀色に光る一本の長い矢を放った。

銀の矢がモンスター三匹をまとめて串刺しにする。その攻撃でばらけたモンスター達を的確にネカーとネマーで打ち抜いた。

怯んだモンスター達は茂みへと逃げ込もうとする。

「そいつらは一匹も逃がすな！」

そう言って、逃げるモンスターをエルフが矢で射抜いた。

俺も腰に装備したナイフで素早くさばく。そして左手のネカーで茂みに半分身体が隠れた別のモンスターも打ち倒した。

「これで全部か……」

「大丈夫だった？」

いつの間にかテントから出てきた秋留が心配そうに声をかけてきた。クリアも秋留に抱きついていてる。ジェットはテントからは出てきていない。熟睡しているに違いない。

「あんたら新米冒険者か？」

先程のエルフが背中弓を戻しつつ近づいて来た。少し怒っているのは気のせいではないだろう。

「い、いやあ……」

俺は苦笑いをして誤魔化した。俺達のレベルや功績を考えると中より上といった所だ。少なくとも新米ではない。

「こいつらは……」

そう言ってエルフは倒れていたモンスターを指差す。

「バウボア。群れで行動する」

俺の顔をジロリと睨む。まるで全ての元凶が俺にあるかのように。「一匹でも逃がすと更に大量の仲間を引き連れて仕返しに来る。とても仲間意識の強いモンスターだ」

そうか。それでこのエルフは一匹も逃がすなと忠告してきたのか。

「お前らさっきバウボアの肉を食ってたろ？ 仕留めた時に仲間を逃がさなかったか？」

「あ」

そんなに食料はいらないと思って逃げていった他のモンスターは放ったらかしだった。……元凶は俺だったのか。

「はあ」

目の前のエルフが分かり易く溜息をついた。溜息をつかれるのも本日二度目だな。

「もつと修行する事だな」

そう捨て台詞を残しエルフは自分のテントの前へと戻っていった。

「……面目ない」

「ホントにね」

俺の陳謝にすかさずクリアが突っ込む。お前が変な邪魔をしなれば十数匹のバウボア程度あつという間に片付けたさ。

「ふあゝあ。とりあえずクリア、寝るよ」

秋留もとくに俺のフォローもせずにテントに戻っていつてしまった。寂しいな。

それから交代の時間までは何事もなく、俺は秋留と見張りを交代して眠りについた。

馬車に積んだ樽から水を汲み顔を洗う。今朝の街道は濃い霧に包まれている。視界が悪いとモンスターの接近に気付くのが遅くなってしまうのが少し心配だ。

「肉も少し積み込んでおきましたぞ」

ジェットは朝からせつせと働いている。最後の見張りはジェットなため、俺達よりも大分早く起きているはずなのだが……さすがお年寄りは違う。ジェットは昨夜襲ってきたバウボアの肉を必要な分だけ馬車に乗せている所だ。

ちなみに残ったモンスターの死体は広場の端に積んでいる。他のモンスターや掃除屋と呼ばれる冒険者達がそのうち片付けていく事だろう。

「じゃあ出発しようか」

「うん！」

秋留とクリアが元気良く馬車に飛び乗った。俺も忘れ物がないか広場を見渡す。エルフの冒険者達は俺達よりも早くに出発してしまったようだ。

「よし、準備オッケーだ」

俺も馬車に乗り込む。馬車はゆっくりと進みだした。

暫く進むと秋留とクリアが地図を広げて何やら話し始めた。港町コックスに到着してから購入したアステカ大陸の詳細な地図だ。

「次の目的地は花の都……ファリね！」

クリアが地図を指差している。

花の都とはまたこの大陸らしい名前が付いているものだ。その幻想的な響きに秋留もクリアも楽しそうだ。

「驚きますぞ」

ジェットが期待させるような事を言っている。ファリという街で何が待っているのか、ジェットは知っている様だが、教える気は無

さそうだ。「ぬふふ」という意味不明な笑みをこぼしている。

その後も談笑が続いたが、暫くするとクリアは秋留の膝で眠りについてしまった。羨ましい。

「疲れているんだね」

秋留が優しくクリアの頭を撫でながら俺に話しかけてくる。

「そうだな……寝ていると静かで可愛いもんだ」

「むにゃむにゃ」

クリアは何やら夢を見ているらしく時々笑ったりしている。

「花の都ファリの夢でも見てるのかな？」

「むにゃ……またブレイブの仕業かぁ……はぁ」

クリアの寝言だ。前言撤回だ、寝てても可愛くない。

俺が何かしでかしたらしい。夢の中でまで溜息を付いている。

「あはは」

「はは……」

秋留が可愛く笑ったので俺も思わず普通に笑ってしまった。

今日もレッド・ツイスターは平和だ。

「あ、あのお」

俺と秋留は同時にビックリした。存在の薄いシートが突然話しかけてきたのだ。

「と、突然、どうした？」

俺はキョロキョロと辺りを見渡した。

「……ん？」

見た事のある景色だぞ。特にあの大木には見覚えがある。盗賊の観察眼は伊達ではない。

「同じ場所をグルグルと回っている？」

俺は武器を構えて警戒した。

「いえ、違います」

いきなりシートが俺の観察眼を否定する。何て失礼な奴だ！

「いや、あの大木は確実に見たぞ！」

「……はい。いつまでも馬車から見えてますよね」

『……ッ』

俺と秋留は絶句した。

確かに馬車は進んでいるのだが、少し奥にある木だけが景色として変わらずに付いてきているのだ。

俺は黙って目の前の動く大木にネカーとネマーを連射した。

「いたたたたっ」

大木が喋った。

基本的にモンスターは喋らないはずだから……また妖精か？

「ジェット、ストローップ！」

秋留が叫ぶと馬車が突然止まった。

街道に生える木々の間から大木が太い根っこで器用に歩いてきているのが見える。

「問答無用に攻撃してくるなんて失礼な奴ね！」

目の前の大木からオバサンの甲高い声が聞こえてくる。

アステカ大陸は何でもありか？

「わ、悪い……妖精だったのか」

「んまっ！ どこからどう見ても可愛らしい妖精じゃない！」

バシンツとオバサンらしく大きな手のような枝で馬車をはたく。

馬車全体が軋んだが、クリアは何も無いかのようにグッスリと眠っている。

「ワタクシはマダム・フォーリン、貴方達に忠告しに来たの」

大木の真ん中に顔のように眼や鼻や口が付いている。結構不気味だ。その不気味なフォーリンと名乗ったオバサン？ が腰に手をあてているような仕草で俺達に話しかけている。

「な、何でしょうか？」

秋留もあまりの迫力にたじろいでいるようだ。

「貴方達ね……」

『……』

一同、何を言われるのかとドキドキしながら待つ。

「……」

『……』

暫くの沈黙。

「……」

俺は黙ってネカーとネマーを構えた。

「んまつ！ 短気な坊やね！」

フォーリンがバシンツと俺の腹を枝で払う。息が止まった。今の攻撃を予測出来なかったのが悲しい。

「貴方達、新米冒険者みたいだから忠告しておくけどね、」

新米ではない。

このオバサンはいつから俺達の様子をうかがっていたのだろうか。
「霧が濃いから色々気をつけてね」

『……』

一同、再び沈黙。

「ご丁寧にありがとうございますですじゃ」

ジェットが一人礼を言う。ジェットだけはあまりショックが大きいようだ。

「んまつ！ 立派なジェントルマンがいるじゃないの！」

「ふおっふおっふお、レディーの前で恥ずかしい姿は見せられんからのお」

「んまあ！ お上手なこと！」

ジェットはマダム・フォーリンと普通に会話を続けている。少し、いやしく尊敬する。

暫く話した後に俺達はようやくマダム・フォーリンから解放された。

シープットも含めて俺達はすっかりグッタリとしてしまっている。
「よく普通に会話が出来るな」

俺は手綱を操るジェットに話しかけた。ちなみにマダム・フォーリンは心配だという事で先程と同じように少し離れた場所から付いてきているようだ。

「妖精を相手にする時は調子を合わせないと疲れますぞ」

『確かに』

俺と秋留とシープットは声を合わせて答えた。

「うーん……」

毛布にくるまっていたクリアが眼を覚ましたようだ。馬車の椅子で豪快に眠っていたクリアに優しく毛布をかけたのは勿論秋留である。

「よく寝れた？」

少し離れていた秋留が近寄って尋ねる。少し離れていたのはクリアのために椅子を空けていたためだ。

「うん。何か色々楽しい夢を見ていたみたいだけど、忘れちゃった！」

おう、忘れる。

「丁度良いですな。あの辺りで昼にしましょう」

ジェットは手綱を操り馬車を街道脇に止めた。小さな井戸と切り株がいくつかある。馬車移動のための休憩所として用意されているようだ。

「水を補給しときましょう」

ジェットが井戸から水を汲んでいる。基本的に川やこういう場所にある井戸の水は簡易シャワー用や洗い物に使用する。危険で飲み水には使えないからだ。ま、困っていれば別だが。

「何か新しい発見ばかりだね」

秋留が近づいてきて言った。金魚のフンのクリアはシープットと一緒にジェットの手伝いをしている。

「この大陸が特別過ぎるんじゃないかな……とにかく妖精には慣れない」

「……だね、ふふふ」

ずっと眠っていたカリューと紅蓮も元気に走り回っている。

……何だか俺の中のカリューの扱いも普通のペットになって来たな。ああやって走り回っていても違和感が無い。

「カリュー……人間に戻ると良いね」

「ああ……せめて獣人にでも戻れば……」

遠い眼をして無邪気に走り回るカリューを眺めた。最近クリアのお陰？ で凶暴さも少し無くなって来たようにも見える。

俺達は簡単に昼を済ますとすぐに出発した。

クリアも少しは馬車に慣れたのか不満もあまり言わなくなった。

そして午後は何事も無く早めに野宿する場所を見つけて準備を始めた。今日のメニューは昨日仕留めた大量の肉を串に刺して焼いただけのシンプルなものだ。秋留特製のソースが塗りつけてある。

「おっいしーい！」

クリアが幸せそうに肉を頬張っている。シープットもウンウンと頷きながら肉を食べているようだ。秋留は肉を焼いただけの料理でも凄く旨く作る事が出来る。

冒険者じゃなくて料理人としてもやっていけるんじゃないだろうか。

翌日。

「寒い！」

クリアが毛布にくるまって不平を漏らした。俺達は早めに馬車を出発させている。急げば本日遅くに花の都に到着出来るかもしれないからだ。

しかし、今日は天気恵まれなかった。冷たい雨が今朝から降り続けているのだ。昨日と同様に視界も悪い。

「ちょっと雨は厳しいね」

秋留も紫のコートを着て寒さに耐えている。

「次の街で防寒具も買い揃えたほうが良さそうだな」

北側の大陸に来た事がない俺達は厚手の防寒具は持っていないのだ。

「冷えますな」

ゾンビのジェットも寒さで震えているようだが、ゾンビに体温と

かあるのか？

「！」

森の中を何者かが進んでくる気配がある。俺は銃を構えて馬車から後方をうかがった。

俺の警戒に気付いて秋留も馬車の後方にやって来る。

「何かいるの？」

クリアが聞いてくる。俺が辺りを気にしている時は静かにしてしてくれ。秋留はそれを分かっているため、クリアに「しい〜」という仕草をしている。

「相当デカイぞ……昨日のオバサンではなさそうだけど……」

後方の木々がバキバキと倒れていっていた。

そして現れたのは巨大なモンスター、太古に生きていたという恐竜のように見える。

しかし注目すべきはその右手についている機械だ。

「リモデラー……」

秋留が呟く。

モンスターの中でも魔族などに改造されたものをリモデラーと言う。普通のモンスターに比べたら段違いのパワーと厄介さを持っている。しかも目の前のリモデラーはやたらとデカイ。頭だけで馬車と同じ位があり、アンバランスな感じで頭と同じ位の大きさの身体がくっついている。

「危険ですな……逃げましょう」

後方を確認したジェットは馬達に鞭を打った。馬車のスピードがグンッと上がる。

「お、おっかけて来ますよ」

シープットとクリアは怯えきってしまったている。

俺はネカーをぶっ放した。予想通り硬そうな皮膚を軽く傷付けただけに終わった。

「がああああおおおおお」

モンスターが叫ぶ。大きな鳴き声に耳が一瞬遠くなりバランスも

崩れた。

「水の牢獄により全ての者を包み込み全ての者に残酷なる死を……」
秋留が呪文を唱え始めた。俺は秋留を援護するようにネカーとネマーでモンスターの両目を狙う。しかし眼まで固いらしく硬貨はあっさりと弾かれてしまった。さすがリモデラー、と感心している場合ではない。

「ウォータープリズン！」

秋留の手から巨大な水球が飛び出してモンスターの頭を包み込んだ。この魔法は水でモンスターを窒息死させるという恐怖の魔法だ。「やったか？」

しかし目の前でモンスターの頭に張り付いていた水球が消えた。魔法を無効化したのか？

「飲まれちゃったみたい」

秋留の台詞通り、モンスターは美味かった、という風に舌なめずりをしている。

そして右手の機械、巨大な銃口を馬車の方へと向けた。

「ジェット！俺が指示したらその方向に、馬車を移動してくれ！」

「まかせるですじゃ！」

モンスター右手の銃口が赤く光りだした。

「左！」

俺の合図でジェットが馬車を左に動かす。さっきまで馬車がいた場所にモンスターの銃口から発射されたエネルギー弾のようなものが直撃した。

「きゃあああああ」

「うわあああああ」

大きく揺れた馬車にクリアとシープットが必死にしがみ付いている。カリューと紅蓮も必死に馬車の床に爪を立てて振り落とされないようにしているようだ。

それにしても今の攻撃で森全体が振動したぞ……なんて威力なんだ。

「ウンディーネの怒りは全てを飲み込む反流となる……」

秋留が別の呪文の詠唱を始めた。

俺はネカーから硬貨を取り出し、コートの内ポケットから特製のコインを取り出した。このコインは間に火薬を挟んだ特別製で着弾と同時に爆発を起こすようになっていた。

「食らえ！」

火薬入り硬貨を装填してトリガを引く。その硬貨が狙い通りにモンスターの中の口の中へと入り爆発を起こす。

どうだ？

「ぐ、ぐおおおおおん」

口から血飛沫をあげながらモンスターが走りよって来る。同時に銃口もこちらに向けているようだ。

「流水の力を我が手に宿し怒りを静める剣となれ……」

秋留の呪文の詠唱はまだ終わらない。

「もう一発爆弾をお見舞いしてやるぜ！」

俺は背中に背負った鞆から爆弾を取り出しモンスターの口に再び投げつけた。投げる瞬間に手甲に導火線をこすり付けて火をつける事は忘れていない。

再びモンスターの頭が爆発により後ろに仰け反った。しかし同時にモンスターの右手からエネルギー弾が発射された。

「左！」

ジェットへの指示が遅れた。このままでは避けきれない！

「フラッドブレード！」

その時、秋留が呪文を解き放った。水で出来た鋭い刃がモンスターの発射したエネルギー弾と接触して大爆発を起こした。馬車に貼り付けてある板の何枚かが剥がれて吹き飛んだが、かろうじて馬車は倒れる事なく街道を疾走する。

「がううううう」

大地を揺らしながら諦めの悪いモンスターが俺達の馬車を追いかけてくる。二度の爆発で馬達にもダメージがあったようで先程のよ

うなスピードが出ていない。このままでは追いつかれる！

「うがっ」

突然、モンスターの動きが止まった。身体が痙攣しているようだ。

「な、何だ？」

「……ツートンとカーニヤがあのもンスターを取り殺そうとして
いるのよ」

「……」

秋留の答えに思わずゾツとした。俺はかなり危険な相手に身体を
貸していたんだな……。

俺達の乗る馬車はモンスターから大分離れた場所で様子をうかが
っていたが、やがてモンスターの巨体が地面へと沈んだ。

「勝ったのか」

「ピシッ」

「パシッ」

俺の質問にどこからか答えが返ってきた。何を言っているのか
分からないが想像は付く。

「怖かった……」

クリアは半分泣いている。

「ううう……」

シープットは号泣だ。

「危なかったですな」

ジェットはいつの間にかお茶を飲んでいる。安心し過ぎだ。

「ガウガウ」

「ワウワウ」

最早何を言っているのか分からない。

「連れて来て良かったでしょ？」

「いや、こうなったのはタマタマだろ？」

「あれ？ バレた？」

とにかく馬達にも無理をさせてしまったので、もう少し進んだ場
所で休憩を取る事にした。今日中にファリに到着するのは無理だろ

う。

「死ぬかと思ったですメ」

『……』

一同沈黙。不思議と俺達の輪の中に見知らぬ顔が一匹。サイズや見た目から言うに妖精だろう。

「えーっと、やっぱり妖精だよな？」

「はい！ 雨降り小僧のアマ吉と申しますメ」

『雨降り小僧……』

俺達全員は声を合わせて上を見上げた。今も冷たい雨が降っている。

「今朝からこの馬車の屋根で寝かせてもらっていましたメ、さっき屋根が吹き飛ばされた時は死ぬかと思いましたメ」

秋留やジェットの視線が俺に注がれる。

「いや、気付かなかった」

「アマ吉さんはやっぱり雨を降らす事が得意なの？」

秋留が優しく問いかける。

「はい！ というか僕のいる所は勝手に雨が降りますメ！」

港町コックスを発してからというもの、妖精に悩まされっぱなしな俺達はその場所から移動するのも嫌になってしまい、そのまま野宿の準備を始めた。

途中、アマ吉は別の馬車が通りかかった時にコッソリ馬車の屋根に飛び乗って、先に進んでいった。

「晴れたね」

秋留が頭上を見上げた。

日もだいぶ傾いてきたが、空は雲ひとつない青空だ。……雨降り小僧がいなくなったためだろう。

「この大陸は、疲れるな……」

俺はテントの中に倒れこんで愚痴った。

「な、慣れですぞ……」

さすがにジェットも少し疲れているようだ。

俺達は簡単に早めの夕食を済ますと、その日は何もせずに寝てしまった。

港町コックスを出発してから四日目の朝だ。

今朝は昨日と違い大きな青空が広がっているが、北側の大陸だけあつて肌寒い。

「屋根よーし！」

「下側よーし！」

俺は馬車のどこかに妖精が忍び込んでいないかチェックをしている最中だ。何だか馬鹿らしい。

「それでは出発しますかな？」

『おー！』

全員、多めに休息を取ったせいで体力は万全だ。ペット達の鳴き声やラップ音もいつもより大きく聞こえる。俺は妖精に出会わない事を祈りつつ馬車からの景色を眺めた。

相変わらずの幻想的な世界が広がっている。

「良い天気だねー……何だか眠くなってきちゃ……」

台詞を最後まで言い終わらないうちにクリアが秋留の膝の上で寝始めた。

「ふわあーあ……私も寝るね」

秋留が俺に手を振りながら下を向いて眠りに入った。馬車の動きに合わせて頭がカクカクと揺れている。

「昼前には到着しそうですね」

ジェットが街道沿いの案内版を眺めている。『花の都ファリは直進四十キロメートル』と看板にある。この馬車の今の速さなら後二、三時間で到着する距離だろう。

「皆さん、到着しましたぞ！」

どうやら俺まで眠ってしまったようだ。ジェットが御者席から大声で俺達を起こす。

「んん……」

俺は伸びをしながら馬車から見える景色を眺めた。

「！」

俺はネカーとネマーを構えて馬車から飛び出した。

「ジェット！ 悠長にしている場合ではないだろ！ 街がモンスターに襲われている！」

俺は町の入り口に向かって走り出そうとした。

「待ちなされ！」

ジェットが俺の後頭部をどつく。

「痛っ！ 何するんだ、ジェット」

俺の傍で杖を構えている秋留や、後方でカリューと紅蓮を連れているクリアもジェットの対応に右往左往している。ちなみにシートは馬車の陰に隠れている。

「襲われているように見えますかな？」

ジェットに言われて俺達は目の前の街の状態を眺めた。

……。

色様々な人間大のゴーレムが街の至る所にいる。あるゴーレムは人間と会話を交わし、別のゴーレムは街の通りを掃除している。更に別のゴーレムは頭に鉢巻を巻いて店先で叩き売りをしているようにも見える。

「何なんだ？ これは……」

咄然とする俺達の前に出たジェットは優越感たっぷりに説明し始めた。

「今まで沢山の妖精をご覧になりましたな。大きいから小さいのまで……」

安全そうだと認識したシートが馬車の陰から出てきたようだ。俺はそのまま頷いてジェットの説明の続きを聞く。

「数多くの種族が共存するアステカ大陸で、身体の小さな妖精が一緒に生活するのは困難だと思われませんか？」

確かに。

人間や獣人と妖精ではサイズが違うため、家やらアイテムのサイズの違いで色々と不便しそうだ。特に妖精が営む店なんて入れるのか、と凄く心配になってしまう。

「そこで妖精達が作り出したのが、草木や大地で生成した人形、ギジンですじゃ」

『ギジン……』

俺達は関心して街を眺めた。妖精達が作り出した人形……、さすがアステカ大陸、不思議が一杯だ。

「妖精達はあの中に入ってギジンを操っているんですじゃ」

俺達が話していると一匹のギジンがノソノソと近づいて来た。

「花の都フアリへようこそ！ 本日の宿はお決まりですか？」

よく見るとギジンの右手には『花一杯宿』と書かれたプラカードがある。どうやら宿の客引きのようだ。

「ギジンは喋る事も出来るの？」

クリアが眼を輝かせている。楽しそうだ。

「それは違うよ、ギジンの中の僕が喋っているんだよ」

急にギジンの腹から頭に黄色い花のついた妖精が頭を出してきた。頭は俺の拳程のサイズしかない。

「可愛い〜」

「可愛いね」

クリアと秋留が小さい妖精を見つめて嬉しがっている。確かに今まで出会った妖精よりは愛くるしい姿をしているが、まだまだ分からないぞ……妖精には散々振り回されているからな。

「か、可愛い？ ば、僕は男だぞ！」

妖精にも性別があるのか。

それにしても、口調は怒っているようだが顔は凄く嬉しそうだ。

「妖精さんの宿まで案内してくれる？」

秋留のお願いは誰も断れるはずはない。

妖精はデレデレとした顔をギジンの中に引っ込めて、俺達を案内し始めた。

「お姉さん達、この大陸は初めて？」

「ジェットは来た事あるんだけど、私達は初めてだね」

デレデレ妖精は秋留と仲良く会話をしている。ちなみにデレデレ妖精と心の中で名づけたのは勿論俺だ。由来はそのまんまだ。

「あ！ あそこの饅頭はお土産に最適だよ」

デレデレ妖精の台詞にクリアの眼が光った。

その光を見たシープットは重い荷物に負けずに素早く饅頭を購入してきたようだ。

「そういえばこのファリの街は初めてでしょ？ 花の都の名前に負けない位、綺麗な所でしょう？」

確かに今歩いている通りも色形様々な花で一杯だ。

花壇には赤や黄色の花が咲き乱れ、街灯は花の形をしている。家の屋根も色とりどりの花の形のものが多い。

「ここだよ、花一杯宿！」

目の前に壁一面が花柄の趣味の悪い建物が現れた。屋根は葉っぱで出来ているかのように鮮やかな緑色だ。

勿論、花壇が所狭しと置かれ本物の花も数多く飾られている。

「いらっしやいませ！ おや、うちの客引きに捕まったようだね」
宿の中から女将風のギジンがエプロンを付けて現れた。

「良い宿だね」

「え？ あ、ああ……」

秋留が良い宿だと思うなら良い宿に違いない。俺達は眼がチカチカするようなロビーへと通された。室内の壁やソファなども全て花柄だ。

「落ち着かない」

俺は花柄のベッドカバーで覆われたベッドに横になって花柄の天井を見つめている。

秋留はこの宿で一番高い部屋に、いつも通りクリアと一緒に泊まる事になった。その部屋にはペット達もいる。クリアの隣の部屋に

は執事のシープットが泊まっていて、更にその隣がジェットと俺の部屋だ。

「なかなか良い宿でございますな」

隣のベッドに座って部屋にあったお茶セットで熱いお茶を飲んで
いるジェットが言った。

確かに見た目はキツイがベッドのクッションの具合や部屋の綺麗
さで言ったら文句はない。それに部屋のいたる所に香りの良い花が
飾られているためジェットの死臭もあまり気にならない。

「ここで食事を取らなくて良いのがせめてもの救いだな」

俺は一人呟いた。

この宿では食事が出ないため、泊り客は外に食べに行く必要があ
る。

俺とジェットは荷物を整理し、簡単な装備をして秋留たちの部屋
へと向かった。扉の作りも俺達の部屋とは違うようだ。さすがスウ
イトルームだ。さぞかし部屋の中は花だらけなのだろうな。

「凄いの！ お風呂に薔薇の花びらが一杯浮いてたの！」

クリアが嬉しそうに部屋から出てきた。

「ふう〜ん」

「それは良かったですな」

俺の適当な返事にクリアは少し機嫌を損ねたようだが今更気にし
ない。

「お肌がスベスベになりそうだよ」

「へえ〜！ そりゃ良いな！ 俺も一緒に入ろうかな！」

思わず滑った口に秋留のグーパンチが飛び込んできた。さすがに
調子に乗りすぎたか。

「それでは少し遅めの昼ごはんを食べに行きますかな」

『お〜！』

相変わらずの獣の鳴き声やらラップ音が聞こえてきた。ペット同
伴の店を探すのは一苦労なのだが……。ちなみに幽霊同伴なのは気
にする必要はないだろう。居合わせた客には悪いけどな……。

「この花の都では何が有名なんだ？」

俺は隣を歩くジェットに聞いた。

「さぁのお。この街に来るのは初めてですじゃ」

「あ？ でもギジンの事知ってたじゃないか！」

「ギジンはこの大陸で妖精が多い場所ならどこでも見かけますぞ」
なるほど。

ギジンは一般的に使用されているのか。今後気をつけないとな。

「あの人はやたらと毛深いみたいだね」

「ふおっふおっふお。あの方は獣人ですじゃ」

さすがに色々な種族が目白押しだ。

人間にエルフに獣人に妖精……。よく見ると背の低いホビットの姿も見える。

「まずは腹ごしらえだ」

俺は辺りをキョロキョロと見渡した。美味そうな匂いのする店を探そう。

「あの店が良い」

クリアが叫んだ。クリアの指差す方向には『レストラン・華』といういかにも高級そうな店が建っていた。俺の鼻も悪い反応は示していないが……。高そうだなあ……。

「高級そうですねあ」

「たまには奢ってあげるよ！」

クリアの嬉しい申し出。

「いや！ 幼子に金品をめぐって貰うなど出来ませぬ！」

ジェットが激しく否定した。

そしておもむろに懷に入っていた錢袋を確認する。

「ワシが奢りましょう！ 年長者としてたまには！」

そう言ってジェットが勇ましく高級そうな店へと入っていった。
大丈夫か？

店の中は高級そうなムードに包まれていた。

客層も上品な服を着た客が目立つ。……タキシードを着たギジン

は場違いな感じではあるが。ありゃあ、どうやって食うんだ？

「美味しそう」

クリアが眼を輝かせている。

「確かに」

俺はメニューを見て生唾を飲み込んだ。俺達が今まであまり食べたことのないメニューの内容と金額だ。こういう洒落た店は少し苦手なんだが……。

「ガウガウッ」

「ワオッ」

カリューと紅蓮も嬉しそうだ。先程から良い匂いがしているしな。ちなみに銀星は入店を許されなかった為、外で高級草の食事をさせてもらっている所だ。

「足りなさそうなら私も協力してあげるからね」

秋留がジェットに優しく声をかけている。まあ、問題はないだろうとは思うのだが。

「うーんとねえ……ワイルドウルフのワインソース煮とお……レインボーフィッシュのテリーヌにい……特製ホタテのキャビア添えでえ……トリュフのサラダも食べたいしい……フカヒレスープも美味しそうだからねえ……」

クリアの台詞にジェットがメニューを確かめながら青い顔をしている。いつもの食事よりも十倍以上はしそうな値段だからなあ。

「色々食べたいものがあるんだね」

「うん！ クリア、育ち盛りなの！」

「私はこの満腹コースとかが良いと思うんだけど……」

秋留が指差したメニューは比較的リーズナブルだが十分満足出来るような名前ではある。

「うん！ そうだね！ アタシもそれが良いと思ってたんだあ！」
うそつけ。

しかしクリアの台詞にジェットは安心したようだ。いつもの如くシープットはクリアの成長振りに喜んでいる。……ずる賢くなった

だけの気がするの俺だけか？

暫くすると料理が順番に運ばれてきた。順番に料理が運ばれてくるような店にもあまり入った事がないからなあ。

「美味しいね」

「うん！」

秋留とクリアが仲良く話している。ジェットも喜んでもらえて嬉しそうだ。

俺達は久しぶりのまともな食事を終えるとレストランを出て花の都の通りを歩き始めた。後ろからは若干落ち込んだジェットが付いてきている。会計は三十万カリムだった。痛い出費に違いない。

「皆さん、防寒具を用意しませんとな」

ジェットが気を取り直したようだ。

「そうだね、街の中でも肌寒いしね」

「じゃあ、秋留お姉ちゃんと一緒に買い物する〜！」

クリアが秋留にベツタリとくっついている。

その後俺達は話し合い、あまり大人数でも行動し難いという結論になった。

「じゃあ、宿屋の前でちゃんと待ってるんだよ！ どこかに行ったりしたら……分かってるね？」

邪魔者なカリューと紅蓮をクリアが追い払っている。

「シープットはそれなりに離れて付いてくるようにね」

「はい！ お嬢様！」

シープットは嬉しそうだ。そんな扱いされて嬉しいのだろうか？

「それでは銀星、お主も宿屋で待っておるんじゃぞ」

主人に忠実な銀星は恨めしそうに秋留とクリアを見ながら宿屋へと向かっていった。

「ブレイブ殿、ワシと一緒に買い物しますかな？」

「い、いや……いい……」

ジェットの誘いを丁寧に断る。

「じゃあ……十八時に宿屋の前で待ち合わせね」

秋留とクリアが手を繋ぎながら人混みの中へと消えていった。ちやんと後ろにシープットも付いている。十メートルは離れているようだ。

「ではワシも行きますじゃ」

「また後でな」

俺はキヨロキヨロと通りを見渡すと小走りに秋留達が向かった通りに入っていった。偶然を装って一緒に買い物をしてしまおう。

しかしまるで避けられているかのように秋留達が見つからない。

暫く探索が続けたが俺は諦めて盗賊専門店を探した。

「色々な店があるし……どのアイテムも興味深い」

魔族の本拠地があるワグレスク大陸に近いせいか魔力のあるアイテムや装備品が目立つ。

俺はまず眼に付いた防具屋へと入っていった。

「いらっしやい、あれ？ ずいぶん寒そうな格好をしていますね」

「この大陸に来て間もないんだ。何か防寒具になりそうなものはあるか？」

俺は店員にコート売り場へと案内してもらった。どれも暖かそうだが防御力の面では少し心配だ。

店員に礼を言う俺は他の店を探すために通りに出た。

「あの通りは怪しそうだ」

俺は盗賊独特の雰囲気を感じて一本の細い通りに入っていった。花の都と言ってもこのように怪しげな通りはあるものだ。それほど街に行っても変わらない。

……暫く進んだが俺の予想したような店は無かった。あった、いや、いたのは地面に風呂敷を広げた一人の露天商だった。手作りらしい看板には『暗黒堂』と書いてある。

「……お、いらっしやい！」

全身黒づくめ、黒い帽子を目深に被った男が話しかけてきた。

「こんな所で露天商なんてやって客が来るのか？」

率直な意見を述べてみた。

「来たじゃないですか」

そう言って怪しげな男が俺の方を見上げた。

「……」

俺は胡散臭そうな眼で露天商の広げているアイテムを眺める。後方の壁にも短剣や鞭など簡単な武器も飾られていた。

「あれ？ この人形……」

俺は風呂敷に置かれている真っ黒の人形を手にとった。背中には真っ白な羽が生えている。

「お！ お客さん、お目が高い！」

「堕天使のお守り……だっけ？」

「……ほう……お客さん、通だね？」

「何の通だ！」

思わず突っ込んでしまった。

この人形は秋留が装備している杖に取り付けられている人形と全く同じもののように見える。

「！」

俺は思わず後ずさった。目の前の男がいつの間にか立ち上がっていたからだ。身長は二メートル以上あるように見える。あまりの威圧感に俺はネカーとネマーを構えそうになった。

「お客さん、その腰に装備している短剣……」

そう言って男が俺の腰にある黒い短剣を指差した。これはチェンバー大陸の町で人間だった頃のカリューが買ってくれた、言わば形見だ。

俺は買った場所や経緯を簡単に説明した。

「それ、僕が作ったものです」

「え！ そうなのか！」

「はい。どうです？ 使い心地は？」

この胡散臭そうな男が作った短剣……思わず呪われていないか確認したくなってきた。しかし今までの冒険では色々と役に立ってくれたし、デザインも黒という色も良いので気に入っている。

「ま、まあまあかな」

気に入っているとは言いたくなかった。

「そうですか、気に入ってくれているようですね」

またしても心の中を読まれたようだ。顔の表情を変えない修行をした方が良さそうだ。

「……えっと……暖かくて防御力の高いコートとかはないよなあ？」

俺は品揃えを眺めてから念のため聞いてみた。どれもこれも小さいアイテムばかりなので売ってないだろうな。

「お客さん、この品揃えを見てコートを注文しますか」

「あはは」

笑って誤魔化した。

「ありますよ、とっておきのコート」

「あるのかよ！」

こいつの相手をしているとやたらと突っ込みが多くなってしまいうさだ。

男は後ろの荷物をゴソゴソ漁って一着のコートを取り出した。

「これも僕が作ったコート、名づけて『ブラックフードハーフコート』！」

じゃん！ と男がコートを広げた。真っ黒なロングコートでフードが付いている。裏地は毛皮で覆われていて暖かそうだ。デザインは悪くないが……。

「……ネーミングセンス無いなあ」

「そうですか？」

「見たまんま……しかもハーフと言っても見た目ロングだぞ？」

「甘いですよ、お客さん。このコート、材料が足りなくて裏地が半分無いんですよ」

「おい！」

「安心して下さい。縦半分じゃなくて下半分の裏地が無いだけです」「そこを心配している訳ではないんだが……」

俺は頭を抱えた。この大陸はこんな奴ばかりなのか……。

「下半身はアンダーウェアでも購入して暖かくして下さい」

「そこまでして購入する意味はあるのか？」

「ふっふっふ……」

そう言っただけ男は持っていたコートを路地の離れた場所に置いた。

「このコート、高い魔法防御力があります」

「ほう」

俺は胡散臭そうに返事をした。すると男は両手を構えて何やら集中し始めた。

「火炎の住人よ、全てを貫く炎の矢となれ……ヒートアロー！」

「え？」

驚いている間に男の放った炎の矢がコートにぶち当たった。何てことを……。

「ご心配無用」

男が再びコート持って近づいて来た。……うっすらと煙が上がっているがコート自体は全くの無傷のようだ。

「……これから買うかもしれない商品に魔法をぶっ放すなよ」

「買います？」

「いくらだ？」

「ずばり五百万カリム！」

怪しい男の手が立ち去ろうとする俺の肩をガシッと掴む。

「あはは……お客さん、気が早いね」

「いくらなんだ？」

「お客さん、うちのお得意さんみたいだから……」

そう言う男の動きが止まった。必死に考えているようだ。

「八十七万とんで七カリム！」

「その端数は何だ！」

「気持ちです」

「意味が分からない」

俺は黙って財布から百万カリム硬貨を取り出した。

「まいどあり」

「着ていくからそのままが良い」

「そうですか？ では……」

俺は扱い難い男から魔法防御バッチリなコートを手に入れた。この手のアイテムは名前ばかりで効果が薄いものが多いのだが、このアイテムは別物のようだ。正直、五百万カリムを払う価値もあるかもしれない。

「ツリはいらない。俺の気持ちだ」

「！ さすがお客さん、太っ腹だね」

俺は振り返らずにその場を後にしようとした。

「そうそう、言い忘れました。その黒い短剣は『ダークサーベル』
って言うんですよ！」

短剣じゃないのかよ！ と最早突っ込む気にはなれずに俺は疲れて大通りへと戻っていった。

「……さて」

俺は気を取り直して通りにある時計を眺めた。待ち合わせの時間まで、まだまだ余裕があるようだ。

暫く他の店屋を眺めて消耗品や手袋、マフラーなどの防寒具も一式揃えた。勿論厚手のアンダーウェアも忘れてはいない。

「おお、ブレイブ殿」

通りを歩いていると後ろからジェットに話しかけられた。ジェットは暖かそうな灰色の帽子と灰色のロングコートを着ている。肩から腕にかけて変わった装飾が付いている。

「暖かそうな格好になったな」

「ブレイブ殿も格好良いコートを見つけたようだな」

買った経緯は忘れたいが確かにデザインは文句ない。背中に大きな黒い十字架の刺繍がしてあるのも気に入っている。裏地は少しおかしいが我慢しよう。

「ブレイブ殿、少し相談があるのですが……」
ジェットの話はこうだ。

浪費癖のあるクリアに金の大事さを教える。そのためにも魔族討伐組合で簡単な依頼を見つけて来て欲しい、という事だった。昼間のレストランの一件でジェットも懲りたのかもしれない。

一通り買い物も済んでいた俺はジェットと別れると魔族討伐組合の建物目指して歩き始めた。

「ここか」

花のつぼみのようなデザインをしたポップな魔族討伐組合の建物が見えてきた。趣味が悪すぎる。

「いらっしやいませ……あ？ レッド・ツイスターのブレイブ様ですネ」

カウンターの向こうの組合員が声をかけてきた。

魔族討伐組合で仕事をするスタッフは、ある程度有名な冒険者の事は知っている場合が多い。

「簡単な依頼は無いかな？」

俺は魔族討伐組合に登録している事を示す身分証を提示する。魔族討伐組合から依頼を受けるにはどんなに知名度の高い冒険者でもこの身分証が必要になる。

「身体慣らしですか？」

「ま、まあな」

組合員は手元のファイルをペラペラとめくって依頼を探し始めた。

「猫のミーちゃんを探して欲しいという依頼があります」

駆け出しの冒険者にはこういう依頼もありなのだが、さすがに軽すぎる。

「もう少し難しいやつで……」

「はい。それでは……」

そう言って組合員の男は再びファイルをめくり始めた。

「ウマツクの角を十本集めて欲しい……という依頼がありますが」
「ウマツク？」

聞いた事のないモンスターだ。この大陸独特のモンスターだろうか。

「ウマツクの情報をくれ」

魔族討伐組合では要求すれば魔族やモンスターの情報も教えてくれる。ただし一情報につき千カリムも取られる。依頼者から仲介料を貰い、冒険者からは依頼達成料の五パーセントを貰っていく。それ以外にも沢山の小銭を稼いでいる事を考えると……全く良い商売だよな。

「ウマツクは生息地が限られていますからね。それでもこの大陸では結構メジャーなモンスターですよ」

そう言って組合員の男は別のファイルを取り出してページをめくり始めた。

「……集団では行動しません。素早さは高いですがレッド・ツイスターの皆さんなら問題ないでしょう」

説明しながら組合員がウマツクの写真を見せてきた。

灰色の毛並みをして水色の変った耳をつけている。頭の上で金色に輝いているのが今回の依頼品であるウマツクの角のようだ。

「ウマツクの肉はマニアには好評のようですね」

「どれ位で取引されている？」

「ものにもよりますが、引き締まった肉程高値で取引されているようです。一頭でいたい一万カリムですね」

俺はついでに肉も収穫してこようと心に決めて依頼を受ける事にした。

その後依頼主である怪しい学者に会ってから、俺は待ち合わせ場所の宿屋の前に戻っていった。時間は十八時前になっている。丁度良い頃合だろう。

「おお、お二人とも、暖かそうな格好になりましたな」

宿屋の前には既に俺以外の全員が集合していた。待ち合わせ時間の前だというのに、遅れてきた俺をクリアが白い眼で見ているような気がする。

ジェットの言った通り、秋留とついでにクリアも厚手のコートな

どの防寒具を探してきたようだ。

秋留は白を基本に綺麗なピンク色で縁取られたコートを着ている。首周りは赤い羽根のようなもので飾られている。

「このファイヤーードードーの羽は、高い防寒力と氷系の魔法を弱める力があるんだってさ」

俺の目線を珍しい物を見ているものと勘違いしたらしい。俺は新しいコートを着ている秋留の姿全体に心を奪われていたというのに。「アタシのコートも秋留お姉ちゃんと同じ店で買ったんだよ！」

クリアが俺達に見せびらかす為にクルクルと回り始めた。

嫌でも視界に入ってくるため軽く観察してみると、秋留と同じく白を基本にして、肩に暖かそうな灰色の毛玉を着けたコートを着ている。胸の所には真っ赤なリボンが付いている。

コートとお揃いなのか真っ白の帽子にも赤いリボンが付いていた。

「可愛くなられました……」

俺の隣に來たシープットがハンカチを眼に当てている。そんなに感動する事か？

「それよりもシープットは防寒着は買っていないのか？」

買い物に出かける前と同じ格好をしているシープットに聞いた。

「甘いですよ、ブレイブ様。私ならちゃんと防寒着買いました」

「え？ 変わっていないように見えるぞ？」

そう言うシープットは上着の裏側を見せてきた。

「同じデザインですが裏地が全く違います」

「……同じデザインにこだわる必要があるのか？」

「執事としてのポリシーです」

「……そうか」

シープットはどこか先程の店員と同じような種族な気がしてきた。俺は会話を切り上げ宿屋の方を見る。丁度ギジンの女将が出てきた所だ。手をエプロンで拭きながら近づいてくる。

「皆さん、そろそろ食事の準備が出来ますよ」

「え？ この宿って食事出ないんじゃないかったですか？」

秋留が言った。確かに泊まる時にそんな事を言ってた気がするが……。

「ふふ、皆さんへの特別サービスです。あまり泊まって下さらないスウィートに泊まって頂いてますし」

俺達は……主にクリアがワイワイとハシヤギながら俺達はカラフルな宿屋へと入っていった。

「お疲れ様でした、お食事の準備が整っておりますよ」

普通の人間種族の店員のようなのだ。

最近『普通』と呼べるような人間をあまり相手にしていない気がするのは気のせいだろうか。

「美味そうだな」

「そうですね」

丸いテーブルの上には様々な料理が並べられている。肉料理から野菜料理まで種類は豊富だが、森の中だけあって海の幸は見当たらない。

たまたまいた客引きに捕まってこの宿に来たが、店員は気が利くし、特別料理も美味しいし、部屋も綺麗だから、ちよつとの趣味の悪さは我慢するか。

「これは美味しいですな」

「ちよつと癖があるけどね」

ジェットとクリアが話している。確かにこの肉は独特の匂いがあるが俺は嫌いではないな。

「それはウマツク肉の煮込みです」

料理長と思われるギジンが姿を現した。

これがウマツクか。確かに一部のマニアには人気がありそうだ。

「あ、言い忘れてた」

俺は魔族討伐組合で受けたウマツクの角に関する依頼を全員に話した。

「へー、面白そう！」

「大変ですぞお」

「大丈夫だもん！ アタシ頑張る！」

そう言ってクリアがフォークに肉を刺したままガッツポーズをとっている。どこかで見た光景だな。

……これでクリアが少しでも金の重要さを分かってくれるといいのだが。

「あ、そうだ！」

俺は更に思い出した事を報告した。

「秋留の杖についている人形、売ってる奴がいたぞ」

「え？ そうなの？」

秋留が椅子に立てかけていた杖の人形をマジマジと見ている。どこで買ったのか忘れたが、秋留は真っ黒の人形を気に入っているよなのだ。

「で？ 買ってきてくれたの？」

クリアが俺の方を向いて眼をキラキラさせている。

「……？ 買ってないぞ。何で俺がその人形を買わないといけないんだ？」

椅子をガタンと倒して立ち上がったクリアが鬼のような形相で俺を睨み付ける。

「アタシが欲しがってたの知ってるでしょ！ 何で買っといってくれないの！」

「うう……」

確かに。コイツ、秋留と何でもかんでもお揃いにしているしな。気を利かせて買わなかったのはやばかったか。

「それはブレイブが悪いね」

秋留もフォローのしようがないようだ。冷たい……。

「あ……明日買ってきてやるよ」

「……信用出来ないからアタシも一緒に行く！」

「私も一緒に行こうかな。あのお店、変わったアイテム多かったしそれは幸せだ。秋留と一緒に買い物が出来る。」

クリアのために余計な気を使わなくて正解だったかもしれない。

……つと、あまり喜ぶと顔に出るから止めておこう。

俺達はそれから食事を済ませるとそれぞれの部屋に戻って眠りへとついた。

「……あれ？」

翌日の午前中。

総出で俺が昨日買い物をした露天商の場所に來たが、そこには誰もいなかった。

秋留は少しガッカリしているようだ。隣でクリアが激しく怒っているが気にしない。

「しょうがないですな。露天商は何日も同じ場所には留まらないものですじゃ」

ジェットが優しくフォローしてくれているようだが、俺にはあまり効果がない。何より秋留をガッカリさせた事が無念だ。

「しょうがないから、依頼を始めよっか」

俺達はファリの宿屋に荷物を預けたまま街道を歩き始めた。街道は比較的モンスターの出現率が低い為、適当な場所で森の中へ入る必要があるだろう。そればかりは長年の勘が頼りだ。

「ウマックってどういうモンスター？」

「灰色の毛並みで耳が水色、金色の角が生えているんだ。レッド・ツイスター程の力があれば仕留められるらしいぞ」

秋留に優しく解説する。

「どこにいるの？」

「頑張って探せ！」

クリアの質問にも俺は平等に対応しているつもりだがクリアは俺の事を睨んでいる。気の小さい奴だ。

「あれではございませんか？」

シールプットが目ざとく何かを見つけたようだ。

見ると木の陰から怪しげなモンスターが様子を窺っていた。

灰色の毛並みに水色の耳、金色の角……ウマックに違いない。こ

んなにアッサリと見つかって良いものだろうか。

「逃がすな！ 奴の角を十本だぞ！」

俺はネカーとネマーを構えようとしたが、ジェットに止められた。黙ってジェットが首を振る。

そうか。この依頼の目的はクリアに金の大事さを教えてやる事だったな。

「クリア！ カリューと紅蓮を使ってモンスターを仕留めるのよ！」
秋留に言われて気付いたクリアはカリューと紅蓮に命令を下す。

「カリュー！ 紅蓮！ 左右から回り込んで！」
命令の仕方についても少しは秋留に教わったのかもしれない。
クリアの命令でカリューと紅蓮がウマックを挟み撃ちにする。

「フオーン」

ウマックが大きく鳴いて紅蓮に突撃した。紅蓮は交わしざまにウマックの足に噛み付く。そして勢いの無くなったウマックの胴体にカリューが爪を立てた。

あの二匹、息が合ってきているし、紅蓮に至ってはモンスター相手に遅れを取っていない。

「不思議でしょ？」

いつの間にか秋留が隣に来ていた。秋留の髪から良い香りが漂ってくる。花のシャンプーでも購入したのだろうか。

「何、鼻をヒクヒクさせてるの？」

「！ いや、な、何でもない。それより、何か秘密を知っているのか？」

秋留が俺の動揺っぷりに怪しげな視線を投げかけているが、そのまま説明を続けてくれた。

「ファリのアイテムショップで連動の腕輪っていう装備品を見つけたのよ」

名前から想像も付くな。

獣使い用の装備品だろうか。戦闘中のカリューと紅蓮の足首に輪っかが装備されている。お揃いの装備をクリアもしているようだ。

「ふふ。気付いたようだね。あの装備品で意思の疎通だけじゃなくて、獣同士の力まで分け与えられるらしいの」

「だから紅蓮の動きが良いのか。紅蓮なんて少し凶暴なだけの普通の犬だもんな」

「だね」

俺と秋留が会話をしているうちにウマツクは倒されたようだ。ジエットがウマツクに近づいて行って金色の角を死体から引き抜いた。「まずは一本ですな」

俺はさりげなく近づいて行ってウマツクの死体を掴んだ。

「とりあえず肉も高く売れるかもしれないから確保しておくか」

この肉が一万カリムする事は他の奴には伝えていない。俺だけのものだけ……。

「そうだね、一頭分で一万カリムらしいからね」

「え？」

秋留が俺の後ろから話しかけて来た。

……秋留はどうやらウマツクの肉の情報を仕入れていたようだ。

昨日の夜にもウマツクの肉が出たしなあ。あの女将め、余計な事をしやがって。

「一万カリムもするのか。知らなかったな」

自分で言っという何だが、大分わざとらしい台詞だ。

俺は頭を掻きながらウマツク肉を街道脇に持っていった。その上に所有物の証であるレッド・ツイスターの名札を置いた。こうしておけば掃除屋などに片付けられてしまう危険性は無い……他のモンスターに食われたりしたら諦めるしかないのだが。

「この調子で行こう！」

クリアが元気良く言っている。

……しかしそんなに順調に行くわけもなく、それから半日歩き回ったがウマツクは出現しなかった。変わったモンスターには色々出くわしたんだけどな。

「何で全然出ないのよ!」

クリアが文句を言っている。俺に対しては文句を言わないと気がすまない性格らしい。

「そもそもこの依頼はいくらなのよ?」

俺が悪いかのようにクリアが睨み付けてくる。

「十万カリムだ」

「安いわね!」

まるで鬼の形相だ。俺にはうつすらと二本の角が見えるぞ。クリアの角……依頼料は安そうだ。

「これ、クリア殿。冒険者にとっても一般市民にとってもお金を稼ぐというのはそれだけ大変だという事ですぞ」

ジェットに言われてクリアが大人しくなる。これが言いたかったんだよな、ジェットは。

「もうちよつと頑張って探そうね」

秋留が優しく語りかける。まるで飴と鞭だな。

「そうだ! さっきのウマツクの肉を食べようよ!」

「え!」

俺は思わず肉のある方向を守るように回り込んで驚く。

「そうだね、外で食べる御飯は格別だからね」

「ううう……」

俺の嫌そうな顔も秋留の言葉でかき消されてしまった。秋留が同意するなら仕方ないか。

俺達は先程の肉を切り裂いて、火にかけた。馬車を持ってきている訳ではないので簡単な料理しか出来ないが、相変わらず秋留の料理からは良い匂いが漂ってきた。

……俺に対する愛という名のスパイスだろうか。

「!」

俺は雑念を振り払って両銃を構えた。どうやら肉の匂いにつられて他のモンスターが寄って来たようだ。

俺の行動を見た他のメンバーも戦闘体勢に入る。

一丁前にクリアも何やら構えているようだが、様にはなっていない。

茂みから顔を出したのは……ウマツク！ 同属の肉の匂いに引かれるなんて何て間抜けな奴！

「行け！ カリューは上！ 紅蓮は下！」

今度は上下からの挟撃か。まあ、二匹いるんだから常套手段だな。クリアにそれ程難しい命令が出来るとは思えないし。

「待て！ 他のモンスターも近づいてきているぞ！」

俺は他の気配を察知して叫んだ。

俺達の目の前でカリューの身体が何者かの触手に弾かれた。

「ギャウツ」

空中で器用に回転してカリューが地面に着地する。

別の茂みから姿を現したのは……何だ？ ヒマワリの種の部分に獣の顔が入っている。まるでライオンのように。

「……趣味悪い顔しているわね」

クリアの眩きが目の前のヒマワリのようなモンスターに聞こえたようだ。大粒の涙を流しながらヒマワリモンスターが茂みの中へと戻っていった。

そうだ。

忘れていたがクリアはモンスターと意思の疎通が可能だったんだな。あのモンスターも可愛そうに。もう立ち直る事は出来ないだろう。

そして邪魔者が消えた途端にウマツクは倒された。これで二匹目か。先は長そうだ。

「よし！ この調子でえ！」

クリアが意気込む。

それから少し遅くなった昼ごはんを食べ、引き続き搜索を続けたが……ウマツクは見つからなかった。

「今のペースで行ったら、こんな事を五日も続けなくちゃいけない

じゃない！」

その日の夕食。

クリアのストレスが少しでも解消されるようにという願いも込めて、俺達は食べ放題の焼肉を頬張っていた。食べ放題だと思うと損をしないように沢山食べようとしてしまうのは俺の悲しい性なのか。「金を稼ぐのは大変なんだぞ」

俺は箸でビシッとクリアを指して言った。

「何かブレイブに言われるとムカツク」

「……」

不思議とクリアには色々と嫌われているようだ。

「ここは色々頭を使わないと駄目そうね」

秋留の真似事のようにクリアが頭を使うなどと言い始めた。ウマツクを頭突きで倒そうという算段だろうか。気性の荒いクリアならやりかねない。

その後、俺は限界を超える勢いで肉を食べ続けた。冒険者の基本は、食べれる時に食べれるだけ食べる、だ。俺以外のメンバーもひたすら肉を食べ続ける。秋留はバランス良く野菜も多く食べているようだ。

「うっぷ」

「ブレイブ、食べ過ぎ」

秋留が俺の膨れた腹を見ながら心配してくれているようだ。

俺は少し気持ち悪くなりながら宿に戻った。

「……はぁ」

俺は始終、クリアが静かに食事をしていた事を思い出して、少し不安にかられながら俺は眠りについた。何か起きなければ良いが。

「ふっふっふ」

翌日、宿を出た俺達の耳に聞こえてきたのは不気味な笑い声……クリアが笑っているようだが、とうとう可笑しくなってしまったか。「哀れな目で見てるわね」

「とうとう可笑しく……」

みしつとクリアの蹴りが俺の脇腹に突き刺さった。こいつ、武道家としてもやっていけるんじゃないのか？

「失礼ね！ 今日とは昨日のようにはいかないわよ！ まずは一匹、ウマックを生け捕りにするの！」

俺は秋留の方に眼をむけた。

首を横に振っている所を見ると、クリアが何をしようとしているのかは知らないようだ。

俺達は昨日とは反対側の森へと向かった。今回も徒歩での移動だ。クリアは昨日の食事の時の大人しさとは全く違い、目をギラつかせてやる気マンマンと言った感じで辺りを窺っている。

「ウマックちゃんどこ？」

やはり可笑しくなってしまったようだ。秋留も心配した顔でクリアを見つめている。

「ウマックちゃん出ておいで」

……秘策でも考えていたのだろうか。目の下にクマを作ったクリアの顔は正にバーサーカーだ。

その危険な罠にはまるかのように、暫くすると前方からモンスター1の気配が近づいてきた。

「前方だ……距離は二十メートル位だな」

「ウマックちゃん？」

「……とりあえず四足歩行だが、そこまでは分からない」

「使えない奴」

クリアの性格の悪さは相変わらずだが、俺に対する態度もそろそろ慣れてきたな。これが秋留に言われた台詞だとしたら、再起不能におちいる所だが。

「カリュー、紅蓮、ウマックなら殺さずに生け捕りにして」

クリアの台詞にカリューと紅蓮は黙ってうなずくと、左右に分かれ茂みに隠れながら標的に向かって静かに歩き出した。

「フオーン！」

暫くすると茂みの中から昨日聞いたウマックと同じ鳴き声が聞こえてきた。どうやらクリアの罠にかかってしまったようだ。

一体、何をされてしまうんだろうか、哀れなウマック……。同情せずにはいられない。

俺達が声のした方に近づいていくと、カリューの爪を顔の目の前に突き立てられたウマックが大粒の涙を流しながらプルプルと震えていた。更に同情を誘う。

「カリュー！ 紅蓮！ 離れて！」

突然、クリアが叫び、ウマックに抱きついた。

啞然とする俺達。俺達以上に意味不明な顔をしているウマック。

「大丈夫だった？ 手荒な事はするなって言っておいたのに」

生け捕りにしろ！ という手荒な命令は聞いた気がするのだが。クリアが優しくウマックの頭を撫でる。上辺だけの優しさだが、ウマックは騙されて落ち着いてきたようだ。

「私達はウマック保護協会。ウマックの素晴らしさを理解して、世の中のウマックをもっと大切しようとしているの」

そんなピンポイントな保護協会があったまるか！ などと突っ込みを入れる気にもなれない。それが一晩考えた末の作戦なのか？

「フォン……」

さすがにウマックもあまり信じていないようだ。

するとクリアがシープットを呼んでドデカイ鞆から何やら取り出した。……馬用の高級御飯のようだ。そんなの銀星でも食べた事がないはずだぞ。

その袋を開けて目の前に差し出す。

「まずは仲直りの印に食べて」

優しい声を演出している。この辺の声の使い方は秋留にそっくりだ。真似しているに違いない。

「幻想士としてもやっていけそうだね」

秋留が感心している。

「感心している場合か？」

「あはは……」

俺の突っ込みに秋留が笑って誤魔化す。いつもと逆だな。

ウマツクは相当腹が減っていたのだろうか。「フォーン」と喜びの鳴き声を上げながら目の前の高級御飯を無心で食べ続けている。

「ウマツクちゃん、貴方だけこんな美味しい思いをしてたらバチが当たっちゃうよ？ 仲間は近くにいないの？」

『……』

俺達是一同絶句した。まさかそんな酷い作戦を……。いやいや、俺たちが思っているような酷い事はしないに違いない。そう思いたい。

しかしそんな残酷なシナリオが頭に描かないウマツクは小さく鳴いた。同族の仲間を呼んだのだろうか。

暫くすると恐る恐る茂みからウマツク達が現れ始めた。警戒して俺達の方にはまだ近づいてきてはいない。

「まあ……一、二……四……か。ちっ」

悪魔の舌打ちがクリアから聞こえたようだが、最早止めさせる気になれない。とりあえず、ここに集まったウマツクは全部で五匹という事は、昨日のと合わせて七匹か。

「皆、集まって。怖くないよ。皆で仲良く御飯を食べよ？」

クリアは高級御飯を辺りに広げ始めた。

エサに連られてウマツク達が更に近づいて来る。まるで「大丈夫だぞ」という様に仲間達を呼んだウマツクが小さく鳴いた。

それで安心したのだろうか？ 空腹に負けたのだろうか？ ウマツク達は夢中で御飯を食べ始めた。

……そして待っていましたとばかりに、必死に食事をしているウマツク達の周りをカリューと紅蓮が取り囲んだ。

「美味しい？」

『フォオオオオン』

全ウマツクが嬉しそうに鳴いた。その鳴き声が悲痛な鳴き声に変わるのとは時間の問題だろう。

「……で、お腹も一杯になった事だし、ちょっとお願いがあるんだけど……聞いてくれるよね？」

聞いてくれるよね、は脅しだ。しかも般若のような顔をして言っている。何てコロコロと変わる表情だろうか。

一匹、逃げ出そうとしたウマツクの後方ではカリューが涎を垂らしながら凄みを利かせていた。ウマツク達は観念したようだ。

……これは詐欺だな。美味しい話には絶対毒があるものだ。

「角を……保護の一環として欲しいんだけど」

「フ、フォン！」

「嫌？ でもまた生えてくるでしょ？ 生きていればね……」

『……』

思わず俺達の肌に鳥肌が立つ。

こいつは霸王なんていう器じゃない。魔王、そう魔王だ。いや、魔王の方がまだ優しいかもしれない。

「……道を踏み外さなければ良いけど」

「危険ですな」

秋留とジェットが不安そうに話合っている。

「お嬢様、いっそう力強くなられて……」

シープットは嬉しそうだ。コイツがこれじゃあクリアも変わらんなわな。

「そう、うんうん。やっと理解してくれたのね」

俺達が咄然としている間にクリアはウマツク達を落とし終えたようだ。ウマツクの顔が蒼白に見えるのは決して気のせいではないだろう。

「ブレイブ！ 角だけ切り落とせる？」

「はいはい……」

俺は腰から短剣を引き抜くと生きる気力を失ったかのような顔をしているウマツク達に近づいていった。

「悪いな」

俺はモンスターに同情しながら角を切り落としていった。

ダークサーベルだっけかな、この短剣は……。固そうなウマツクの角も草を刈るように軽々と切り落とす事が出来た。

「じゃあ気をつけて帰ってね」

クリアが手を振りながら、大粒の涙を流しながら走り去っていくウマツク達を見送る。

「……これで七本だね。あと三本だよ!」

その笑顔には騙されないぞ、魔王クリアめ。気を許したら俺の負けだ。

俺は空を見上げた。……まだ昼前だ。短い時間でだいぶ集まったが、午後はこう上手くいくだろうか。簡単に終わってしまったら金の大事さを教えることも出来なくなってしまうが。何か魔王としての片鱗を見せ付けられただけの気がしてならない。

俺達は少し歩いて森の別の場所にやってきた。この辺りはまた別の花々が咲き乱れている。

「良い香り……」

秋留は地面に咲いている花の香りを嗅いでいる。絵になるなあ。

「この辺にはモンスターは居なさそうですね」

ジェットが辺りの雰囲気を観察しながら言った。

確かに少し神聖な感じがするが、この大陸に限ってはあまり常識を信じてない方が良くかもしれない。

「助けて」

「!」

近い場所からだが、やたらと小さな叫び声が聞こえてくる。妖精だろうか?

「ジェット付いてきてくれ!」

俺の反応を見た秋留はクリアを守るように防御体勢を取る。ジェットはマジックレイピアを構えて俺の後方に回った。

「木や枝が邪魔だな」

文句を言いながら茂みを二つ程駆け抜けると、目の前に小さな獣道が現れた。

「いてっ！」

俺の膝に何かがぶつかってきた。

地面を見るとほぼ裸に近い小さな女が目玉をクルクルと回して倒れている。見た目からすると妖精だろう。

その向こう側からは茶色の石を削って作られたようなモンスターがドスンドスンと飛び跳ねながら近づいてくる。足はない。顔が長く、あごは極端に突き出ている。

「モヤイ……ですな。任せて下され」

ジェットが石像モンスター、モヤイに突っ込んで行く。

迎撃するようにモヤイが少し高く舞い上がった。ジェットを押しつぶそうとしているようだが、チェンバー大陸の英雄とも言われているジェットを甘く見てはいけない。

難なくモヤイの攻撃を交わすと、後方に回ったジェットが両手で構えたマジックレイピアをモヤイに付き立てた。その直後にモンスターが小さな爆発と共に吹き飛ぶ。

「うむ」

ジェットは辺りに他のモンスターがいない事を確認するとレイピアを鞘に収めた。

ジェットの装備しているマジックレイピアは魔力をこめることにより威力が上がる珍しい武器だ。秋留のお下がりである。秋留がどのような経緯でマジックレイピアを手に入れたかは分からないが、それなりに使い込まれた武器のようだ。

「妖精だな」

「ですな」

俺の元に近づいて来たジェットと一緒に地面に倒れている妖精を眺めた。今まで散々痛い目を見てきた俺とジェットは妖精と関わるの避けたい所だったが……。

「う、うゝん……」

「ちっ、気付いたか」

「そうですな。秋留殿に見せて回復をお願いしますかな」

ジェットが小さな女の子、と言っても見た目が小さいだけで顔の作りや体の作りは子供のようにには見えない、を腕に抱きかかえ、俺たちは秋留の元へと一緒に戻って行った。

「！ その子は？」

「モンスターに追われていたので助けました」

心配そうに秋留が妖精の顔を覗き込んでいる。

「妖精さんだね、ナイスバディだわ」

クリアがほぼ全裸の妖精の体を眺めている。恥ずかしい奴だ。

「うーん、ちょっと頭を怪我してるみたいだね」

秋留が妖精の茶色の髪を掻き分けて怪我を調べている。頭の怪我はさっき俺の膝にぶつかったのが原因かもしれない。

「妖精の回復なんかした事ないしなあ。私の回復魔法は危険かも……。ジェット？」

秋留は回復魔法を主とした神聖魔法を唱える事が出来ない。ラーズ魔法やネクロマンシーにある回復魔法なら唱える事が出来るのだが、確かに神聖な感じのする妖精相手には少し危険そうだ。

「む、むう。そうですね。ではワシが……」

ジェットは生前聖騎士だったために回復魔法を唱える事も出来るのだが……。

「我が神……ガイアよ……」

草の上に横たえられた妖精に向かってジェットが神聖魔法を唱え始めた。その途端にジェットの体から白い湯気が立ち上り始める。

ジェットは死人である。神聖からは遠い存在であるジェットは神聖魔法を唱えると拒否反応からか、激痛と共に体から湯気が上がる。酷い時では体が灰と化してしまうのだ。

……ちなみに灰になる事があると知ったのはつい最近だ。

……死人に激痛とかあるのか、など考えないようにしたのはかなり前だ。

「この者に癒しの力を……癒合の雫！」

ジェットの魔法が妖精の体を淡い光で包んだ。

「ふ、ふうううう」

ジェットが大きく息を吐いた。

「お疲れ、ジェット」

ニッコリと秋留が微笑みかける。俺にも微笑みながら言ってくれ。
「少し休んでおるですじゃ」

ジェットは少し離れた木の根元に横になった。暫くすると静かな
寝息が聞こえ始めた。……昼寝したかっただけじゃないのか？ い
つもは神聖魔法を唱えたすぐ後に寝るなんて事は無かったからなあ。

「う、うゝん」

妖精が眼を覚ましたようだ。

「きゃ！」

全員に覗き込まれていたのは、さすがに驚いたようだ。

「大丈夫？」

秋留が優しく話しかけた。その声に逃げようとした腰を落ち着か
せて妖精が秋留の顔を見上げた。

「あなたが助けてくれたの？」

「私達、ね」

「……」

妖精が俺達の顔を見渡す。俺の耳元で「ピシピシッ」と聞こえる
という事はツートンとカーニャアも妖精を覗き込んでいるようだ。

「あ、ありがとう……」

素直に礼を言っているということは、少しはまともな妖精だとい
う事だろうか。

「どうしてモンスターに追われていたの？」

秋留が聞く。

「ちよつと楽しようと思ってモンスターの背中に乗ってたんだけど
……バレタみたい」

ま、これ位ならまだまともな妖精と置いていいだろう。妖精にと
って何かに便乗するのは常識のようだから……。

「気をつけてね」

秋留は妖精の肩に乗っかっていた草を払い落として言った。

「……貴方達、冒険者よね？」

妖精が再び俺達の顔を見渡す。

「そうだよ！ レッド・ツイスターっていう有名な冒険者なんだよ！」

クリアは自慢しているが、お前はレッド・ツイスターではないぞ。正式なパーティーとして登録もしていないしな。

「お願いがあるの！」

きた！

厄介な事になる前に断ってしまおう！

「おい……」

「何でも言って！ 困ったときはお互い様だよ！」

俺の台詞を遮ってクリアが元気に答える。

「諦めなよ、ブレイブ」

秋留に励まされてしまった。どうやら妖精のお願いを聞く事になりそうだ。

「冒険者を雇うお金を使ってしまって自力でミルクタウンまで行かなくちゃいけなくなってしまったの」

「何に使ったんだ？」

俺はすかさず突っ込む。

「う……ぼ、募金よ！」

「ほう……あんたが纏っている羽衣の、裾についている真新しい値札タグは何だ？」

「え？ あ！」

目の前の妖精がオロオロし始めた。妖精用の服屋でもあるのだろ
うか。羽衣に三十万カリムと書かれたタグがぶら下がっている。高
い買い物しやがったな。

「ブレイブってやりたくない事とかお金の事になると不思議と頭の
回転が速くなるよね」

「え？　そうか？」

「……褒めてないよ」

秋留に褒められた気がしたのだが、褒められた訳では無かったよ
うだ。

俺は目の前の怪しそうな妖精に視線を戻した。

若干、涙目になってきたように見える。泣き落とし作戦か？

「そうよ！　悪い？　可愛かったんだもん！」

開き直りやがった。俺が白い眼で見ていると目の前の妖精が大声
で泣き出した。

「ふええええん……ふええええん」

見た目は小さいが作りは大人、しかし中身はクリアと同じ扱い難
い子供のようだ。

「あゝ、ブレイブが女の子泣かしたゝ」

うう……。泣くとは卑怯だぞ。まるで俺が悪者みたいじゃないか。
「ミルクタウンと言ってましたな……」

いつのまにか起きてきたジェットがアステカ大陸の地図を広げた。
「ふうゝむ。少し遠回りですが、サン・プレイヤ教会のあるアーム
ステルへの街道の途中にありそうですぞ」

「……御礼とかあるのか？」

妖精の願いを聞く事は許すとしても、こればかりは譲れない。
返答次第によっては頑張りっぷりも大分変わってくるのだが……。

「ブレイブゝ」

秋留も呆れているようだ。

「……御礼ならミルクタウンの長老にお願いすれば貰えるかも」

そう言って、腰の小さな袋を差し出した。中には虹色に光る粉が
入っている。

「綺麗な粉だね」

「うん、虹色蜥蜴の粉だよ。この大陸でしか取れないの。これをミ
ルクタウンの長老に持っていかないといけないの」

ほう、長老か。それはなかなか良い響きだ。金は持っていないが、

珍しいアイテムを持っているような気がする。

「ブレイブも納得した事だし、妖精さんのお願いを聞いてあげる事にするわ」

ニッコリと秋留が微笑む。その隣でクリアも同じように微笑んでいる。クリアの場合は途中でまた別の街にいけることが嬉しくてしようがないのだろうか。

「じゃあ、さっそくミルクタウンに出発だ〜！」

「待て！」

静止した俺を恨めしそうにクリアが睨みつけてくる。

「その怖い眼で睨むなよ……依頼はどうした？ 忘れたのか？」

「そんなの放っておいて行こうよ！」

俺とクリアのやり取りを黙って聞いていたジェットが口を開く。

「クリア殿……物事を途中で投げ出してはいけません。困ったときは逃げるという悪い癖が付いてしまってますじゃ」

「う……」

俺以外の言う事はクリアも素直に聞くんだよね。

「それに」

ジェットが続ける。

「冒険者は一度請け負った依頼を投げ出す事は、基本的に許されてはいないので。困っている人を放っておく事になりますからな」

「は、はぁ〜い。ごめんなさい」

どれだけ今まで甘やかせて育てられたのか分からないが、コイツを再教育するのは大変そうだ。

「じゃあ、早くウマツクの角を後三本見つけないとね」

クリアが元気を取り戻したようだ。上がり下がりの激しい奴め。

「ウマツクの角を探しているの？」

先程助けた妖精が俺たちの間に割って入ってきた。

「そう。妖精さん、何か知っているの？」

秋留が聞く。

「ルン……って呼び捨てで良いよ。私はカハクのルン」

カハクのルン？ カハクとは妖精の種類だろうか。話の骨を折るのも気が引けるので後で聞く事にしよう。

「ルン、それでウマツクの角について何か知っているの？」

「ふふ、こっち来て」

そう言ってルンが歩き始めた。俺の膝位までの身長しかないルンだが、意外と歩くのは早い。

ルンが進む速さに合わせて俺たちも森の奥へと入っていった。

その途中で、これからしばらく一緒に行動することになったルンの自己紹介が行われた。

「ブレイブは盗賊なの？ ……お金にガメツそうだもんね。ぴった
り」

「そうなの〜！ ルン、よく分かってる〜」

ルンとクリアが仲良く喋っている。

何てこった、まるでクリアがもう一人増えてしまったかのように見える。悪夢だ。

「あ、ここだよ」

そう言ってルンが一本の太い木の前で止まった。目の前の大木に何かが突き刺さっている。

「この種類の木、サグスの木っていうんだけど、ウマツクは角が生え変わる時期にこの木に古い角を突き刺して抜いてしまうの」

俺は近づいて行ってサグスの木に刺さっている角を引き抜いた。

「少し古いみたいだな、これじゃあ依頼品にそぐわない」

「他にもあるはずだよ、皆で探してみよ」

秋留が言った。

俺たちは手分けをして木の周りを回り始めた。このサグスの木は十人程の人間が手をつないでやっと囲める位の太さだ。

「これなら大丈夫そうだ」

「これも良さそうですぞ」

「これも真新しくて良いみたい」

こうして依頼を受けて二日目にして、見事ウマツクの角が十本集

まった。

……結果から言って、クリアは二日で十万カリム稼げた事をどう思うのだろうか。「楽勝」などと思われてしまったら元も子もない。「ルン、ありがとう」。ルンのお願いを聞いて正解だったみたい」
「ううん、こっちこそ、ミルクタウンまでの護衛を引き受けて貰えて凄く嬉しい！」

俺たちは新たなメンバー、ルンを加えて依頼品を渡す為に花の都まで戻ってきた。

「ウマツクの角、十本で十万カリムになったぞ」

ここは宿屋のロビー。俺たちはロビーのソファ等に座ってくつろいでいる。俺は依頼人から手渡された十万カリムの入った錢袋をテーブルに置いた。

「あれだけ苦労して十万カリムかぁ。お金を稼ぐのって大変なんだね」

やっとクリアにも金の大事さが分かったようだ。ジェットをはじめ、クリア以外の全員もほっと胸をなでおろす。

「これで心置きなく次の街に進めるね」

「秋留お姉ちゃん、次の街は何の街？」

ジェットがテーブルに地図を広げた。

「……ヴィーンと書いてありますな」

「別名、音楽の街って言うんだよ！」

背伸びをしてテーブルの上を必死に覗いていたルンが言った。

そうか。ルンは妖精だからこの大陸の事は色々知っていそうだ。

これはこれからの冒険が楽になりそうだわい。ひっひっひ。

……と嬉しさに思わずキャラが変わってしまった。本当に変な妖精と関わるのは勘弁したいからなあ。

「ルンは行った事があるの？」

「ううん、噂に聞いた事があるだけ。アタシはミルクタウンにも行った事がないの」

ガクッ。

あんまり役に立たないかもしれないな。いや、いないより何倍もマシなんだろうな。

「じゃあ、楽しみだね」

「うん！」

クリアとルンが仲良く話している。それを傍で優しい顔をして見守る秋留。何かを思い出しているのだろうか。

俺たちは明日の出発のために早めにそれぞれの部屋へと戻っていた。ちなみにルンはクリアと同じ部屋だ。まあ、仲が良さそうだったから当たり前だな。

第二章 不吉な予感

俺たちパーティーが護衛する事になったカハクのルン。

カハクとは妖精の種族の一つで、木の妖精らしい。自殺した者達の魂が木に集まってカハクになるという、悲しい生まれをもっているらしいのだが……目の前のカハクのルンにそういう暗い面は見えない。

「私は妖精として生まれ変わったの。生前の事なんて忘れて楽しく生きていこうと思って！」

楽しそうに話しているが、どこか寂しげな感じがするのは気のせいだろうか。

馬車は次の街、ヴィーンへの街道を順調に進んでいる所だ。しかし季節の移り変わりは早いらしく、日増しに寒くなっているように思える。ちなみに今日で花の都フアリを出発してから五日目になる。

「ルンはそんな格好で寒くないの？」

毛布にくるまりながらクリアが聞いた。

「うーん、私は寒くないんだけど、妖精族にも寒がりとかいるから……個人差とかあるんじゃないかなあ？」

ルンは生まれてからまだ三ヶ月らしい。勿論、妖精として生まれ変わってからだが。生前は一体何歳だったのだろうか。

「信じられませんなあ。見ているだけで寒くなりますぞ」

御者席から孫達の会話に聞き耳を立てていたジェットが言った。

俺は寒さに震える死人の存在の方が何倍も信じられない。

「それにしても、次の街まで八日かあ」

俺は一人呟いた。八日間も馬車移動が続くと思うと気が遠くなりそうだ。途中に小さな村などはあるのだが、この大人数が泊まれるような場所は無いだろう。という訳でこんな長旅をする事になってしまった。

「長いけど頑張ろうね」

「おう！」

俺の独り言が秋留にも聞こえたようだ。思わぬ励ましに自然と体中にエネルギーがみなぎる。

ルンが一時的にパーティーに加わった事で、秋留がクリアの独占から若干解放されたようだ。こうして俺の隣で仲良く会話をするのも久しぶりな気がする。

「何泣いてるの？」

「え？ いや、目にゴミが入ったみたいだな……」

「ふうん」

感動し過ぎて少しウルウルとしてしまったようだ。久しぶりに落ち着いているからなあ……。

「そろそろ休憩しますかな？」

太陽の位置は真上に到達しようとしていた。昼前位だろうか。休憩には丁度良さそうだ。

ジェットは少し開けた広場に馬車を止めた。

早速クリアとルンが仲良く馬車から飛び出し、その後を追うようにカリューと紅蓮が続く。重い荷物を背負ったシープットも馬車を降りる。……すぐ近くで休憩するだけなんだから、荷物は馬車に置いておけば良いのに……これが執事根性というものだろうか。

「また果物が食べたいな」

クリアがボソリと言った一言が聞こえたのだろうか。執事のシープットの眼が「カツ」と開かれたと思うと森の方へと走っていった。……キョロキョロと俺に目配せをしながら。

そうだな、あいつ一人じゃ危険だな。

俺は装備を確認するとシープットの消えていった方に合わせて走り始めた。

「何だか体が重いなあ」

「そりゃ、私が背中につかまっているからじゃないかな？」

独り言のつもりが後方から返事が返ってきた。

振り返るとルンが俺の背中にしがみ付いているのが見えた。……

妖精という種族が特別なのだろうか。妖精は俺の五感に引っかかる場合が多い。やたらと神出鬼没過ぎる気もする。

「俺の背中で何をやっているんだ？」

シープットの背中が見えた。俺の姿を確認して少し安心したようだが、俺の背中の中のルンに気付いて少し啞然とした顔をしている。

「美味しい果物でしょ？ この妖精ルン様に任せてよ」

「！ それは、それは、ありがとうございます、ルン様」

シープットが礼を言っている。誰に対しても礼儀正しい奴だ。そんなに疲れないのかな？

素直に御礼を言われたルンは、機嫌を良くしたらしくスキップしながら辺りの茂みなどを漁り始めた。

「この木の果物は美味しかったはず……」
はず？

少し不安な台詞を発したルンだったが、目の前の木に手をかざし始めた。何をする気だ？

「果物を少し分けて？」

ルンがそう言うと、木の葉がザワザワと揺れだして、俺たちの目の前に大きく実った果物が三つ落ちてきた。

「な、何をしたんだ？」

俺とシープットが驚いていると、ルンが得意げに胸を反らして説明し始めた。……お、おい、あまり胸を強調するな。

「知らないの？ 妖精族の中にも色々な種族がいて、私は木の妖精なの。だから木々とはお話出来るし、こうやって果物を分け合おう事も出来るの」

『へへ』

思わずシープットと声がかぶる。妖精族にはそんな能力もあるのか。

それからルンが十個程果物を選んで俺たちは馬車のある広場へと戻っていった。

「お！ 早かったですな」

戻ると丁度ジェットがミニテーブルに人数分の紅茶セットを用意している所だった。クリアの影響か、最近ジェットのお茶セットに紅茶が含まれる事が多くなった。

……カップが二つ程多いが、奴らの分はいらないだろうか？ お供え物か？ そういう意味だとジェットが紅茶を飲むのも同じ考え方かもしれない。混乱する。

「ルン様の手伝って下さいましたから」

あくまで腰の低いシープットが言った。

俺たちは簡単にスープで昼食を取ると、先程採ってきた果物を食べ始めた。

「……この果物は以前食べた爆発するものに似てますな……」

そう。

ルンが木に語りかけて採った果物は、以前食べたバンバーンに見た目がそっくりなのだ。だから誰も食べようとしなかったのだが……。

どうやら不死身のジェットが先陣を切るようだ。

「……どれ、ワシが一口……」

思わず全員遠ざかった。果物を採った本人も嫌な予感がして思わず逃げる。

そして、辺りの大気が震えた。

「……ごめんなさい」

食事を終えた俺たちはボロボロになったミニテーブルやら粉々になった食事セットを片付けて馬車へと乗り込んだ。今は次の町へ向かう馬車の中。目の前ではバンバーンをジェットに食べさせたルンが平謝りしている。

「しょうがないですな、ルン殿は妖精になってまだ短いですし……」
まあ、ジェットに毒味をさせた俺たちも同類かもしれないが、さすがに死にたくないしな。

それからの旅は、小さな戦闘などはあったものの何事もなく進ん

だ。

そして七日目の朝を迎えた。

「おはよう、ジェット……」

俺は近くの川で顔を洗ってきて、最後の見張り当番で早朝から起き続けているジェットに挨拶をした。森が多いせいか、川の水は綺麗で冷たくて美味い。

「おはようございます、ブレイブ殿。よく眠れましたかな？」

「いや……どうにも寒くて何回も目が覚めたよ」

体温調整が苦手な俺は、寒がりで暑がりだ。他のメンバーもぞくぞくと起きてきたようだ。

『もう馬車疲れた』

クリアとルンが声を合わせて不満を口に出している。

「早ければ明日には到着するから。頑張ろうね、クリア、ルン」

まるで妹が増えてしまったかのように秋留が二人の相手をしている。

今日の朝食はジェット特製のおかゆだ。

見張り最後のジェットは時間がある時は朝食を作って待っていてくれる事が多いのだ。……お年寄りが好む料理が多いのが玉にキズだが。

クリアやルンも毎朝の健康食事には若干、飽きつつあるようだ。

朝食を終えた俺たちは再び馬車での移動を開始した。最初の頃は元気に無駄話をしていたクリアとルンもさすがに疲れたらしく、大した会話も無く、ただ外を眺めているだけだ。

果報は寝て待て。

俺は暫く休む事にした。冒険者の基本、休めるときには休む。いくら熟睡していたとしても俺はモンスターや魔族の気配は察知出来るため問題も少ない。

「！」

俺は魔物の気配を察知して飛び起きた。太陽の位置からすると時間はそれ程経っていないようだ。

「ジェット、ストップだ！ 前方からモンスター数匹が接近中！」俺の叫び声でうたた寝していた他のメンバーも目を覚ましたようだ。

俺は馬車を守るように御者席から前方へと飛び出した。ジェットは既に武器を構えて前方を睨みつけている。

「……三匹だな。スピードがありそうだ、油断するなよ」

どうやら相手も馬鹿ではないようだ。こちらが警戒した途端に向こうもあまり行動しなくなった。

「！」

俺は咄嗟にクリアを突き飛ばした。クリアの立っていた場所に矢が突き刺さる。

「あ、ありがとう、ブレイブ！」

押し倒し方が少し乱暴だったかもしれないが、気にしない。

俺はネカーとネマーを構えて、矢が飛んできた方向を観察した。

木の陰に隠れているようだが……。

「そこっ！」

俺は葉の擦れる音を察知して、後方の茂みに硬貨を発射した。断末魔の叫び声を挙げて、緑色の体をしたモンスターが倒れてきた。手には弓を握っている所を見ると、知能の高い種類のモンスターのようだ。

「大地を走るノームよ、我に仇名す者を闇へと引きずり落とす軌跡を描け……」

秋留が魔法の詠唱を始める。

「アースクラック！」

呪文と共に地面に亀裂が走り、その亀裂がそのまま茂みの向こうへと走っていった。と思ったのも束の間、亀裂が勢い良く破裂し、茂みから別の緑色の体をしたモンスターがボロボロになって倒れてきた。

「ブレイブにばかり良い格好させないよ？」

そう言って、杖を格好良く構えなおした。……可愛い！
残りは一匹か。どこにいやがる。

「きゃっ」

叫び声で俺は後ろを振り返った。あの馬鹿妖精！ よりによって
戦闘から逃れるために茂みに隠れていたのか！ 後方からモンスター
に襲われたらしく、茂みから慌てて飛び出してきた。

「何やってんだ！」

「うわーん、虹色蜥蜴の粉、盗られたー！」

ちっ！ よりによって重要アイテム盗られやがって！ 俺は他の
メンバーに待機の合図を送るとルンが出てきた茂みに突っ込んだ。

「……あっちか？」

武器を構えながら茂みを駆け抜ける。細かい枝や草が体を細かく
打ち付けてきた。

「！」

咄嗟に飛んできた矢を片手で受け止める。相手モンスターが啞然
としている一瞬の隙について眉間に硬貨を打ち込んだ。

……ちなみに飛んできた矢を受け止めるなんていう芸当は、そう
そう出来るものではない。いや、正直マダレ？ 運が良かった？
としか言えない。

俺はモンスターの死体の脇に転がっている小さな袋を覗き込んだ。
虹色に輝く粉、ルンのものだろう。

……これは高価なものだろうか？ モンスターが襲う位だしな。
取り返す事が出来なかった、という事にしてしまおうか。誰も見て
ないしな、へっへっへ……。

い、いや、さすがにそれは不味いだろうな。秋留にバレたら相当
嫌われそうだし。秋留の事だから俺の嘘などすぐに暴いてしまいで
うだし。

……？ モンスターがこんな粉をなぜ狙った？

俺は疑問に思いつつ馬車のあった場所へと戻ろうとした。

「？」

辺りがやたらと濃い霧に包まれている。身動きも出来そうにないくらいに。

「参ったなー」

怖さを紛らわすために少し大きめに独り言を呟いた。いや、叫んだ。あわよくば、仲間が見つけてくれるのを期待しながら。

しかし、誰かが近寄ってくるような気配は全く無い。

「ヒッヒッヒ……」

俺がおかしくなったのではない。俺以外の誰かが笑っているのだ。俺は両銃を構えて辺りを見渡した。

「あんた、誰かが助けに来てくれるのを期待しているのかい？」

ジジイのような声。喋っているという事はモンスターではないようだ、知能の高いモンスターは喋ったりする事もあるようだし、このアステカ大陸には普通にいるかもしれない。

「ちっ」

声はするのだが、気配を察知する事が出来ない。攻撃されても避けられないかもしれないが……。喋りかけてきているという事は、何か目的があるのだろうか。

「この粉が欲しいのか？」

ルンの持っていた粉を掲げた。誰だか知らないがヤバそうなら、こんな粉はとっとと手放してしまおう。ルンには悪いが。

「そりゃ、何だ？ そんなものはいらん」

「じゃあ、何が目的だ？」

引き続き辺りを窺っているが、相手の気配を捉える事は出来ない。

「……目的など無いよ、ただの暇つぶしだ」

思わずズッコケそうになった。こりゃ、相手は妖精だな。このマイペースっぷりにはだいたい慣れて来たぞ。

「この霧はあんたが発生させているのか？」

辺りを示して言う。

「……かもな」

……怒りに負けそうになるのを抑えながら、何とか解放してくれるように祈りながら話を進めた。

「俺は暇じゃないんだ。とっとと解放してくれないか？」

「正直だな……勝手に帰ると良い」

俺は霧の中をズカズカと歩き始めた。しかしいくら歩いても霧は晴れないし、勿論、運よく馬車の場所に到着したりもしない。

「どうした？」

先程のジジイ妖精の声だ。イラつくジジイだ。俺は無視してそのまま歩き続けた。

「迷ったのか？」

「うるせえ！」

俺は道なんて分かってるかの如くズンズン進んでいるが、勿論、迷っている。

「仲間はいないのかい？」

「いるさ！……ピンからキリまでだけどな」

秋留……。

勘が鋭く盗賊だった事もある秋留だったら、俺の事を見つけてくれるに違いない。

「お前の仲間に女がいるだろう？」

思わずドキツとする。

丁度、秋留の事を考えている時にそんな事を言われるとは……。

「……」

俺は尚もシカトして歩き続けた。

「可愛い女だったな」

「見たのか！」

「へっへっへ……随分食いつくじゃないか」

思わずジジイの口車に乗ってしまった。俺は口にチャックする仕事をして再び茂みをかき分けながら歩き始めた。

秋留、早く助けに来てくれ。あ、野生の勘でカリューでも良いや。この際、ツートンとカーニャアでも構わない。……でもやっぱり秋

留に助けに来て欲しい。

「お前は随分とあの女に執着しているようだが……」

秋留の事を考えている時に再びジジイに指摘されてドキッとしてしまった。また顔に出ていたのだろうか。

「あの女は助けには来ない」

「な、何でだ？」

思わず不安そうな声を出してしまったが、秋留は助けに来てくれるに違いない。

「お前の事なんてどうでも良いと思っているからな」

……。

……………。

！ 思わず意識が飛んでしまっていたようだ。このジジイ、今、何て言った？

「何か言ったか？」

「放心し過ぎだ。三分は待ったぞ……。その女はお前の事なんてどうでも良いと思っている、と言ったんだ」

……聞き間違いでは無かったようだ。俺は近くの木にネカーとネマーを発射した。

「うるさいぞ、黙れ、クソジジイ！」

「へっへっへ、激しいねえ。その激しさからすると、自分でも思っていたんじゃないのか？ その女に俺は好かれていないんじゃないだろうか、ってね」

所構わずネカーとネマーを乱射する。「カチリ」という硬貨切れの音が空しく辺りに響いた。

俺はヨロヨロとした足を止める事なく歩き続けた。

ジジイの戯言は放っておこう。

それからまた暫く歩いたが、一向に仲間と合わないし、馬車にも辿りつけない。多分方向は合っているとは思うのだが……。

「まだ迷っているのかい」

久しぶりのジジイ登場だが、もう気力が持たない。俺はその場に

座り込んでしまった。誰も助けに来てくれない。俺はやっぱり一人なのか……。

「やっぱり誰も助けに来てくれないな……お前の気になっている女も含めてな、へっへっへ……」

「うるせえ」

ボソリと口から出る。このジジイ、うざい……消えろ……消えろ……。

「何だって？」

「うるせえって言ってるんだ！」

もたれかかっていた太い木を殴りつける。木の葉がパラパラと頭上が降って来た。

「怖い、怖い……まあ、これで分かっただろう、お前の事なんて仲間の誰一人、気にかけてなんかいないんだよ……」

「……そんなの関係ない……俺だって何とも思っていない……」

「何だって？ 聞こえないよ」

「俺だって、秋留の事なんて何とも思っていない！」

俺は力の限り叫んだ。

そして意識を失った。

「……ッ」

誰かが俺の事を呼んでいる？

「……イブッ」

耳に響く嫌な声だ。もっと優しく起こしてくれよ……。

「ブレイブ！」

右頬に強い衝撃が走る。誰かに叩かれたようだ。

目を開けると、俺を覗き込む吊り上がった眼が目の前にあった。

「お、鬼か……」

「誰が鬼かー！」

額に拳が飛んできた。目の前がキラキラと輝く。

「……クリアか。優しく起こしてくれてありがとう」

「……どういたしまして」

どうやら仲間に救出されたようだ。誰が助けてくれたのだろうか？俺は辺りをキョロキョロと見渡した。ここは馬車の中だ。次の街へと進んでいる最中だろうか。

「大丈夫ですか？」

ジェットが御者席から声をかけてくる。

「大丈夫？ 大分うなされてたみたいけど」

この声は……秋留だ。

だいぶ心配されていたようだが……そうか、助けられたか。仕方無く？ たまたま見つかった？ 虹色蜥蜴の粉を探すついで？

「取り返してくれてありがとう……ごめんなさい」

小さな妖精……ルンだ。ルンが小さい身体を更に小さくして謝っている。

「まだ意識がはっきりとしないみたいだ……暫く放っておいてくれ……」

俺はそう言うと、再び眠りへと落ちていった。

その日の夕食。俺はボくっとしながらも食事を済ませた。

「ブレイブ殿、今夜は見張りは秋留殿とワシとで分担します。ブレイブ殿はゆっくりと休養して下さい」

「ん？ ああ、悪いなジェット……秋留……」

なぜだが秋留の方を向き辛い。

俺は俯いたままテントへ入り、そのまますぐに深い眠りへと入っていた。

「今日中には音楽の街、ヴィーンに到着しそうですね」
翌日。

俺たちの野宿した場所にあった案内図を見てジェットが言った。

昨日は頭が朦朧としていて辺りをあまり観察しなかったが、そんな案内図があったのか。

『しゅっぱっ！』

クリアとルンが仲良く声を合わせて叫んだ。今日中に街に着くという事は、長かった馬車の旅も一旦の終了を迎える。それが嬉しくてたまらないのだろう。

今日は少し暖かいようだ。元気の良かったクリアやルンもあったという間にうたた寝し始めた。その姿を幸せそうに眺めるシープットは相変わらずだ。

そしてクリア達を守るようにカリューと紅蓮が床に転がって眠っている。

チラリと秋留の方を見ると、目があってしまった。

「今日は暖かいな」

「そうだね」

何か気まずい。昨日のクソジジイ妖精のせいだろう。変に秋留の事を意識してしまう。

いや、意識する必要は無い。

秋留はただの仲間だ。それ以上でもそれ以下でも無い。他の奴も一緒だ。ただの仲間……カリューを人間に戻したいという気持ちも仲間だからだ。

カリュー、人間に戻るのかなあ……。あのままだったらどうしよう……。

それからの旅はモンスターも出現せずに無事に進んだ。

「遠くから笛の音が聞こえる……」

ヴィーンが近づいて来たせいだろうか。パーティーのメンバー全員が俺の呟きに顔をパッと明るくした。時間は夕方前位だろう。今夜は久しぶりの宿屋で熱い風呂に入ってベッドで眠る事が出来そうだ。

「長かった」

クリアとルンが一緒に伸びをする。姉妹というよりは双子のように動作が同じになってきている。

そしてようやく、肉眼でも街の明かりが見える場所まで近づいて来た。

ファリの街と同じようにギジンが辺りを歩き周り、豎琴を奏でるエルフの幻想的な姿も見える。

「すっごくいい」

あまり感情を表に出さない秋留も感動しているようだ。

俺たちはメインストリート……オーケストラストリート？ を歩いて一軒の宿屋を見つけた。屋根の上に巨大なラッパを掲げた趣味の良い宿だ。……他の宿はもっとゴテゴテと音符やら楽器が付いている宿が多かったから、この宿はまともな方だろう。

「パッパラ、パラパラパッパパー」

玄関を入ると派手な音楽で歓迎された。女将がラッパ片手に接客をしているようだ。人間種族のくせに変人だ。

「いらっしゃい、また随分と変わったパーティーなこと……」

ラッパ片手に近づいてくる女将もまた変わっていると思うが。玄関から銀星達馬三頭も入ろうとしているから、こちらも変わっていると言われたようだ。

さすがにそれは不味かったらしく、宿屋の傍の馬屋で銀星達は休む事になった。恨めしそうに俺たちの姿を見つめていたのが印象的だ。

「スウィートルームありますう？」

またいつものクリアの悪い癖だ。しかし最近、他の浪費癖が少なくなってきたので注意するのは止めておこう。激しく文句を言われそうだしな。

「また二人になりましたな」

クリアに誘われない俺とジェットは、またしても仲良くスウィートルームの近くの安い部屋に泊まる事になった。……うん、音楽では死臭は隠せない。花の都の方が良かったなあ。趣味はこの部屋の

が断然良いが。邪魔なピアノが置いてあるが、それ以外はシックな作りとなっていて落ち着く。

「風呂に入ってくるわ」

「ではワシも……」

久しぶりの風呂に入れるのは嬉しいのだが、死臭漂うジェットと一緒に。露骨に嫌がるのも悪いし我慢して一緒に入るとするか。

俺とジェットは宿の階段を下りて地下へと歩いていった。この風呂は地下にあるらしい。

「おお！」

ジェットが思わず喜んだ。地下から地上に向かって大きな穴が開いている。これは変わった露天風呂だな。

「うわー！ 良い景色だねー！」

「！」

俺は思わず辺りを確認した。ルンの声だ。まさか……混浴だったか！

「うん、変わったお風呂だね」

こ、これは秋留の声だ。風呂の薄い仕切りの向こう側から聞こえてくる。どうやら混浴では無かったようだ。嬉しいような、悲しいような、でも少し安心した。秋留と一緒に風呂に入る心の準備なんか、まだ出来ていないからな。

「おや？ そちらも風呂タイムでしたかな？」

恥ずかしさも見せずにジェットが言った。

「あれ？ ジェット？ じゃあ変態ブレイブも一緒？」

この失礼な声は勿論クリアだ。

「悪かったな。いつ風呂を入ろうとも俺の勝手だ」
クリアの非難の声が聞こえてきたが無視する。

それから女湯からはワイワイと騒ぎ声が聞こえてきた。体の洗い合いなどをしているようだ。……お、俺も混ざりたい。

俺は雑念を払うように頭をブンブンと左右に振った。

「どうしましたかな？ のぼせましたかな？」

「い、いや、大丈夫だ」

「どうせ、ブレイブは変な事考えすぎてのぼせたんでしょ？」

俺とジェットの話にすかさずクリアが割り込んでくる。顔も見られていないのに俺が考えている事がバレてしまうとは……。

それから時々ジェットや女湯のメンバーと会話を交わしてから俺は風呂場を後にした。

俺はその場でも秋留の事を変に意識してしまいあまり会話が出来なかった……。あのクソジジイめ……。次に会ったらネカーとネマーで蜂の巣にしてやる。

翌日。街の中は吹雪に包まれていた。今日で十二月に入ったようだしな、いよいよ本格的な冬の季節の到来だろう。

「今日は身動き出来そうにありませんなあ」

クリアやルン、秋留もどこか寂しそうだ。俺たちはその日一日、宿の部屋で過ごす事になった。たまにはノンビリするのも良い。

翌日、吹雪。

その翌日も吹雪……。そしてその翌日も……。

「あゝ！ 寒かったあ」

体中を雪まみれにして秋留達が帰ってきた。吹雪の中を強行突入して街の中を巡って来たのだ。

「結構、出歩いている人いたよ」

秋留の報告だ。この冬の大陸に慣れている住人であれば、これ位の吹雪で身動きが出来なくなるようでは、生きていけないのかもしれない。

「少しでも吹雪が弱まったら出発する事にしましょう」

ジェットが熱いお茶をすすりながら言った。

少しノンビリしたお陰で体力も全快だ。俺たちは次の日に向けて早めに就寝した。

そして翌日。相変わらずの吹雪だが昨日までよりは弱まっただろ

うか。

「あんまり楽しめなかったなあ」

「またそのうち来れば良いよ」

残念そうなクリアの呟きに秋留が励ましている……が、クリアは俺たちの正式なパーティーでもないし、冒険者ですらない。獣使いの素質で暴走しているカリューを操ってもらっているのだ。これもカリューが人間に戻ってしまえば必要無くなる。次にクリアがこの街を訪れるのはいつなのか、誰となのか……。

「出発しますぞ」

視界の悪い吹雪の中、俺たちの乗る馬車は進み始めた。銀星達も一応防寒具らしきものは付けているのだが、さすがに体力の消耗は激しいようだ。

「な、何か魔法で暖かく出来ないのか？」

「うーん……その場に魔法を留めて置くのが無理かなあ」

よし、秋留とさりげなく会話出来たぞ。

「ブレイブさん、何かギクシャクしてませんか？」

俺の事をあまり知っていないはずのルンにまで突っ込まれてしまった。さりげなく会話したつもりだったのだが……。

「また変な事考えてるんでしょ」

クリアの予感の外れている。別に俺はやましい事など考えてはいない。今はな……。

吹雪の中、ゆっくりと馬車は進んでいる。出発した時よりまた少し吹雪が強まったようだ。視界が悪すぎるし、風の音のせいでモンスターとの接近に気付くのも遅くなってしまいそうだ。

俺は仕方なく聴力は捨てて視力に集中した。まずは馬車の前方に障害物などがないか確認した方が良いだろう。盗賊というのは五感のどれかに意識を集中させる術も得意でなければいけない。

「大丈夫そうですね？」

ジェットの横から前方を窺った。どうやら問題は無さそうだ。

「それにしても……小さな小屋でもあれば良いのだが……」

俺は吹雪の凄まじさを嘆いた。これでは体力が削られていく一方な気がする。

ちなみに長距離な移動が多い冒険者などのために、こういう長い街道の所々に広場や小屋が設置されている場合がある。

「！　ちよつと距離が遠いかな……」

俺は左前方に眼を凝らした。モンスターがこちらの様子を窺っているようだ。俺の警戒に他のメンバーも馬車の中で武器を構える。

「いや、大丈夫そうだ。襲って来る気配は無い」

この吹雪ではモンスターもあまり行動しないのかもしれない。

しかし、このままでは自然の驚異の前に挫折してしまいそうだ。

そう、凄く寒い。

それは他のメンバーも同じらしく防寒具を着込み、更に毛布にくるまっている。俺もマフラーを口元まで引き上げて寒さをこらえていた。

「ピシッ」

「パシッ」

寒いね、などと会話でもしているのだろうか。幽霊のツートンとカーニヤア……お前らはジェット以上に寒さとかは関係無さそうに思えるんだけどな。

馬車を引っ張る馬達も白い息を吐き出しながら頑張ってくれている。勿論、死馬である銀星の口から暖かい息が出るはずはないので、他の二匹の口からだけだが。

そういえば……。

今日は出発前に馬車の上を確認しなかったなあ。

まさかなあ……。

俺は急に不安に駆られて何気なく馬車の天井を確認した。布が若干垂れ下がっている気がする。雪の重さからなのか、それ以外の何かの重さなのか……。

さり気なく馬車の中から天井をパンチした。雪を振り落とすかのように。

「ぎゃっ！ 落ちるゝ」

何者かの声。

後方を確認すると、真っ白い服を着た、まるで雪の白さを象徴するような何者かが街道に落ちたのが見えた。まあ、怪我はないだろう。

「？ 何か声が聞こえなかった？」

毛布にくるまっていた秋留が辺りをキョロキョロと見渡した。

「いや、気のせいだろう？ 俺には聞こえなかったぞ」

「じゃあ、大丈夫だね……」

安心した秋留はそのまま毛布にくるまって再び浅い眠りへと落ちていった。

そして暫くすると、吹雪も止み、久しぶりの晴天が広がった。やはり馬車の天井に相乗りしていたのは妖精だったのだろうか……。あまり深く考えないようにしよう。

「小屋がありましたぞ」

いつの間にか俺も寝ていたようだ。御者席からジェットが声をかけてきた。太陽の位置から判断すると午後のおやつタイムと言ったところだろうか。

「今日はここで泊まった方が良さそうだね」

「ああ、でも先客がいそうだぞ……しかも厄介なのが」

俺は小屋の前に止められている人間用とは思えないサイズの馬車を指差して言った。木の陰に隠されていたためにすぐには気付かないかもしれないが、小さな馬のような生き物も見える。

「よ、妖精かな？」

秋留も少し怖気づいたようだ。

「とりあえず荷物を降ろす前に一緒にできるか聞いてみましょう」

ジェットが御者席を降りていった。また近づくな、とか言われなきゃ良いけどなあ。

「来ないで！」

小さな声で叫んでいるのは、小屋の中にいた妖精達だ。そう、妖精の四人組のパーティーだ。今度は以前のように秋留は大丈夫という訳ではない。俺達全員を凄い形相で睨んでいるのだ。

「この人達は大丈夫だよ？」

俺達の様子を見ていたルンが後ろから仲介役を買って出てくれた。

「！ 貴方、そんな危険そうな人間達と一緒にいるの？」

まるで球のようにコロコロとした体格の妖精が言った。危険そう、とは主にジェットやクリアの事に違いないが……。

「全然、危険じゃないわよ、特にこの間抜けな顔した黒い人、危険そうに見える？」

おい、ルン。

俺を指差しながら何を言ってやがる。俺も思わずへらへらと愛想笑いなどしてみたりしているが……。

『確かに』

妖精四人組が仲良く声を合わせて納得した。

「おい！」

俺は思わず突っ込んだ。最近、そんないじられ方ばかりだ。全て貧乏くじ係りのカリキュが獣なんかになっているせいに違いない。

「妖精狩り？」

そう、俺達の目的地であるミルクタウンでは、最近妖精狩りが横行しているようなのである。

今は小屋の中にあつた囲炉裏で食事を準備している最中だ。着の身着のまま飛び出してきたらしい妖精達は俺達の食料を見るなり、機嫌を取ろうと色々と情報を教えてくれている。

「冒険者も何人が雇ったんだけど……皆返り討ちにされちゃったみたいなの」

ヒョロ長い妖精だ。ネギのような見た目、きつとネギの妖精に違いない。

「私達はミルクタウンから逃げてきたの！ 怖くて眠れないもの！」

ヒステリック気味なのは先程の丸っこい妖精だ。ジャガイモに似ている、ジャガイモの妖精に違いない。

「大丈夫かなあ」

「大丈夫！ アタシが守ってあげる」

心配そうなルンをクリアが励ましている。ちなみにルンを守るのは、クリアというよりクリアに従順な二匹の下僕だろうな。

「どんな奴か知ってる？ その妖精狩り」

秋留が優しく答える。

「そいつは目撃者はトコトン殺しちゃうらしいんだけど……」

気弱そうな眼鏡をかけた妖精がモジモジと話している。眼鏡の妖精に違いない……え？眼鏡の妖精なんているのか？

「俺、知ってるぜ、人間の男だ、魔法剣士らしいよ。魔族討伐組合で写真を貰ったんだ」

真っ赤な髪をした男らしい体の妖精だ。頭の髪がユラユラと揺れている所を見ると、炎の妖精だろうか？でもそいつの傍に言っても暖かくない。

「ちょっと、ブレイブ、何やってるの？」

真っ赤な髪妖精に手をかざしていた俺に秋留が注意する。少し邪魔をしてしまったようだ。

「で、その魔法剣士の写真とか持ってる？」

「え？ い、いや、慌てて逃げてきたからなあ……」

赤髪の妖精が頭をポリポリとかいている。強気そうな見た目とは裏腹に臆病なのかもしれない。ま、俺もそんな状態になったら、一通り火事場泥棒とかしつづつ逃げるけどな。

それから夕食が出来るまで、四人組の妖精からミルクタウンの名産や観光名所などの知らない情報も手に入れた。夕食を恵んでもらおうという必死な気持ち伝わってくる。

「色々情報をありがとう、一緒に食事どう？」

喋りながらも一生懸命に食事の準備をしていた秋留が妖精達に声をかけた。待ってましたとばかりに首を縦にブンブンブンと振

る。いや、振り過ぎだから。もげるぞ。

今夜の食事は音楽の街ヴィーンで購入した白大根とモンスターの肉で作った煮物がメインだ。鍋で炊いた御飯まである。

『いっただつきまゝす』

主に小さめの奴らが元氣よく言っている。俺達は秋留の作った美味しい料理に舌鼓を打ちながら、引き続き情報交換をした。この妖精達はそのままヴィーンの街まで行くようだ。

「多めに買い込んであるから、良かったら食料も馬車に積んであげるよ」

そこまでしてやる必要はないのに、と思いつつ、優しい秋留の提案に思わずニッコリとしてしまう。

ブンブン。

頭を振って秋留への気持ちを落ち着かせる。俺達はただの仲間だ。それ以上の存在にはなれないのだ。

妖精達に見張りは無理だろうと判断した俺達は、秋留、俺、ジェットの順番で見張りを行う事になった。そして何事もなく夜が明けた。

昨日とは違って朝から青空が広がっている。……馬車の屋根に乗っかっていた妖精の力のせいだったのかは分からないが……昨日よりは暖かい。

「色々ありがとう」

妖精達の乗る馬車が街道を走っていく。その馬車には溢れんばかりの食料が詰め込まれているのだが……俺達の馬車の十分の一位のサイズの馬車であるため、それ程食料を沢山分けてしまった訳ではない。

「こちらもお出発しますかな」

ジェットの号令に俺達は荷物をまとめて、妖精四人組とは反対側へと馬車を進めた。

妖精の都、ミルクタウン。それが昨日の妖精四人組から仕入れた情報の一つでもある。名前の通り、その都には圧倒的に妖精の数が

多いらしい。

しかし……妖精狩りか。

何か面倒に巻き込まれなければ良いが……。

第三章 妖精狩り

「……」

俺達の野営地では、妖精達がワイワイと食事をしている所だ。俺はそれを黙って睨みつけている最中だ。

ヴィーンを出発してからというもの、毎日のようにミルクタウンから逃げてきた妖精の一団に出くわし、食事を分け与えている。

まるで妖精達のお守りをしているようだ。

「食料が厳しくなってきましたぞ」

ジェットが荷馬車を覗き込んで嘆いた。途中で襲ってきたモンスタ―の肉なども保存食にして持ち歩いてはいるのだが、日に日に増える妖精の一団に食料が追いついてこない。

今、食わしてやってる妖精団は十人もの大規模だ。もうミルクタウンの裏路地やら丸秘料理など、隅々の情報を教えてもらっている。

「この子の知り合いにね」

頭に団子をつけた団子妖精が、知りたくも無い情報を食事の御礼にと必死に説明してくれている。

それを黙って聞いている秋留、クリア、ルンの三人もウンザリとした顔を隠せない。

「何とか明後日にはミルクタウンに辿り付けそうなので……ギリギリですな」

それはこれ以上、妖精団が増えなければの話だろうな。

こいつら、妖精同士で示し合わせて俺達をカモにしているのではないだろうか。有り得る。妖精には何度も悩まされているからなあ。

そして次の日、案の定、俺達の野営地に昨日の倍はありそうな妖精団がやってきた。それだけミルクタウンから脱出して来ている妖精達がいるという事だろうか。

「ごめん、それは知らないや」

「うん、分からない」

「知らにやーい！」

「それ、何の話？」

妖精狩りの人相は未だに分からない。どの妖精達も俺達から奪っていくだけで大したものとは与えてくれない。中には珍しいアイテムをくれる妖精もいるのだが、ほんの僅かだ。

というか、逃げてきている妖精の中には事情の分かっていない奴が結構いるという事が最近分かりだした。

「まるで小さな村が出来たみたいだね」

さすがの秋留も少し呆れているようだ。

「……こんな変な妖精ばかりじゃないからね、誤解しないでよ？」

ルンが必死に弁解しているが、本人だって十分変人な事を分かっているらしい。

「そろそろ寝てしまいますかな？　明日早く出発すれば日のあるうちにミルクタウンに到着出来そうですぞ……」

ジェットが眠そうに言っている。半分寝ているといっても良いかもしれない。……いや、死人だから起きているというのはおかしい気がする。

「頭が痛いのですか？　お嬢様に常備している頭痛薬などいかがですか？」

どの妖精に対しても腰の低いシープットが話しかけてきた。どうやら頭をかかえて悩んでいたようだ。この大陸に来てから精神がおかしくなってしまったのかもしれない。

「執事さん、お茶」

「はいはい、ただいま」

アフロの妖精に言われてシープットがお茶を持っていた。腰が低いせいで妖精に良いように使われている。人の世話をするのが好きで好きでしょうがない性格なんだろうな。

そして暫くすると、妖精達は一斉に眠りについてしまった。夜の
見張りを手伝う気などサラサラ無いようだ。

「それじゃあ、私が最初の見張りね」

秋留が伸びをして言った。

「野営地が広いから気をつけてな」

「うん」

どこかまだギコチない会話を交わして俺は眠りについた。

「ツイブ」

「ブレイブ！」

どうやら見張り交代の時間だ。秋留が時間管理用の砂時計を持ってテントの入り口に立っていた。金のある奴なら腕時計とか言う高価な時計を持っているのだが、俺達パーティーでは持っている奴はいない。そもそも太陽の位置や星の位置で大体の時間は分かるため、腕時計が必要だとはあまり考えたことはない。

「何も無かったか？」

「うん、大丈夫だったよ」

「そうか……んじゃ、オヤスミ」

「オヤスミ」

何か会話がつまらない。変に意識し過ぎなのだろうか。

「！」

とてつもない殺気。辺り一面の空気が一気に変わった。

「な、何？」

休もうとしていた秋留も杖を構えて周りを警戒する。寝たらすぐには起きないジェットは……やっぱり起きない。クリアのテントの前で休んでいたカリユーと紅蓮は唸りだした。

「凄い殺気だ……ジェットにも起きてもらった方が……」

何だが急に意識が遠のいていく。

「！ 何かの魔法？」

魔法耐性のある秋留が叫んでいるが、意識を保つのがやっとの俺は体を動かす事も出来ない。

「うっ！」

胸に激痛が走り血が舞った。合わせ難い焦点を目の前に合わせると、

暗闇に紛れて何者かが剣を振るっているのが見える。俺は無意識のうちに右手に持ったネマーから硬貨を発射した。

「ガウウウ！」

「ウウ！」

紅蓮とカリューが飛び掛ったようだ。最早声しか聞こえてこない。

「ヒートアロー！」

いつの間にか呪文を詠唱していた秋留が魔法の矢を放ったようだ。何者かの声が聞こえてこないという事は誰の攻撃も直撃しなかったようだ。

「大地を照らす優しい光よ」

いつの間にか起きたらしいジェットの声だ。聞いた事のない魔法だぞ……。

「この者を闇から解き放ちたまえ、目覚めの日輪」

頭の中のモヤが消えていくように意識がはっきりとしてきた。

「ぜえ、ぜえ」

体から湯気を立たせながらジェットが息を切らしている。意識を覚まさせる神聖魔法を唱えてくれたようだ。

「この暗闇ではブレイブ殿の五感が頼りですぞ」

「ああ、ありがとう、ジェット」

俺は痛みを我慢してネカーとネマーを構えた。奴は……。

俺はモーシヨン無く振り返ってネカーとネマーをぶっ放した。

「ぬうっ！」

敵のうろたえた声。若くはない、男の声だ。

「！ お前！」

奴の手に持った短剣に刺さっているものを見て俺は叫んだ。妖精だ。

俺達のスキを突いて、いつの間にか妖精達に近づいたようだ。

「きゃあ！」

「うわあっ」

何とか目を覚ましたらしい何人かの妖精達が目の前の惨劇に驚い

て四散する。辺りのザワメキにクリアとルンもテントの中から姿を現した。先程の眠気を誘う魔法も薄らいできたようだ。

「……妖精狩り？」

ルンが震えながら言った。

「みたい……だけど、ここで終わらせるよ」

クリアが不思議と強気だ。寝ぼけているのだろうか。クリアの左右にカリューと紅蓮が並んだ。少し傷ついているのは俺が半分意識が吹っ飛んでた時に奴から受けた傷だろう。

俺は目の前に意識を戻した。

暗闇に紛れていてほとんど顔を確認する事は出来ないが、物腰や声から判断すると四十歳位だろうか。

「邪魔をするな……もつとも見られたからには全員殺すがな」

「！」

俺は妖精狩りの動きに合わせてネカーとネマーを放ち、奴が妖精の群れに突っ込んでいくのを阻止した。

「ちっ、目の良い奴がいやがるな……」

喋りながら奴が俺の目の前までやってきた。コイツ、相当早いぞ。再びネカーとネマーをぶっ放す。

しかし、あっさりと避けられた。

今マガジンに入っている硬貨は銅で出来た千カリム硬貨だから、直接狙うと殺してしまう事になり兼ねない。悪人だと分かっているも相手が人間だと躊躇してしまう。

「甘い奴だ」

妖精狩りの振るった別の大剣の一閃を持ち替えた短剣で受け流す。そして足を狙ってネカーをぶっ放した。

「良い動きだが、甘すぎる！」

後頭部に妖精狩りの回し蹴りが入った。

「はっ」

横からジェットの援護が入った。しかし、マジックレイピアの攻撃を難なく交わすと妖精狩りが上空へと舞った。

「不可視な超人マッハよ、」

「！ 召喚士？」

俺は上空にネカーとネマーを放ったが、妖精狩りの持つ剣に弾かれた。

「その拳で我に仇名す敵を吹き飛ばせ……」

やばい！ 魔法が放たれる。一体、どんな魔法だ！

「うおおお！」

その時、ジェットが上空の妖精狩りに向かって飛び上がった。不死身の身体で俺達を守るつもりのようなようだ。痛みはあるというのに……。

「マッハ・パンチ！」

上空がパツと光った。そして勢い良くジェットの身体が地面に叩きつけられる。

何が起こったのか全く見えなかったが、呪文の内容からして見えないう霊獣の召喚なのだろうか。それでも妖精狩りの顔は光った瞬間に見えた。

やはり四十歳位の男だ。変わった灰色の丸い頭巾をかぶって、不気味な暗い色の剣を構えていた。

「！」

咄嗟に上体を反らしてその剣を交わした。いつの間にか俺の目の前まで来ていたようだ。

「マッハ・パンチ！」

「な？」

呪文の最後、発動の言葉と共に俺の腹に激痛が走った。何か強大な力で思いっきり殴られたような感触……。背中が近くの木にぶち当たったようだ。またしても意識が遠くなる。

「死を悟った嵐の猛攻は、仇名す者を滅ぼす爆風となる……」

早口だが、力の籠った言葉、秋留がラーズ魔法を唱えようとしている最中だ。

その魔法を援護するかのようにカリューと紅蓮が妖精狩りに同時

に飛び掛る。

「まだまだあつ！」

上空から飛び掛ってきたカリューの攻撃を剣で払った。あまり切れ味は良く無さそうだが、カリューはまともに剣の攻撃を受けてしまった。

そして紅蓮の攻撃は交わされ、後方から回し蹴りをくらい地面へと転がる。

「カリュー！ 紅蓮！」

クリアが叫んだ。蹴りを食らっただけの紅蓮の傷は浅いようだが、カリューは……大丈夫そうだ。剣の攻撃をまともに食らったのに身体はどこも吹き飛んでいないようだ。全く頑丈な奴だ。息を荒げながらヨロヨロと立ち上がってきている。

「ウインド・ボム！」

そして秋留の魔法が発動した。

空気が「バンッ」と大きく鳴り、妖精狩りの身体が後方に弾け飛んだ。

「炎を吐く獣ペルーダ……」

空中で体勢を立て直しながら、呪文を唱え始めた。秋留の魔法が直撃したはずなのに、何も無かったかのように呪文を唱え始めた……そんな事出来るのか？

「ガウッ」

傷の浅かった紅蓮が後方から飛び掛った。またしても剣で払われる。俺も呪文を完成させまいとネカーとネマーを構えようとしたが……駄目だ、先程のダメージが残っていて身体を動かそうにない。

「駄目、呪文も間に合わない！」

秋留が叫んだ。

「我の前に姿を現し全てを焼き尽くせえ！」

力の籠った最後の叫び。

そして俺達の目の前にはヘビのように身体の長い獣が姿を現した。

「ウキヤーーーーー」

高い叫び声を上げながら辺りを跳ね回り始め、所構わず口から真っ赤な炎を吐き出した。

「ぎゃああ」

「うわあ」

妖精達の群れに炎が放たれる。

「業火の身体を持ち 煉獄の心を抱く者よ！」

秋留が魔法を唱え始めた。それに気付いた妖精狩りが剣を構えて秋留に飛び掛る。

「うおおおお！」

俺は叫びながら両手を持ち上げ、ネカーとネマーを乱射した。

「ちっ」

それでも避けながら妖精狩りは秋留を斬りつけた。その攻撃を秋留は何とか杖で受け止めたようだが、勢い良く後方へと弾かれた。

「くう……」

攻撃のショックにより秋留の魔法は中断されたようだ。

ま、不味いぞ……。こいつ、冗談じゃなく強い。このままじゃ全滅してしまう。

「弱き者を狩るなど、人としてあるまじき行為……」

ジェットがマジックレイピアを構えて立ち上がった。

「黙れ……」

妖精狩りがジェットに飛び掛る。そして無防備なジェットの胴体を横薙ぎにしまった。

「ぐああああ！」

ジェットの叫び声が闇夜にこだまする。様子を見守っていた妖精達の悲鳴も沸き起こった。

「余計な口を叩くからこうなるのだ」

「ジェットー！」

俺は叫んだ。

「お、お主こそ、悪党のくせに喋りすぎじゃ」

上半身と下半身がほとんど離れてしまっているジェットが口を開

いた。

そうだ。

あまりにも普通の老人っぽい行動をするせいですぐに忘れてしまいがちだが、ジェットは死人なのだ。

痛みは感じるが、死ぬ事は無い。

それでも胴を斬られるのは想像を絶するような痛みのはず。その痛みを堪えていられるのは、チェンバー大陸の英雄と呼ばれていた程の強者だったからか、死人としての生活の長さから痛み慣れたからなのかは分からない。

「な！」

さすがの妖精狩りもジェットが死人だったとは気付いていなかったようだ。明らかに動きが止まってしまっている。

「はあっ！」

上半身だけのジェットの攻撃が妖精狩りの脇腹を貫いた。僅かな魔法力も籠っていたらしく、妖精狩りの身体が大きく揺れた。

そのままジェットの身体が地面へと倒れこんだ。

それと同時に今まで暴れていたペルーダとかいう獣が煙のように消える。

「くっ……」

妖精狩りが脇腹を押さえながら片膝を付いた。脇腹から血を流している所を見ると死人ではないようだ。

「水の牢獄により全ての者を包み込み全ての者に残酷なる死を……ウォータープリズン」

秋留が弱った妖精狩りに魔法を放った。

この魔法はたしか、相手を水の球に閉じ込めて窒息死させる恐怖の魔法だ。容赦ないな、秋留……。

「ちっ！」

妖精狩りは舌打ちをすると、最後の力を振り絞って傍らに転がっていたジェットの上半身を水球に投げつけた。

どうやら魔法の効果は、窒息死する事など有り得ないジェットの

上半身を取り込んで満足してしまったようだ。

この妖精狩り……咄嗟の機転などを見ると、やはりレベルの高い相手に違いな。

「この礼はさせて貰うぞ」

「ま、待て！」

両手を挙げて武器を構えようとした俺の腕に短剣が突き刺さった。先程、妖精を突き刺していた短剣だ。

「お、追わなくていいよ」

体勢を立て直した紅蓮やカリューを秋留が引き止める。クリアも二匹の獣を呼び止めたようだ。

「まずはあの子達を少しでも多く助けてあげないと」

秋留が悲しそうな顔をしながら後方を振り返った。
惨劇。

辺りは暗闇を引き裂くかのように木々が燃えている。そして地面に転がる負傷した妖精達と無数の死骸……。

冒険者は常に一般市民を守る事も考えなければならない。危険に晒してはならない……。

俺達は氣力を振り絞り、傷ついた妖精達を助け始めた。同時に燃え盛る地面や木々の消火も進める。

「もう夜明けですな」

ジェットが近くの川から水を汲んできた所だ。妖精狩りとの戦闘でその不気味さを垣間見たジェットは妖精達から若干避けられている。ジェットが頑張ってくれなければ俺達は全滅していたかもしれないのに……薄情な奴らだ。

妖精達の手当てと森の鎮火が終わったのはついさっきだ。

不死身のジェットは底なしの体力でまだまだ活動しているが、他のメンバーは地面に倒れてグッタリとしている。

「辛いけど、早めにミルクタウンに移動しないと……この状態でまた襲われたらもう撃退出来る自信ないし」

秋留もゲッソリとしている。魔法で炎を消したり、なんかの魔法で妖精達を回復したりしていたからな。

「私も次は生き残れる自信がありません」

戦闘中はトコトン存在感の薄いシープットが言った。敵もお前は狙わないんじゃないか？　というか、どこにいた？

「アタシ達はもうしたらい？」

生き残った妖精達が怯えながら俺達に近づいて来た。

「ミルクタウンからは逃げて。妖精狩りの今度の標的は私達かもしれないし」

秋留からその台詞を聞いた妖精達は文句なく、小さな馬車で俺達から離れていった。

妖精狩りの標的……。

目撃した人間も例外なく殺しているようだしな。

「まあ、奴の顔を見たとし深い傷も負わせたからな。俺達が準備する時間はあるんじゃないか？」

リラックスさせるために言った台詞だったが、あまり場は和まなかったようだ。

言っではみたものの、リベンジしてくるのは時間の問題かもしれない。

「どうしたの？」

クリアがルンの顔を見て心配そうに言っているのが聞こえた。

ルンは妖精にしては俺達人間と皮膚の色がソックリなのだが、今の顔色は真っ青だ。

「な、何でなの……」

「ルン、大丈夫？」

頭を抱えて蹲ってしまっている。そういえば、妖精達の傷の手当などをしている時からルンはどこかおかしかった。

「ギヤスター……」

「？　ぎやすたあ？」

ギヤスター？　人の名前だろうか。

「もしかして、妖精狩りの人は知り合い？」

秋留の優しい問いかけ。

その話し方にルンも少し落ち着きを取り戻したようだ。頭を上げるとオドオドしながらも話始めた。

「ギヤスターに間違いないわ……私の恋人だった、ギヤスター……」
それからルンはポツポツと弱々しい声で人間だった頃の記憶を頼りに話し始めた。

魔法剣士ギヤスター。召喚魔法と剣術、格闘を得意とするレベル四十一の冒険者。

武道家メルン。格闘が得意なレベル二十の冒険者。ルンという名前はこのメルンという名前から取っているようだ。

二人は恋人同士であり、将来は結婚を誓い合っていた。二人の息はピッタリで、どんなモンスターも魔族にも二人で勝利してきたらしい。……これは言い過ぎかもしれない。

しかしある日、二人の仲が悪くなる。

メルンは、相方であるギヤスターが実は自分の事が嫌いだということを知ったのだ。

相手に対して疑惑を抱くと自然と相手の嫌な所ばかりが目立ったり、疑惑が大きくなったりもするもの……らしい。……他人事じゃないな。まるで今の俺のようだ。

「いちいち五月蠅いな！俺がどうしようと俺の勝手だ！」

ギヤスターの行動が気になってメルンが問い詰めた結果、二人は破局した。

そしてショックから立ち直れなかったメルンはこの世を去る……。

「ギヤスターは妖精狩りなんていう野蛮な事はしない、誠実な冒険者だったわ！熱血漢で正義感が強くて融通が利かないけど、とっても優しく……うわーん」

思い出を語り終わったルンは最後に叫ぶとショックのあまり泣き

始めてしまった。

ちなみに熱血で正義感が強くて……というキャラは最近あまり登場しない人間だった頃のカリューの性格にピッタリだ。

「ギャスターって青髪……」

「ブレイブ！」

ふざけようとした俺を秋留が怒る。ちえっ。

「その話ってこの大陸で起きた事だね？」

「うん……」

秋留が何か考え込んでいる。わがパーティーの頭脳だからな。何を考えているのかは俺にはサッパリ理解出来ないが……。

「妖精狩りを始めるきっかけがあるのかもね。どっちにしろ、この先のミルクタウンに行けばギャスターの情報も何か分かるかもよ？」

「……うん！」

弱々しいがどこか元氣の出てきたルンが返事をした。

俺達は荒れてしまった広場を後にすると、一路、ミルクタウンを目指して馬車を出発させた。

「もう見えてきましたぞ」

昼過ぎにはミルクタウンの街が遠くに見えてきた。街道には変わった実の生えた木が所狭しと生えている。

「ギジンが沢山いるね」

久しぶりの街にクリアも嬉しそうだ。ルンも少しは気分が良くなってきたらしく、街並を眺めながら目をキラキラさせている。

「まずは……宿を探そうね。長老に会うのは明日にしよう」

疲れきった秋留が言った。そうだな、先に宿を探そう。長老への挨拶や情報収集などは体力が回復した後で良い。

「腹が減っては戦が出来ませんからな」

死人のジェットの腹が減るのは今更疑問に思う事でもない。

俺達は大通りを歩き始めた。

フアリやヴィーンよりも沢山のギジンが冒険者の俺達の姿を見て、

自分の宿屋に連れて行こうと必死になっている。

「食べ放題付き・屋上露天風呂の宿……トナカイ？」

特典は魅力的だが不思議な感じの宿の名前が俺の眼に飛び込んできた。

「食べ放題？ 屋上露天風呂？ そこが良さそうだね」

俺達は宿屋トナカイのプラカードを持っていたギジンの元へと歩いていった。

「いらっしゃ！ うちにお泊りか？」

微妙に言葉が下手なギジンに案内されて到着した宿トナカイ。屋根には大きな角が二本くっついている。

クリア達は相変わrazのスイートルーム、俺とジェットは少し高めの相部屋をとった。

「夜御飯の時間まで寝ませんか？」

眠そうなジェットの申し出に、もちろん異論のあるはずもなく、俺達は久しぶりのベッドでグッスリと眠りについた。

「お客様、夕食のお時間ですが」

相当疲れが溜まっていたらしい。まだまだ眠り足りなかったが、食べ放題のためにも頑張るか。

ジェットも腹をさすりながら起き始めた。

「おはよ」

秋留を筆頭に眠そうな軍団が隣の部屋から出てきた。同じように店員に起こされたようだ。

「徹夜だったからな」

「そうだね」

俺達はフラフラしながらも食べ放題をやっている食堂へとやってきた。値段の割りには旨そうな料理が目立つ。

『いっただっきまうす！』

俺達は食べ放題用の皿にコンモリと盛った料理を豪快に食べ始めた。馬車での最後の方の料理は妖精達に色々持っていかれたせいで

質素なものだったからなあ。

遠くで店員達がザワザワと話しているようだが気にしない。

この宿ではペットも同伴可だったため、カリューと紅蓮も横で宿の料理をガツガツと食べ続けている。……いつも通り銀星達は隣の馬屋で食事でもしている最中だろうか。

「おかわり持ってくる」

「ワシもですじゃ」

「僭越ながら私も……」

ズラズラと席を立ち、テーブルには俺と秋留だけが残された。お互い、皿には料理がまだ乗っかっている。

前なら二人きりになれたら嬉しかったのに……今は複雑な心境だ。二人きりなのが辛い。

一体何を話せば良いのか、頭が真っ白になってしまう。

……素直に秋留の気持ちを聞いてみるか？

いや、優しい秋留の事だ。俺の事を何とも思っていないなくてもそれなりの返事をしてくれるかもしれない。誰に対しても優しい秋留。

俺が特別な訳では無いんだ……。

「何かくっらくい！」

料理を持ってきたクリアが俺の背中を叩きながら言った。

はぁ。こいつ位お気楽ならどんなに楽な事か。

「人の顔を見て溜息付くな！」

クリアに再びド突かれた。

その後、俺達は何回も料理をおかわりし、満腹になった所で食堂を後にした。ちなみに食べ放題用の数々の大皿はいくつかが空になっているのは言うまでもない。

翌日。

空からは優しく小さな雪が降り続けていた。きちんと防寒をした俺達は宿屋を出発して、街の中心にあるという長老の家へと歩いていった。

途中、この街を脱出しようとしている妖精達と何度もすれ違った。シャッターを下ろしている店も数多く目立つ。これじゃあ、この街は寂れる一方だろうな。

ようやく長老の家の前までやってきた。

俺達の前に客がいたらしく、家のドアから一人の男が出てきた。

どこか人間離れをした綺麗な肌をしている。

「あの人、ギジンだわ……」

ルンがポツリと呟いた。

ほく、あんな人間みたいな見た目のギジンもいるのか。これはいいよ見分けるのが難しくなるなあ。

「なんじゃ！　またこの街を出たい奴らか！」

長老に合った最初の一言がこれだった。しょうがないだろうな。

ギジンは使っていないが、人間よりは頭二つ分は低い老人が目の前にいた。細長い眉毛を必死に吊り上げて「うううっ」と威嚇している。

「さっき出て行ったのも街を脱出する妖精か？」

俺は言った。

「あやつは別件じゃ！　お前は何じゃ！」

この爺さん、妖精狩りの件で相当頭にきているみたいだな。

「あ、あの……」

不思議な迫力にルンもタジタジだ。

何とか秋留が長老を落ち着かせてようやく本題へと入った。

「こ、これ、虹色蜥蜴の粉です」

ルンが差し出した袋を、怒りの顔から満面の笑みに変わった長老がプルプルした手で受け取る。

「こ、これじゃあ！　ワシが考案中の虹色パンの材料になる虹色蜥蜴の粉……これがあればミルクタウンは有名になってワシの元に税金がガッポガッポ……」

そこまで喋って長老の動きが止まった。

興奮し過ぎて死んでしまったか？

「な……」

『な?』

俺達は全員で聞き返した。

「何で妖精狩りなんていう訳の分からない輩がこの街周辺に出現するんじゃー!」

また怒り出した。

「何でじゃ……」

今度は泣き始めた。喜怒哀楽の激しい爺さんだ。まあ、妖精狩りのせいで精神がおかしくなってきたに違いない。

「お、落ち着いてください、長老様……」

ルンが小さな身体で長老の身体を支えた。

「……又ザンク……」

「え?」

「ワシにも名前がある。又ザンクじゃ」

……。

どうしろと言うのだ?

「呼んであげれば?」

秋留がルンに耳打ちする。それに軽く頷くとルンは優しく問いかけるように話かけた。

「長老又ザンク様、落ち着いて下さい……」

「おおおおお、ええ娘じゃのお、ええ娘じゃのお」

又ザンクと名乗った爺がルンの剥き出しの胸に抱きついた。

「カリュー、紅蓮……」

それを見たクリアが二匹の下僕に命令を出した。

又ザンクが涙を流しながらカリューと紅蓮に爪を突き立てられたのはそのすぐ後だった。

「老い先短い老人に酷い事をするもんじゃ」

「……妖精の見た目と年齢は関係ありませんよ」

ここは又ザンクの家の居間だ。又ザンクの台詞にルンが怒りなが

ら回答した。

「どうぞ、粗茶ですが……」

この家のお手伝いさんだろうか、ギジンがお茶を運んできた。

「で、この粉の他に何か用があるのじゃるか？　ワシは虹色パンの開発で忙しい身なのじゃが……」

自分勝手な爺さんだが、この爺さんが一番情報を知っていそうだしなあ。

「私達、ここに来る途中に妖精狩りに襲われたんです」

「何と！　それは本当かえ？」

オーバリアクションで秋留の方に向き直った。

交渉役の秋留は長老の真横の席に座っているため、長老の顔が真横にある。秋留に変な事しようとしやがったら、中身の無さそうな頭を吹っ飛ばすからな……。

「その兄ちゃんが危険な目でワシを睨む」

「……あまり気になさらずに」

どうやら俺の心意気は伝わったようだ。

「妖精狩り……犯人は知っていますか？」

「……それを聞いてどうする？」

ヌザンクがシリアスな声を出す。まるでキャラを作っているかのようだが……作っているんだろうな。

「私の恋人にそっくりなんです！　恋人だったギャスターに！」

秋留の隣に座っていたルンが涙ながらに叫ぶ。

その場が暫く沈黙に包まれた。

「……それは妖精になる前、前世での話かな？」

「はい」

「……あんたがメルンだったのか」

「！　はい！　……という事はやっぱり妖精狩りはギャスターなのですね？」

ルンがガックリと肩を落とした。人違いであって欲しかったのだろう。元最愛の男が妖精狩り、自分と同じ種族を狩っている等とは

考えたくはないだろうな。

「そうか、あんたがあのある有名なナイスバディの武道家メルンだったとは……確かに……」

ヌザンクの爺がルンの身体をジロジロと眺める。

「あ、あはは……冗談じゃ」

ヌザンクの頬にカリユ一の爪が軽く刺さった。いい加減に学習しないといつか死ぬぞ、ヌザンク。

「おほん、妖精というのは噂や情報が大好きなんじゃ」

気を取り直したヌザンクが話しを始めた。

「妖精にも良い妖精と悪い妖精がいる……邪妖精テック……それがメルンとギヤスターの仲を裂き、妖精狩りを誕生させてしまった根源なんじゃ」

ヌザンクが話したメルンとギヤスターの悲しい結末。

愛し合っていたメルンとギヤスターはいつも仲良く街を歩いていた。それを恨めしそうに眺めていたのが、邪妖精テック。人の幸せと恋愛が大嫌いな悪戯妖精。

ある日、邪妖精テックはギヤスターに関する噂を流した。ギヤスターはメルンの事が好きじゃない。他に本命がいる……と。

最初は誰も信じてない、大した噂ではなかった。

しかし、それが人や妖精の間を伝わり、やがてリアリティーのある噂へと変わって行ってしまったのだ。

ギヤスターに片思いしていた道具屋の娘までもが噂の中に取り込まれた。

情報好きな妖精達は二人の関係が上手くいかなくなってきた事で更に噂を広げていった。

そして、メルンに迷いの心が生まれた時を見計らってテックが囁いた。

「ギヤスターはメルンの事が嫌いになったってよ」

そこでメルンが自殺する。

悲劇はそれだけでは終わらなかった。

テックは次に別の噂を流した。

「メルンはギャスターから逃げるために自殺してしまったらしい」
またしても人間や妖精達の間を伝わるうちにリアルな噂へと変わり、ギャスターの耳へと入った。

必死にメルンを探していたギャスターは森の中で朽ち果てた恋人の亡骸を発見する。

これだけならギャスターも妖精狩りに走るキツカケにはならなかったかもしれない。

しかし、ギャスターは聞いてしまった。

「邪妖精テックが変な噂を流していたみたいだぞ、メルンとギャスターはやっぱり愛し合っていたんだ」

全てが信じられなくなり、噂を流した、噂を伝えた妖精達を殺す事でギャスターは恨みを晴らしていった。

その姿はまるで妖精を狩る事でメルンへの気持ちを忘れようとしているかのようだった。

「……」

ヌザンクの昔話が終わり、俺達は黙っていた。

ルンの泣き続ける悲しい声だけが居間に響いている。

邪妖精テック……。

人の恋愛感情があまり分かっていない俺でも分かる、許せない相手。
手。

しかし……。

「何とかギャスターを止めないと。妖精狩りをするなんて間違ってる」

ルンが元気を振り絞るように言った。

そう。ギャスターは間違っている。

それにしても強いな、あんな小さな身体をしているのに、どこにそんな力があるんだろうか。

それなのに俺は……一人でウジウジと……秋留への想いも伝えられずにいる。

「秋留！」

俺は秋留の方を向いて叫んだ。

「うん！ ギヤスターを止めないとね！」

い、いや……。

そうじゃないんだが……。いや、そうだな、ギヤスターの暴走を止めないとね。

秋留へ想いを伝えるのは……。ま、まあ、いいか、今度で……。

「ワシも手伝いますぞおお」

『いや、遠慮します』

ヌザンクの申し出を丁重に断った俺達は、決戦に備えて街へと繰り出した。

「大きな街だけど、あんまり店屋が開いてないからなあ」

「そうですね、回復アイテムを探すだけで一苦労ですな」

「あの次の角を曲がれば、開いている道具屋があるはずですよ」

俺はなぜか老人二人を連れて買い物に繰り出している。

一人はジェット、もう一人はヌザンク。喋り方も声もほとんど同じで聞き分けるのが難しい。

ヌザンクの言うとおりに角を曲がった所に道具屋があったが……。

「閉まってるぞ？」

「あんにゃろー！ 長老であるこのワシに無断で夜逃げしやがったな！ あのジャガイモ妖精めええええ！」

まるで鬼だ。

ジャガイモ妖精か。確かそんな印象を受けた奴が逃げている妖精団の中にもいたなあ。あいつか？

「長老様あ！」

遠くから別の妖精が近づいて来た。

「お、モッコか。どうした？」

モッコと言われた妖精が俺とジェット顔をジロジロと見ている。

「この人達、新しく雇った冒険者？」

「そうじゃ」

俺とジェットに聞こえないようにヒソヒソと話しているが、盗賊の俺の耳には筒抜けだ。

「また首無し死体にされないといいけどね」

「そうじゃなあ、ちよっと心配じゃのお。若い女子だけかくまってやるとするかのお」

俺は黙ってネカーとネマーを構えてヌザンクとモックに向けた。

「銃の威力が心配なら試してみるか？」

俺の迫力が伝わったのか、ヌザンクとモックは苦笑いすると別れの挨拶を交わした。逃げるようにモックが離れていく。

「で、開いてる道具屋は他にどこにあるんだ？」

「こっちございます、ブレイブ様」

ヌザンクの俺に対する扱い方が急に丁寧になったのは、決して気のせいではないだろう。脅して正解だったな。

「随分、集まったねえ」

「おう、店員が沢山オマケしてくれたからな」

既に街中に俺達が妖精狩りをやってくれているという噂が広まったらしく、色々な場所でヒソヒソと内緒話をされているようだ。中には失礼な会話をしている妖精達や人間もいるようだが、一睨みするとドイツもコイツも即会話を終了させる。

……俺に対する変な噂も広がっているのかもしれない。危ない奴とか、容赦ない奴とか……モックとかいう妖精の仕業に違いない。ヌザンクの爺も怪しいな。

「魔法剣士ギヤスター……強敵だから。沢山回復アイテムも用意しておかないとね」

「ここでカリキュがいたら、正々堂々一対一で戦え！　なんて言うのかもしれないなあ……」

そのカリューはクリアの傍のソファで寝息を立てている。

「今夜あたり来るか？」

「街の中にいたら、他の妖精に迷惑をかけちゃうかもね。そろそろ近くで野宿する事にしようか？」

さすが優しい性格の秋留ならではの作戦だ。

この寒いのに野宿するのは嫌だが……しようがないな。街中じゃあ戦い難いしな。

「おい、ギャスターはいつ来るんだ？」

「私に聞かれたって知らないよお！」

俺はルンに突き刺した指を元に戻した。確かにルンに聞いても分かるはずはないか。

ミルクタウンの近くで野宿を始めてから二日が経過した。今は朝食を食べ終えてノンビリとくつろいでいる最中だ。街が近いので食事は十分に取る事が出来る。

「気分転換に水汲んでくる」

「ワシも一緒に……」

俺達はいつギャスターに襲われても大丈夫なように最低二人一組で行動している。それにしても現れないもんだなあ。傷が深すぎてどこかで死んでいるのではないだろうか。

「来ないなあ。来なくて良い時に来るんだけどなあ」

……？

ジェットの反応が無いと思った俺は、恐る恐る後ろを振り返った。動く事なく立ちすくんでいるジェットがそこにいた。

俺はネカーとネマーを構えてジェットに近づいていった。

「おい、大丈夫か？ ジェット」

「寝ていました」

俺はガックリと肩を落とした。

？

寝ていました？ 寝ていたですじゃ、ではなく？

俺は咄嗟にジェットから遠ざかった。ジェットが俺にマジックレイピアを繰り出したのはその直後だ。少しかすただけだが、魔力が込められたせいで俺の上着が弾けとんだ。

「ぐっ」

口の中に血の味が広がった。腹からは大量の血が流れている。

「ちつくしう……」

よく見るとジェットの後方にドクロのようなモンスターが目に入った。

「霊獣百鬼の使い……」

俺の後方から声が聞こえてきた。

「召喚している間は俺の生命を常に吸い続けるのだが……もう関係ない」

後方から強力な蹴りが俺の背中に命中した。

息が詰まり前のめりに倒れる。

「血を吸え、呪いの十字架よ、生贄の血肉を己のものとせよ！」

またしてもギャスターの召喚魔法か！

どんな効果か知らないが、俺の身体が宙に浮き始めた。

「うっ」

両手両足に激痛が走った。見ると大きなクサビが俺の手の平や足の甲を貫いていた。

「呪いの十字架は生贄にされた者の血肉を少しずつ吸い続けるのだ」

「なんで、こんな事をするんだ？ とつとと殺せば良いだろう？」

言っておいて何だが、まだまだ死にたくはない。

ただの時間稼ぎだ。

暫くすれば、秋留が……。

いや、助けには来ない。自力で何とかしないと……。

「人間は人質があると手を出せない場合が多いからな。お前は人質としての価値があるかな？」

ジェットは後方のドクロに操られたままギャスターの後ろを付いてきている。

呪いの十字架とか言うものにはりつけられた俺も、十字架ごとギヤスターに抱えられて移動させられている。

「ブレイブ！、ジェット！」

俺とジェットは情けない姿で野宿場所に戻ってきたようだ。秋留の声が聞こえてきた。

「この状態が分かるな？ この二人は人質だ」

俺はともかくジェットは人質にはならないだろう、と余裕を見せて心の中で突っ込んでいる場合ではない。意識が大分朦朧としてきた。この十字架に血を吸われているせいだろう。

「があっ」

太腿に激痛が走った。見るとギヤスターの持っていた短剣が俺の足に突き刺さっていた。気絶もさせてくれないらしい。

「きゃああ！ ブレイブ！」

秋留の悲鳴が聞こえる。心配でもしてくれているのだろうか。

「お、俺に構わずギヤスターをやっつけろ……俺の事なんて気にする必要は無い……」

そう、俺の事なんてどうでも良いんだろ？

とつとつギヤスターをやっつけてくれ。

「ブレイブの馬鹿！ ……大切な仲間を見殺しに出来る訳ないですよ！」

「……な、仲間……」

しかし少し間があったぞ。きっと俺を元氣付けるために無理して言っているに違いない。

「はっはっは！ ちゃんと人質の役目を果たしてくれたようだな！」

笑いながらギヤスターが秋留に近づく。

それは間違いだ。状況がヤバくなれば俺の事など放っておいて反撃に出るに違いない。

「カリュー！ 紅蓮！」

クリアが叫んだ。

カリューと紅蓮がギヤスターに飛び掛る。

人質を取って安心していたギャスターは突然の攻撃に胸と肩に攻撃を受けた。

「ふざけるなよ！」

暗い色の剣でカリューと紅蓮に反撃するが、二匹は既に傍にいない。ヒットアンドアウェイ、獣としての本能だろうか。カリューも野生の勘で生きていたようなもんだしな。

「人質がどうなってもいいのか！」

ギャスターが短剣を俺の方に投げつけた。この軌道はやバイ！

ちくしょう！ クリア！ お前もやっぱり俺の事なんてどうでも良かったんだな！

「……！ ……？」

痛みが無かったが、とうとう俺は死んでしまったのか？

恐る恐る目を開けると、目の前にはマジックレイピアを振るっているジェットがいた。

ジェットの顔がググツと百八十度回転して俺の顔を見る。その後ろには相変わらずドクロ姿の霊獣が見えるが……。ジェットは危険な虚ろな目をしている。

「な、何い！」

ギャスターが再び驚く。

「火炎の王を守りしサラマンダーよ、炎の槍となり我が意に従え、フレイム・スピア！」

呪文の溜めがない秋留の詠唱。威力よりは速さをとったためだろう。

秋留の両手から放たれた炎の槍がギャスターに直撃した。

「ぬあああああ」

叫びながらギャスターが吹っ飛んだ。そしてそのまま地面に倒れる。殺したのか？

「ちよっと焦げた程度でしょ」

全員の心配を察したのか秋留が言った。

「うわっ」

急に身体が軽くなって俺は地面へと落ちた。どうやら俺を縛り付けていた十字架が魔力が途絶えたことにより消えたようだ。

「ブレイブ、大丈夫？」

秋留が走りよってきた。

人質の俺を放っておいて攻撃をしかけたんなら、俺の方には来ないで、そのまま止めを刺せばいいのに。

「俺の事なんて、放って……」

「ちょっと黙ってて！」

そう言うと、秋留は杖を構えて呪文を唱え始めた。

「この者の中を流れる生命力を司る精霊よ、その力を集結させ傷を癒したまえ……」

秋留に回復させてもらった事はほとんどないが、これはラーズ魔法の中でも数少ない偽回復魔法、その名も……。

「ライフスパイラル！」

俺のしている目の前で腹の傷が埋まっていく。

と同時に身体の力が一気に抜けた。

この魔法は身体の中の体力やら生命力を傷の修復にあてるという、無理矢理な回復魔法だ。

「あ、う……」

最早、喋る体力も残っていない。この魔法は傷の深さの分だけ体力を削られてしまうのだ。

秋留は、体裁だけ気にして回復してくれたんだろう。

「……ブレイブ、一つだけ言っておくけど」

立ち去ろうとする秋留が背中を向けて話しているのが聞こえる。

「……私は仲間のためだったら命をかけられるわ。カリューにだってクリアにだって……ブレイブにだって」

……。

……涙が出そうになってきた。秋留は仲間のためなら命をかけられるのか。俺だけ特別扱いじゃないというのは少し残念だが。

俺も秋留のためなら命をかけられる。例えば秋留とは違う感情

からだとしても、秋留を守りたいという気持ちは一緒だ。俺はやっぱり秋留の事が好きなんだ、愛しているんだ。

あのクソジジイに色々言われて不安にもなったが、俺の気持ちはやっぱり変わらない。

大好きだ、秋留……これが直接言えれば、どんなに楽か。

「ブレイブが一人で迷子になった時、森に助けに入った私の耳に『秋留の事なんて何とも思っていない』っていう内容の声が聞こえてきたけど……」

……助けに来てくれたのは秋留だったのか。

しかも一番聞かれたくない叫びを聞かれてしまった訳だ。

「今日の長老様の話からすると、ブレイブも邪妖精に騙されたのかな？」

そうか！ さすが秋留！

奴は邪妖精だったか。もしかしたら、ルンが騙されたテックとかいう邪妖精かもしれない。

「ブレイブが叫んだ内容、嘘だと信じているから！」

そう言って秋留は走って行ってしまった。

もしかして秋留も俺のことを……いや、考えすぎだな。

とにかく俺は秋留のお陰で自分の気持ちを再び信じる事が出来た。ありがとう、秋留。

……ちなみに秋留の命をかけるリストにジェットは入っていない。そりゃそうだな。

この戦闘が終わったら、きちんと俺の気持ちを伝え……ようかな？

何はともあれ、何とか傷は塞がったが身体は動かさそうに無い。

喋る事も出来ない。

しかし、視力と聴力は何とか生きている。他の感覚を削ってでも戦闘の状況を見よう……愛しい秋留の勇姿を焼き付けておこう。

「やっと戻ってきたか……まずは邪魔なお前を殺して」

傷だらけになりながらもギャスターはカリューと紅蓮、クリア、

そして逃げ遅れたシープットを倒していた。どいつも運良く生きているようだが……。

よく見ると、長老が一生懸命に傷薬を一人ずつに振りかけているのが見える。

「次はそこで回復薬を振りまいている邪魔なジジイをぶっ殺してやるからなあ！」

本当に戦闘場所に来ていたヌザンクが、その台詞にビクリと身体を震わした。

長老のお陰で他のメンバーが何とか生き残っているのかもしれないので、後で礼を言っておいた方が良さそうだ。生きていれば。

「ジェット……大丈夫じゃ無さそうだね」

フラフラとジェットが関節を揺らしながら立っている。ジェットの身体はどうなっているのだろう。

「ツートン、カーニャア、お疲れ様。とりあえずもう大丈夫だよ」

秋留がそう言うと、ジェットの身体がクニャッと倒れた。

そうか、霊獣に操られたジェットを更にツートンとカーニャアがジェットの身体に乗り移って動かしていたのか。どうりで人間離れをした不気味な動きだったはずだ。

「もうお前一人だぞ？」

「！ その手に握っている子を離して！」

さすがに視力も衰えているせいで見えなかったが、ギヤスターは左手に妖精を握っていたようだ。

ギヤスターが左手を振って秋留に妖精を投げつけた。

「ルン！ 大丈夫？」

俺の所までルンの返事は聞こえて来ないが、秋留の様子からするとまだ殺されてはいないようだ。

「スキありいいい！」

秋留がルンをかばっている間にギヤスターが剣を構えて飛び掛った。

咄嗟に前転でその攻撃を交わす。

しかし肉弾戦は断然ギャスターの方が有利なようだ。避けた秋留の背中にギャスターの蹴りが入った。

ちくしょう！ 俺の身体が動くなら援護してあげられるのに！

「雪原の住人よ……」

「させるかよっ！」

秋留が呪文の詠唱を始めた途端にギャスターが秋留との距離を詰めて剣を振るった。

それを杖で何とか受け止めたが、勢いを殺せずに秋留が後方へと弾かれた。

「全てを貫く氷の矢となれ……」

それでも秋留は魔法の詠唱を続ける。それだけ魔法に集中しているという事だ。

「コールドアロー！」

氷の矢がギャスターの腹をかすめる。避けられた！

「死ねえ！」

秋留！

俺は心の中で叫んだ。宙に血が舞った。

……。

「奥の手……だよ」

秋留が首に巻いてた真っ赤なマフラー。そのマフラーが鋭い爪となってギャスターの首筋と腹、そして足に突き刺さっている。

そう、秋留の忠実な僕、ブラッドマントのブラドーだ。

普通のマントと思い込んで装備してしまった装備者の首を絞め、血を吸い尽くすというハズレ装備品だ。秋留はそのハズレ装備品を手懐けていた。

この大陸に来てから全然活躍させてなかったので、すっかり存在を忘れていたが……まさかこういう事態を予測しての……な訳ないな。

「ふ、不可視な超人マツハよ！」

宙に浮いてブラドーに串刺しにされたままのギャスターがそのま

ま呪文を詠唱し始めた

「岩山の巨人ジャイアントロックよ！」

同時に秋留も召喚魔法を唱え始める。この魔法は秋留の十八番だ。同じ召喚魔法と気付いたギヤスターもそのまま呪文の詠唱を続けた。

「その拳で我に仇名す敵を吹き飛ばせ……」

「我の前にその力を示せ……」

最後の呪文発動のタイミングで秋留はブラドーに突き刺していたギヤスターを遠くに放り投げた。

「マッハ・パンチ！」

ギヤスターの魔法の発動の方が早い！ しかもあのパンチは見えないんだ！

「ジャイアント・アーム！」

少し遅れて秋留が魔法を発動した。

目の前に光が広がる。

そして宙を舞うヒーローのような格好をした霊獣、おそらく不可視な超人マッハだろう。姿を見てしまったので、もう不可視ではないが。

秋留の召喚した巨大な岩の腕はマッハを吹き飛ばして啞然としているギヤスターの身体をも吹き飛ばした。

「ぐおおっ！」

辺りの木々や地面をえぐりながら、巨人の拳がギヤスターをどこまでも吹き飛ばしていく。

轟音が止み、辺りの土煙が収まると、気を失ったギヤスターが白眼を剥いて俺の隣に倒れているのが見えた。

巨人の腕が俺の目の前まで来たのは、心配させた俺に対する秋留からのお仕置きだろうか。

「ふう」

秋留がペタンとその場に座り込む。

「だ、大丈夫ですか？」

回復アイテムを持ってきたヌザンクが秋留の元へと駆け寄る。

その秋留が俺の方を指差して何やら言っている。もう意識が保てない。秋留の勇姿……とくと網膜に焼き付けておいたぞ……。

俺の方に走りよってきたヌザンクを見ながら俺は気絶した。

「さて……」

目の前には呪文を唱えられないようにガムテープで口をグルグル巻きにされたギヤスターが岩に縛り付けられている。

それを見下ろす俺達パーティーの面々。

ちなみに傷の酷かった俺は水性の回復薬によって身体中がズブ濡れだが、傷はすっかり良くなった。あのクソジジイめ、回復薬を掛けすぎだ。

「んゝんゝんゝ」

目の前のギヤスターが何やら文句を言っているようだが、ガムテープ越しでは全く伝わらない。

クリアがズズズイと前に歩み出る。

すると突然「バシンッ」とギヤスターの頬に平手打ちを食らわした。

「これは、メルンを悲しませた報いの分……の一発目！」

その後更に四発の平手打ちをギヤスターに浴びせかけ、ようやくクリアは落ち着いたようだ。

「貴方が沢山殺してきた妖精の言葉、姿……今までちゃんと見ていないでしょ？」

ギヤスターは無言だ。

「ルン……」

秋留が後方に声をかけた。秋留の影に隠れてルンが姿を現す。

その姿をきちんと見ようとしないうちにギヤスターにクリアが更に平手打ちのポーズをすると、渋々とギヤスターが目の前のルンを見つめ始めた。

「んんん……ん？」

恐らく「メルン……か？」と言っているのだろう。

顔を見ただけで気付いたという事は、ルンの顔は前世のメルンの顔と同じなのだろう。

苦しそうなギャスターの姿を見たルンが、思いつきガムテープを口から剥がした。

「ぎゃああああ！ 痛ええええええ！」

口の周りが真っ赤に腫れている。

「ギャスターの馬鹿！ 何で妖精狩りなんてしてるのよ！」

ルンがギャスターに抱きつく。

妖精と人間ではサイズが違い過ぎるが……愛おしそうにギャスターもルンを見下ろす。

「俺達の幸せを奪った妖精達が許せなかったんだ……」

「じゃあ私も許せない？」

ルンがギャスターを睨みつける。

「うう……」

「妖精だって生きているの。それぞれ大事な人もいるし家族もある

……それをギャスターは今まで沢山壊してきたのよ！」

腰の入った強烈な聖拳突きがギャスターのミゾオチにクリーンヒットする。……さすが元武道家だ。狙いが正確である。

「そ、そうだな……」

「ギャスターのやったことは、邪妖精と何にも変わらないじゃない！」

再び、聖拳突き。

「ぐ、ぐふう……ご、ごめん……」

ああ、この二人の生前の時の姿が見えてくるようだ。典型的なカカア天下というものだろうか？

「全く……でもこうしてまた再開出来て良かった……」

最後にルンが再びギャスターに抱きついた。

……。

周りを見ると、感動したのかパーティーのメンバーの眼にも涙が浮かんでいる。シープットなどは号泣だ。

「ふむふむ」

長老も妖精狩りを捕らえた事で満足しているようだ。

妖精狩りギヤスター。

人間も数多く殺したギヤスターは治安維持協会に引き渡されて一生を牢獄の中で過ごすのかもしれない。

しかしルンは毎日、ギヤスターに面会に行くんだろうな。

これが愛というものなんだろう。

「……再開シーンの最中悪いんだが……」

俺は武器を構えて辺りを窺った。

「え？ まさか……」

「……囲まれている」

俺が警戒した途端に濃い霧が辺りを包み始めた。これは、最近体験したぞ……。

しかし今回は全員が同じ場所にいる。戦闘員も十分に……。

「……どうしょ、もう魔法力ないよ……」

「え？ 魔法の回復薬もあっただろ？」

秋留の心細い台詞に俺は露骨にうろたえてしまった。

「ヌザンクさんが全部、ブレイブに使ってしまったの」

「アホかー！ 俺は魔法使いかってんだあ！」

俺はパーティーの状態を確認した。

秋留の魔法力がないせいで、ジェットは人形のように岩に腰をかけている。今にも灰に戻ってしまいそうだ。

カリューと紅蓮は何か戦えそうだが、傷が全快していない。

シープットは問題外だし。

ツートンとカーニャアの不思議なサポートは期待できるが、それ程の量はさばけないだろうな。

「ちっ」

何者かの気配が徐々に俺達との距離を狭めてきている。

「この霧は、覚えがある……」

「うん……」

ギヤスターとルンが話している。

やはり、森の中で俺にウダウダと話しかけてきたのは邪妖精テックだったのか。

「クックク……」

何者かの笑い声。

俺が森で聞いたジジイの声と同じだ。

「まさか……妖精に転生してギヤスターと再び一緒になるとはなあ……」

「テックウウウ！」

ギヤスターが叫んだ。しかし相変わらず身体が岩に固定されているため、立ち上がったたりすることは出来ない。

「これはギヤスター君……随分と罪の無い妖精を殺しましたねえ……楽しかったですよ、貴方の変わりっぷりは……」

「この縄を外せええええ！俺にテックを殺させろおおお！」

「落ち着いて！ギヤスター！」

ルンの聖拳突きがギヤスターのミゾオチに入った。

ギヤスターは黙り込んだ。気絶したのかもしれない。

「メルン君は」

「黙れ！クソジジイ！とっとと姿を現せ！」

俺の台詞ではない。ルンの叫びだ。

これが地の台詞なんだろうな。

「……まずは私が丹精込めて作ったギジン達を相手にしてもらいましょうか」

霧の向こうから数体のギジンが姿を現した。何で出来ているのかは分からないが、全身真っ黒だ。

「ちっ」

俺はネカーとネマーを発射し近づいてきていたギジンの頭を吹き飛ばした。

しかし、その頭があつという間に元に戻る。

「操り人形みたいなもんか？　これじゃあ倒せないぞ」

「ガウツ」

「ワオーン」

カリューと銀星がギジンを切り刻んだが、それもすぐに元に戻る。

「お、俺を解放しろ……」

ギヤスターが目を覚ましたようだ。

「何をするつもり？」

傍に寄り添っていたルンが心配そうに言った。また暴れるのを心配しているのだろうか？

「邪妖精テックのために俺が編み出した奥の手がある」

ルンとテックが話している間にも元々傷を負っていたカリューと紅蓮が押され始めた。真っ黒なギジンは厄介にも同じ真っ黒な素材で武器や防具も持っているのだ。

俺達の惨状を見たルンはギヤスターを縛っていたロープを切った。

「……よし！」

ギヤスターはフラフラと立ち上がり、傍に立てかけてあった剣を持った。

「はっ！」

ルンに近づいてきていた黒いギジンを一刀両断にする。

……再生が始まらない？

「この剣は妖精を狩るために作らせた妖刀だ。ギジンも関係無い！」
ギヤスターはそう言うのと辺りのギジンを粉微塵にし始めた。

どこにそんな体力が残っていたのだろうか。

剣さばきもこうしても見ると、カリューの上を行きそうだ。

「クツクツク、いくら斬っても無くなりませんよ……そのギジン達は霧から作った霧のギジンだからの」

完璧に勝ち誇ったテックの笑い声。

コイツには俺もムカついているんだよなあ。

「何とか魔法で霧を吹き飛ばしてみようか？」

秋留がフラフラと立ち上がった。大丈夫だろうか？

「無駄だ、邪妖精テックの発生させるこの黒衣の霧は魔法を吸収してしまふ。何の害も無いんだが、こうしてギジンに使われるとは……」

ギヤスターが襲ってきたギジンを切り伏せて言った。

「じゃ、じゃあ……どうしよう……」

秋留が必死に頭をフル回転させている。

「ここで俺の奥の手を使う時が来たな……」

ギヤスターが更にギジンを切り伏せる。

「その銃士、まだ弾はあるか？」

俺は盗賊だが……だまって頷く。まだ硬貨はある。

「俺がこれから霧を一瞬だけ晴らす。そしたら一番霧の濃い場所に奴がいるはずだ……」

ギヤスターが同時に二体のギジンを切り捨てる。

「任せろ。俺も奴には恨みがタツプリある！」

「よし！　いくぞ、銃士！」

そう言って、ギヤスターが力を溜め始めた。

その間、襲い来るギジン達を何とかネカーとネマーで撃退する。

「ガウウウン」

「ワウウウ」

カリューと紅蓮も頑張っているようだ。

頼むぞ、ギヤスター！

「はああああああっ！」

特に呪文は無かった。

ギヤスターの叫び声と共に、ギヤスターの身体から何かが放出された。

その衝撃で今まで全く向こう側が見えなかった霧が晴れる。霧を失った事によりギジンも一斉に消滅した。

俺はグルリと辺りを見渡した。

そして見つけた。俺達の周りの霧は晴れたが、一部分だけ霧の晴

れない場所……。

俺は音を立てずに後方から木に登った。

木の枝の上にはカブの頭をして、不気味なランプを持った妖精が霧が晴れてしまった事に気付いてオロオロとしていた。

「悪戯が過ぎたな、テック」

俺は言うど、ネカーのトリガを引いた。

「それでも、お前のお陰で俺は、秋留へ気持ち伝える決心が出来たよ」

木の下に落ちた邪妖精テックの死体に向かって言った。

「ギヤスタアアアー！」

俺がパーティーの元へと戻るとルンがギヤスターに抱きついて泣いている所だった。

「？ どうしたん……」

俺はそこまで言って息を呑んだ。

ルンが抱きついていているギヤスターの顔は皺だらけになり髪の毛も真っ白になっていたのだ。もう百歳は楽に超えていそうな見た目になっている。

「せ、生命を吸い取る妖刀で……妖精のパワーを無効化出来るとは思っていたんだ……」

ギヤスターが喋っているが、聞くのが難しい位に声が小さい。

それでもルンには十分な声量のようだ。

「い、今まで、生命を削るような召喚魔法も、た、沢山使ってきたからなあ……」

見ているうちにも、ギヤスターの身体がどんどん小さく、老いていった。

「ギヤスタアアア、死んじゃ嫌だよおおおお」

ルンが号泣している。

ど、どうしたら良いんだ？ どうにかならないのか？

俺は秋留の方を振り返った。

秋留は黙って横に首を振っている。

「さ、最期に……お前を……メルンを助ける事が出来て……」
そして。

ギャスターは息を引き取った。

最期に恋人に出会い、恋人を助ける事が出来たギャスターの死顔は幸せそうだった。

ミルクタウン近くの森で、いつまでも、いつまでも、ルンの泣き声は止む事が無かった……。

エピローグ

「もう出発してしまうのですか？」

ミルクタウンから聖都アームステルへと向かうゲートで俺達を見送るヌザンクが言った。

「寒さが日増しに厳しくなってきたので……」

ブラドーのマフラーをした秋留が答えた。

あれから三日。

俺達は十分な治療と休養をとり、妖精達からの感謝の品を受け取ると出発する準備を始めた。

ちなみに長老からは、感謝の印として新開発した虹色パンを貰った。

確かに旨いのだが……妖精狩りを倒した礼がそれか？

「気をつけて下さいね」

少し元気を取り戻したルンが手を振っている。あれからギヤスターの後を追って自殺までしようとしていたルンだったが、長老の説得により何とか思いとどまったようだ。

ルンはカハクという種類の妖精である。

カハクというのは自殺した者達の魂を受け継いでいる。最期的人格であるメルンの記憶が残っているだけで、その身体はメルンだけのものではないというのだ。

自殺した者達、全員の悲しみや苦しみを背負っている。その気持ちを浄化させるためにも生きなくてはいけない……らしい。

それが長老の嘘なのかは分からないが、その話でルンは少し元気を取り戻した。

「ルンも元気だね」

大切な友達と別れるかのようにクリアが言った。

「クリアも元気で。皆さんも元気で！」

そして俺達はミルクタウンを出発した。

街道を進む途中、ギヤスターと戦った広場を通り過ぎた。小さな墓に沢山の花々が飾られている。

俺達は黙って手を合わせた。

「色々あったな」

「そうだね」

俺と秋留、その他大勢はギヤスターの墓が見えなくなるまで見つめていた。

「ここらで休憩にしましょう」

昼過ぎに適当な広場を見つけたジェットが馬車を止めた。

「秋留、ちよつと良いか？」

俺は思い切って秋留を誘った。

もう頭のテッペンから心臓が飛び出しそうだ。

「え？ うん……」

俺達はパーティーから離れた場所へと歩いていった。少し歩くと崖があり、その向こうには広大な樹海が広がっていた。

「凄い景色だね」

「ああ、そうだな……」

この沈黙も辛いな。

駄目だ、頭が真っ白になる。

「あ、秋留！」

「あはは……。そんな裏声出してどうしたの？」

力が入りすぎていたようだ。

俺は静かに深呼吸をすると秋留に向き直った。太陽の光を浴びて秋留の顔がキラキラと輝いているように見える。

「お、俺……」

「ん？ 何？」

秋留が俯く俺の顔を覗き込んできた。

「何か言いたい事があるの？」

「……お、俺も秋留が危険な目にあったら、命をかけて守る！」

「ふふ、ありがとう」

「? おう……」

あれ? こんな事を告白するつもりじゃなかったんだけどな。言うんだ。

秋留の事が好きだと告白するんだ!

「私もね」

「え!」

勢いをつけている時に急に話しかけられて思わずビクリとしてしまった。

「ブレイブや仲間達が危険な目にあったら、命をかけれるよ。皆、大事な仲間、特別な存在だからね」

「……そうだな。俺達はいつまでも仲間、いつまでも一緒だ……」
「うん!」

俺と秋留は笑顔を交わすと大切な仲間達の待つ広場へと戻っていた。
った。

そう、今はこれで良いんだ。

でもいつかきつと、俺は秋留に想いを伝えよう。……そう長くは、この気持ちを抑える事は出来そうもないが。

「ブレイブ! 秋留お姉ちゃんをどこに連れて行ってたの! まさか、変な事してないでしょうね? ねえ! ねえ! ねえ!」
「うう……」

クリアは特別な存在としては考えたくないな。

いや、ある意味、特別か。

「お二方、丁度良かったですな、お茶の用意が出来ましたぞ」

俺達は寒空の下、暖かいお茶を飲みながら、仲良くこれからの冒険の事について話し合った。

大切な仲間。

特別な存在。

俺は自分があるこの居場所を大事にして行こうと強く心に決めた。

「不思議と幸せそうですね」

「……ああ、俺はこのパーティーが大好きなんだ！」

ジェットの問いに俺は元気良く答えると大きく伸びをした。

さあ、次の目的地に向けて出発だ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0335d/>

盗賊ブレイブ@魔法剣士と妖精の都

2010年10月8日14時48分発行